

# 北堀池遺跡発掘調査報告

— 第三分冊 —

2011.12

三重県埋蔵文化財センター



## 例　言

- 1 当書は、三重県伊賀市（旧・上野市）大内字北堀池・竹之下・中沢に所在する、北堀池（きたほりいけ）遺跡の発掘調査結果の一部を「第三分冊」としてまとめたものである。
- 2 調査は、木津川改修事業に先立って建設省近畿地方建設局（当時）から委託を受け、三重県教育委員会が実施した。
- 3 当遺跡の調査結果報告は、下記のとおりの3分冊に分かれている。なお、昭和52～54年度には調査概要も刊行した。

第一分冊	(1981年刊)	水田跡・大溝・沼沢地・旧河道の遺構と木製品
第二分冊	(1992年刊)	飛鳥時代以降の遺構と遺物、及び付論1～5
第三分冊	(当書)	第一分冊報告分を除く古墳時代以前の遺構と遺物

- 4 現地調査は、三重県教育委員会が21,150m<sup>2</sup>を昭和52（1977）年7月から昭和55（1980）年2月にかけて実施した。
- 5 調査に関しては、三重県教育委員会文化課（当時）の小玉道明が主導し、谷本銳次が調整した。また、伊藤久嗣・伊藤克幸・吉村利男・山下雅春・田中喜久雄・早川裕己・中村信裕・新田洋が現地調査や整理作業を補佐した。

各年度の現場担当者は下記のとおりである。

昭和52（1977）年度	吉水 康夫、駒田 利治、山田 猛
昭和53（1978）年度	中森 英夫、駒田 利治、森前 稔、山田 猛
昭和54（1979）年度	中森 英夫、駒田 利治、森前 稔、山田 猛

- 6 当第三分冊の編集と執筆は、多くの関係者の作業を基に山田猛が担当した。但し、遺物の写真撮影は石井智大が行なった。
- 7 赤嶺秀雄・堀場義平・塙谷格・武田明正・佐々木章・安田喜憲の各氏からは玉稿をいただき、付編1～5として第二分冊に掲載した。
- 8 調査に際しては、下記の体制で指導・協力をいただいた（敬称略）。

調査指導委員	服部 貞蔵・塙谷 格・田中 琢・安田 喜憲・赤嶺 秀雄・福永 正三
調査協力員	森川 櫻男・東川 實信・福地 龍男・松山 謙治・岡本 武和・松鹿 昭二・寺岡 光三

- 9 上記以外に、地元各位や上野市教育委員会（当時）・上野市河川課（当時）をはじめ、中川甫・福井健二・稻垣卓史・田村輝之・山川弘美の諸氏や三重大学・皇學館大學・立命館大学・京都大学・奈良大学・駒澤大学の学生諸君等、多くの方々の協力をいただいた。

- 10 当遺跡の現地調査には、作業員や資材等に関する民間委託（土工委託）を、三重県としては始めて導入した。
- 11 当報告では、全て真北を用いた。なお、当該地域の磁針方位は西偏6度20分（昭和43年）である。また、第VI座標系は0度3分25秒東偏する。
- 12 当第三分冊で使用した遺構の略記号は、下記のとおりである。但し、土器列I・II、大溝、旧河道I・II、土器溜に関しては略記号を用いないこととした。

豎穴住居=S H 井戸=S E 土坑=S K 溝=S D

- 13 調査区は、100m四方の大地区を北西から南東に5区設定し、AからEと名付けた。そして、この各大地区を東西南北に5等分して20m四方の中地区を設け、北西から南東に向けて千鳥式に1から25までの番号を付した。さらに、この中地区を同様に5等分して小地区とし、千鳥式に番号を付した。
- 14 当遺跡の出土遺物と関係資料類は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の概要 .....	1
(1) 立地 .....	1
(2) 調査成果 .....	1
第Ⅱ章 遺構と遺物 .....	1
(1) 壺穴住居 .....	1
SH3001／SH3002／SH3003／SH3004／SH3005／SH3006／SH3007／SH3008／SH3009／ SH3010／SH3011／SH3012／SH3013／SH3014／SH3015／SH3016／SH3017／SH3018／ SH3019／SH3020／SH3021／SH3022／SH3023／SH3024／SH3025／SH3026／SH3027／ SH3028／SH3029／SH3030／SH3031／SH3032／SH3033／SH3034／SH3035／SH3036／ SH3037／SH3038／SH3039／SH3040／SH3041／SH3042／SH3043／SH3044／SH3045／ SH3046／SH3047／SH3048／SH3049／SH3050／SH3051／SH3052／SH3053／SH3054／ SH4055／SH4056／SH4057／SH2058	
(2) その他の遺構 .....	11
SE4502／土器列Ⅰ／土器列Ⅱ／大溝／SK201／SK302／SK402／SK403／SK404／ 土器溜／SD3303／旧河道Ⅰ／旧河道Ⅱ／沼沢地／中段	
(3) その他の遺物 .....	12
第Ⅲ章 概括と課題 .....	13
(1) 遺物に関して .....	13
親指外技法・親指内技法／Ⅱ期の土器／Ⅲ期の土器／Ⅳ期の土器／壺穴住居出土の銘々器／土錘	
(2) 遺構に関して .....	14
放射状掘り方／任意尺による設計／V字溝	
[註] .....	15

## 表 目 次

第1表 壺穴住居一覧 .....	18
第2表 玉類、その他の石製品・土製品一覧 .....	19

## 図 版 目 次

第1図	II～IV期の土器（1）	16
	II～IV期の土器（2）	17
第2図	位置図 1/75,000	20
第3図	地形図 1/7,500	20
第4図	発掘調査区割図 1/150	20
第5図	SH3001～3004実測図 1/100/・1/60・1/30	21
第6図	SH3005～3010実測図 1/100	22
第7図	SH3011～3014・3016・3020実測図 1/100	23
第8図	SH3015・3017～3019・3021・3022・3026・3036・3037実測図 1/100	24
第9図	SH3023～3025・3027・3033・3050実測図 1/100	25
第10図	SH3028～3031実測図 1/100	26
第11図	SH3032・3034・3035・3038・3039・3043実測図 1/100・1/25	27
第12図	SH3040～3042・3044～3046・3048実測図 1/100	28
第13図	SH3047・3049・3051～3053・4057実測図 1/100	29
第14図	SH3054・4055・4056・2058実測図 1/100	30
第15図	SE4502実測図 1/50	30
第16図	土器列I実測図 1/200	31
第17図	土器列II実測図 1/50	31
第18図	大溝実測図 1/200・1/50	32
第19図	SK302・403・404実測図 1/100	32
第20図	土器溜平面図 1/40	33
第21図	土器溜断面図 1/20	34
第22図	SD3303実測図 1/250・1/30	35
第23図	SH3001～3003・3005～3007・3010出土土器実測図 1/4	36
第24図	SH3004出土土器実測図 1/4	37
第25図	SH3009・3011～3014出土土器実測図 1/4	38
第26図	SH3015・3020～3023出土土器実測図 1/4	39
第27図	SH3016・3018出土土器実測図 1/4	40
第28図	SH3024～3027・3029～3032出土土器実測図 1/4	41
第29図	SH3028・3033～3036・3038・3040・3043・3046出土土器実測図 1/4	42
第30図	SH3039・3041・3042・3045・3051・3052出土土器実測図 1/4	43
第31図	SH3047・3049・3053・3054・4055出土土器実測図 1/4	44
第32図	土器列I・II出土土器実測図 1/4	45
第33図	土器列II出土土器実測図 1/4	46
第34図	土器列II、SK302・402・403、SE4502、沼沢地出土土器実測図 1/4	47
第35図	大溝出土土器実測図 1/4	48
第36図	大溝出土土器実測図 1/4	49
第37図	土器溜出土土器実測図 1/4	50
第38図	土器溜出土土器実測図 1/4	51
第39図	土器溜出土土器実測図 1/4	52
第40図	土器溜出土土器実測図 1/4	53
第41図	土器溜出土土器実測図 1/4	54

第42図 土器溜出土土器実測図 1 / 4	55
第43図 土器溜出土土器実測図 1 / 4	56
第44図 土器溜出土土器実測図 1 / 4	57
第45図 土器溜出土土器実測図 1 / 4	58
第46図 土器溜、SD3303、SK201・404出土土器実測図 1 / 4	59
第47図 旧河道 I 出土土器実測図 1 / 4	60
第48図 旧河道 II 出土土器実測図 1 / 4	61
第49図 旧河道 II 出土土器実測図 1 / 4	62
第50図 旧河道 II 出土土器実測図 1 / 4	63
第51図 中段、その他出土土器実測図 1 / 4	64
第52図 その他出土土器実測図 1 / 4	65
第53図 その他出土土器実測図 1 / 4	66
第54図 その他出土土器実測図 1 / 4	67
第55図 玉類、その他の石製品・土製品実測図 2 / 3	68

## 写 真 図 版 目 次

写真図版 1 遺構 (1) 遺跡遠景、昭和52年度調査区西部、昭和52年度調査区東部、昭和54年度調査区、昭和53年度調査区	69
写真図版 2 遺構 (2) SH3001、SH3001の竈、SH3002、SH3003、SH3004、SH3004、SH3005、SH3005	70
写真図版 3 遺構 (3) SH3006、SH3007・3008、SH3007・3008、SH3009、SH3009、SH3010、SH3011、SH3012	71
写真図版 4 遺構 (4) SH3013、SH3014、SH3014の竈、SH3014の竈、SH3014の滑石製臼玉出土状況、SH3015、SH3016、SH3016	72
写真図版 5 遺構 (5) SH3018、SH3018、SH3019、SH3020、SH3021、SH3021の竈、SH3022、SH3023	73
写真図版 6 遺構 (6) SH3024、SH3025、SH3026、SH3027、SH3028、SH3029、SH3030、SH3031	74
写真図版 7 遺構 (7) SH3031の竈、SH3032、SH3033の竈、SH3033の竈、SH3034・SH3043、SH3035、SH3035の竈、SH3039	75
写真図版 8 遺構 (8) SH3038、SH3038の竈、SH3041、SH3041の貯蔵穴、SH3041・SH3042、SH3044・SH3048、SH3045、SH3045	76
写真図版 9 遺構 (9) SH3045の竈、SH3045の貯蔵穴、SH3046、SH3047、SH3049、SH3051、SH3052、SH3053	77
写真図版10 遺構 (10) SH3053、SH3054、SH3054、SH4055、SH4055、SH4056、土器列 I、土器列 I、土器列 II	78
写真図版11 遺構 (11) 土器列 II、土器列 II、SK402、SE4502、SD3303、SD3303重複部分、土器溜、土器溜	79
写真図版12 遺物 (1) 39/40/60/189/260/261/266/270/279	80
写真図版13 遺物 (2) 281/283/287/288/318/328/332/333/341	81
写真図版14 遺物 (3) 353/355/358/380/383/390/397/406/409	82
写真図版15 遺物 (4) 417/418/422/433/434/435/436/438/442	83
写真図版16 遺物 (5) 448/460/467/477/496/502/504/520/521	84
写真図版17 遺物 (6) 522/523/524/525/527/528/529/530/531	85
写真図版18 遺物 (7) 533/534/553/567/571/572/577/584/586	86
写真図版19 遺物 (8) 588/597/598/628/634/637/639/640/646	87
写真図版20 遺物 (9) 649/654/656/657/659/690/691/692/698	88

# 第Ⅰ章 遺跡の概要

北堀池遺跡は、古墳時代の水田や竪穴住居群と、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物群や条里遺構を中心とした遺跡である。当「第三分冊」の報告内容は「例言」に記したとおりであるが、その中心は古墳時代の竪穴住居と各地点から出土した土器である。

## (1) 立地 (第2・3図)

北堀池遺跡(1)は、上野盆地を北西に流れる木津川(長田川)の南西岸に立地する。遺跡の西には岩根川が、東には山の川がそれぞれ北東流して木津川に合流している。

ほとんどの竪穴住居は「上段」と呼んだ景観上河岸段丘を思わせる沖積微高地に占地する。この南東には「中段」が広がり、水田跡や大溝・沼沢地などが見られた。さらに、調査区の北東縁には木津川の氾濫原であり旧河道である「下段」が広がり、一部には土器が大量に投棄された「土器溜」もあった。なお、遺跡の南方にはほぼ同様な地形が続くが、遺構は木津川沿いに集中する傾向がある。

岩根川の対岸には、縄文時代の清水北遺跡(4)が知られている。木津川対岸の久米山古墳群林支群1号墳(5)からは、弥生時代前期の土器が出土している。また、遺跡の南方には、弥生時代後期の土器を出土した山ノ川遺跡(8)や、百数十点の打製

石鏃が採集されている弥生時代の北長野遺跡(9)等が立地している。さらに、木津川の対岸には久米山古墳群(21)が所在する。

## (2) 調査成果 (第1・4図、第1・2表)

縄文時代に関しては、土坑1基と中・後・晚期の土器がわずかに出土しただけである。

弥生時代に関しては、自然の大溝や土器溜・旧河道等から木製品や後期及び中期の土器が、古墳時代前期の遺物と共に出土している。

古墳時代には、水田をはじめ竪穴住居58棟や井戸1基及び竪穴住居群を西で区画するV字溝等が検出された。また、土器溜や大溝・沼沢地・旧河道から古式土師器や木製品が多数出土した。

飛鳥・奈良時代は、横板枠組の井戸と土坑が各1基検出されたのみである。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては、掘立柱建物54棟や柱列・井戸・道・墓坑と条里に沿った溝等が認められた。これらの内には、主屋と副屋・倉等が溝で区画された例が多く見られた。

なお、主だった遺構・遺物の所属期は、弥生時代後期をI期、古墳時代の前期前半をII期、前期後半をIII期、後期をIV期、と略記した。但し、この時期区分は便宜的であり、必ずしも実年代を示していない。

# 第Ⅱ章 遺構と遺物

当分冊で扱う主な遺構は、現代の水田面と同じ高さで「上段」と称した部分に立地した竪穴住居57棟と井戸1基・V字溝1条・土坑5基、水田跡をはじめ大溝や沼沢地の所在した「中段」の竪穴住居1棟と水田跡縁辺の土器列I・II、木津川の氾濫原である「下段」の土器溜と旧河道I・IIである。

なお、大溝は第一分冊で報告済みであるが、遺物の出土状況図が中心であったため、当分冊で土層図を掲載した。

また、遺構に関する計測値は、素掘りであることを考慮して、5cm単位を目処とした。

## (1) 竪穴住居 (第4図、第1・2表)

竪穴住居は、上段の57棟と水田跡東の1棟の計58棟が検出されたが、全て古墳時代に属する。これらのう

ちには詳細な所属期が不確かなものもあるが、前期前半(II期)は13棟、前期後半(III期)は24棟、後期前半(IV期)は21棟と推定した。

平面形は円形に近いものから方形への変化を基調としており、各々の側壁や隅に丸味が残る程度で便宜的に4種に分けた。すなわち、II期には「胴張隅丸方形」と「隅丸方形」、III期には隅に小さく丸味を残して側壁の張り出しがほとんど消えた「隅小丸方形」、IV期には各側壁や隅が直線的な「方形」が主流となっている。平面規模は一辺が5~6mの例を中心に、4m足らずから8m程の例がある。

竪穴住居の建築にあたっては、任意の大きさの方眼を計画線として設定し、この線に沿って主柱や側壁または竈や貯蔵穴の位置を決めたと推定できる例が多い。

主柱は4本が一般的である。したがって、特に表記しない限りは四柱として扱う。主柱のほかに間柱や添柱らしい例もある。側壁付近や床面に壁柱をもつ竪穴住居もある。主柱の掘り方は必ずしも方形ではないが、掘り方の側縁は通常の掘立柱建物のように建物方向を向くのではなく、同心円状と云うべきか、放射状に配されている例が多い。炉や竈は、中央よりもどちらかにやや片寄る場合が多い。竈は平面形が放射状を呈し、基底部のみが残存するためか、煙道部分も含めて側壁から外に張り出すことはない。1個の細長い自然石を床に埋め立てて支石とした例が一般的だが、高壇を倒立させた例もある。周溝は有無両例があり、幅の広い例も見られる。

出土遺物には土器（第23～31図）のほかに、石製や土製の玉類や砥石等の石製品（第55図、第2表）がある。しかし、土錘をはじめとして木製品や金属製品は、竪穴住居からは検出されなかった。

なお、主柱は矩形となるように復元したが、実際に不正四角形の例も存在したであろうことを否定するものではない。また、個別の遺構図の平面規模や主柱の芯々距離は単純に図に基づいて求めたものであり、以下の個別の検討では許容範囲内で改めて推定値を求め、第1表にまとめた。以下の個別説明では要点にとどめ、第1表との重複を避けるように努めた。

なお、個別の遺構図（第5～14図）では、重複した竪穴住居の場合、先行遺構の埋土上面で検出できた輪郭線は破線で表記した。また、東西南北の平面規模が少々違っても、一見しただけでは気付かない程度の場合は、「方形」として扱った。

**S H3001**（第5・23図、第1表） 上段の南東縁近く（D-7区付近）に所在する。

平面は方形を呈し、6.4m四方である。主柱の柱間は四面共に3.4m（=1.7m×2）、主柱から側壁までは各面共に1.5mを測る。したがって、1.7m方眼の計画線を東西・南北に4区画設定して主柱の位置を定め、この計画線のやや内側で側壁を掘り下げたものと推定される。竈や貯蔵穴も、この計画線に基づいて配置されている。なお、北面主柱の中央には小穴があり、間柱かと考えられる。側壁のやや内側に沿って小穴が一部に認められるが、本来は囲繞していたものなら壁柱穴である可能性も考えられる。

重複するSH3002よりも新しく、表面の磨耗した甕（2）

やタタキを施した平底甕（3）はSH3002からの混入かと思われる。方形を呈して竈をもっており、IV期に属する。  
**S H3002**（第5・23図、第1表） 上段の南東縁（D-7区）に所在する。

南側の両隅が失われているものの平面は隅丸方形を呈し、南北5.3m・東西5.1mの規模である。主柱の柱間は南北面が2.7m（=0.3m×9）、東西面が2.4m（=0.3m×8）と復元できる。主柱から各側壁までは南・北両面が1.3mで、西面が1.2m（=0.3m×4）、東面が1.5m（=0.3m×5）である。さらに、側壁の肩沿いの壁柱穴らしい小穴は、主柱から1.3mの位置に並ぶ。したがって、平面設計は0.3m方眼で東西・南北に17区画を設定して主柱の位置を決め、側壁もほぼこれに沿って掘り込まれたと考えられる。但し、東西だけは1区画分を狭くしている。

隅丸方形を呈する平面形と出土遺物（5）から、II期に属すると考えられる。

**S H3003**（第5・23図、第1表） 上段の調査区西縁（D-1区）で、北東隅部分のみが検出された。

貯蔵穴らしい土器の入った土坑と柱穴が認められた。隅は角張った平面形を呈するが、残存部分が少ない。出土した土器からIII期に属すると判断される。

**S H3004**（第5・24図、第1表） 上段の南東部（D-1・2区）に所在する。

隅丸方形を呈し、平面規模は東西8.2m×南北7.7mと当遺跡では最大で、残存深も0.51mと最も深い。竪穴を掘削後に0.1m程埋め戻して床面としている。主柱の柱間は四面共に4.2m（=0.6m×7）である。主柱から各側壁までは、南・北両面が2m、西面が1.8m、東面が1.7mである。間柱が、主柱穴の北面には西から、東面には南から、南面には東から、西面には南から、各々1.8m（=0.6m×3）の位置、すなわち反対側からは2.4m（=0.6m×4）の位置に配されている。また、主柱から1.8m離れた側壁の肩沿いに小穴が認められ、各面に壁柱穴が4本配されていたと推定される。但し、隅にはいずれも認められなかった。以上の事実から、0.6m方眼の計画線を東西・南北共に13区画設定して主柱の位置を決め、側壁もほぼこの計画線に沿って掘り込まれたものと推定される。なお、主柱の掘り方は丸味が強いために判然とはしないが、一般的な掘立柱建物のように建物と方向を揃えるものではなく、建物の中心から放

射状に掘られているらしい。また、南西壁の中央北寄りには床面がやや高くなった部分があり、出入口の可能性もある。

多量の土器や炭化物が認められ、焼失家屋の可能性がある。なお、炉より西の床面には白色粘土が残っていた。装飾的な壺（32・33）や台付甕（38・39）・ミニチュア土器（57～59）等があるほか、やや小型の高壺の類（43～48・50～56）の多さが目に付く。なお、35と41は同一個体の可能性が高い。隅丸方形の平面形と出土した土器から、Ⅱ期に属すと考えられる。

**S H3005**（第6・23図、第1表） 上段の南東部（D-2区）に所在する。

平面はほぼ方形を呈し、5.2m四方の規模である。主柱の柱間は東西が2.4m（=0.4m×6）、南北が2.0m（=0.4m×5）である。主柱から側壁までは西面が1.3m、東面と南面が1.5m、北面が1.7mを測る。したがって、東・西両面で $1.3m + 1.5m = 0.4m \times 7$ となり、南・北両面で $1.7m + 1.5m = 0.4m \times 8$ となる。おそらく、0.4m方眼の計画線を東西・南北に13区画設定して主柱を配し、側壁もこの計画線近くに決めたのである。なお、主柱穴は重複していることから、建替えの可能性もある。また、北と北東の柱穴は柱痕跡と共に掘り方も検出されており、放射状に配されている。

床面には炭化物や焼土が広がっており、焼失したものと考えられる。土師器の壺6点（10～15）や須恵器（17）が出土している。但し、高壺（16）は混入品であり、深い壺（10）もその可能性がある。竈は明らかではないが、側壁の各辺は直線的で隅も丸味を持たず、須恵器も出土していることから、Ⅳ期に属する。

**S H3006**（第6・23図、第1表） 上段の南東部（D-2区）に所在する。

平面は方形を呈し、7.0m四方とやや大規模である。主柱の柱間は3.5m（=0.25m×14）四方である。主柱から各側壁までは各面共1.75m（=0.25m×7）である。したがって、0.25m方眼の計画線で東西・南北に28区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと考えられる。なお、主柱穴は放射状に配されている。また、竈は北面の中央に設置されている。0.75m前後もある幅広い周溝が特徴的である。

平面が方形を呈して竈もあることから、Ⅳ期に属する。

**S H3007**（第6・23図、第1表） 上段の南東部（C-

22・D-2区）に所在する。

SH3008よりも西に少し振るが、ほとんど同じ位置で重複して建て替えられている。5.4m四方であり、周溝をもつ。隅に少し丸味を残す方形を呈するが、四主柱は長方形に配されている。各面の柱間は東西が2.8m（0.7m×4）、南北が2.1m（0.7m×3）である。主柱から各側壁までは、西面が1.5m、東面が1.1m、北面が1.55m、南面が1.75mとなる。詳細は不明であるが、0.7m方眼の計画線上に主柱を配し、側壁もほぼ計画線に沿って掘られたものと思われる。なお、主柱の掘り方は放射状に配されている。焼土は床面に2箇所残るが、南側のものがよく焼けており、炉と判断された。

床面には炭化物や土師器が広がっており、焼失した可能性がある。重複するSH3008よりも新しく、SH3006よりも古い。また、平面形が隅に丸味を残す方形を呈することと、若干の混入もあるが出土土器から、Ⅲ期と推定される。

**S H3008**（第6図、第1表） 上段の南東部（C-22・D-2区）に所在する。

大きく重複するSH3007によって壊されており、詳細は明らかでない。平面はSH3007と同様に隅が少し丸味を残す方形を呈しており、南北5.7m、東西5.4m程の規模である。

SH3007は当遺構の建て替えと考えられる。また、SH3006・3007・3013・3019より先行すること、及び隅に丸味を残す方形を呈することから、Ⅲ期と推定される。

**S H3009**（第6・25図、第1表） 上段の南東縁寄り（D-2・3・8区付近）に所在する。

平面は隅に少し丸味を残す方形を呈し、東西5.5m、南北4.6mの規模であるが、東面が斜行するために平面形は不正四角形を呈する。主柱の柱間は、四面共に2.2m（=0.55m×4）である。主柱から各側壁までは、北面と南面が1.20m、西面が1.65m（=0.55m×3）である。また、東面は北側で1.85m、南側で1.25mであり、平均すると1.65m（=0.55m×3）となる。さらに、側壁沿いの床面に小穴が並んでおり、壁柱穴の可能性がある。この小穴は、主柱から北面で0.55m、南面と西面及び東面の平均で1.1m（=0.55m×2）の位置に並ぶ。以上の事実から、0.55mの方眼で東西10区画、南北8区画を設定して主柱や壁柱の位置を決め、この外側に沿って側壁を掘り下げたものと推定される。なお、

柱掘方の明瞭な北東の主柱穴は、放射状に配されている。

小型の高壙と壺各3点(64~69)やミニチュア土器2点(70・71)等が出土しており、Ⅲ期に属する。

**S H3010**(第6・23図、第1表) 上段の南東縁(D-3区)に所在する。

平面は隅に少し丸味を残す方形を呈し、東西4.8m・南北4.7mの規模である。柱や炉等不明だが、南辺中央に貯蔵穴が認められた。

出土遺物(31)はわずかだが、その平面形からⅢ期に属すると推定される。

**S H3011**(第7・25図、第1表) 上段の調査区西縁(C-21区)に所在する。

西半分は失われているが平面は矩形を呈し、南北4.95m・東西3.8m以上の規模である。主柱柱間は四面共2.75m(=0.55m×5)を測る。主柱から各側壁までは北面が1.15m、南面が1.05mである。したがって、 $1.15m + 1.05m = 0.55m \times 4$ となる。以上の事実から、東西は不明だが、0.55m方眼で南北に9区画を設けて主柱の位置を決め、この計画線に沿って側壁を掘り下げたものと推定される。なお、東面周溝沿いの床面には小穴があり、壁柱穴の可能性もある。

方形を呈するらしい平面形とSH3016よりも新しいことから、Ⅳ期に属すると推定される。したがって、小型器台(73)はSH3016からの混入かと考えられる。

**S H3012**(第7・25図、第1表) 上段の中央南東寄り(C-22区)に所在する。

平面はやや台形気味の方形で、6.0m四方である。各面の主柱の柱間は3.0m(=0.5m×6)を測る。主柱から各側壁までは南面がやや狭く見えるが、平均して1.5m(=0.5m×3)と復元できる。したがって、0.5m方眼で東西・南北に12区画を設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決定したものと推定される。なお、主柱の東面以外には小穴があり、間柱かと思われる。また、竈の両脇と西面中央北寄りの壁際に土坑があるが、どれが貯蔵穴か特定できない。

平面が方形を呈して竈もあることから、Ⅳ期に属する。  
**S H3013**(第7・25図、第1表) 上段の中央南東寄り(C-22区)に所在する。

平面はほぼ方形を呈し、南北5.75m・東西5.6mの規模である。主柱の柱間は南北が3.15m(=0.35m×9)、東西が2.8m(=0.35m×8)である。主柱から側壁ま

では南・北両面が1.3mで、東・西両面が1.4m(=0.35m×4)である。おそらく、0.35m方眼で南北に17区画、東西に16区画を設定して計画線としたのであろう。但し、南北の側壁は計画線よりもやや内側にしたものと復元される。なお、各面の主柱間には1~2の小穴があり、間柱かと思われる。また、主柱の掘り方は放射状に配されている。竈の両脇と南面中央東寄りの壁際に土坑があるが、どれが貯蔵穴か特定できない。

重複するSH3007・3008・3017・3019よりも新しく、須恵器(77・78)も出土しており、Ⅳ期に属する。

**S H3014**(第7・25・55図、第1・2表) 上段の中央南東寄り(C-22・23区)に所在する。

平面は方形を呈し、7.2m四方の規模である。主柱の柱間は東西が4.0m(=0.2m×20)、南北が3.6m(=0.2m×18)である。主柱から各側壁までは東・西両面が1.6m(=0.2m×8)、南・北両面が1.8m(=0.2m×9)を測る。以上の事実から、全体に0.2m方眼の計画線を東西・南北に36区画設定して主柱や壁柱を配し、側壁を掘り下げたのであろう。なお、南面中央には間柱の可能性のある小穴がある。また、周溝よりも内側の床面で主柱から1.1~1.4mの位置に小穴が並んでいる。この小穴は壁からはやや離れてはいるが、壁柱と同様な性格のものと考えられる。さらに、主柱の掘り方は放射状に配されている。竈の両脇と南面中央西寄りの壁際に土坑があるが、どれが貯蔵穴か特定できない。

土器類(79~83)と共に、西面周溝近くの床面から滑石製臼玉(705~753)が数珠繋ぎ状態で検出され、北面西側の周溝肩から砥石(778)も出土している。これらの遺物と、重複するSH3019・3020よりも新しく、竈を備えて方形を呈する点から、Ⅳ期と判断される。

**S H3015**(第8・26・55図、第1・2表) 上段の中央東寄り(C-23区)に所在する。

平面は方形を呈し、4.7m四方である。主柱の柱間は南北が2.1m(=0.3m×7)、東西が1.8m(=0.3m×6)を測る。主柱から各側壁までは北面が1.4m、南面が1.2m(=0.3m×4)、西面が1.5m(=0.3m×5)、東面が1.4mを測る。したがって、0.3m方眼で東西・南北に16区画を設定して主柱の位置を決定し、この計画線に沿って側壁を掘り下げたものと推定される。但し、北面と東面の側壁はやや内側に掘っている。なお、西面中央と南北両隅の側壁近くの床面には小穴

が認められ、壁柱が廻っていた可能性がある。

須恵器（85～87）等と共に、南西の床面から滑石製紡錘車（775）が、南西の小穴からは滑石製白玉（754）が出土した。これらの遺物と、重複するSH3021・3022・3036・3037よりも新しく、竈を備えて方形を呈することから、IV期と判断される。

**SH3016**（第7・27図、第1表） 上段の調査区西縁（C-21区）に所在する。

西部は現代の水路に、南部はSH3011に削平されているが、平面は胴張の隅丸方形を呈し、4.5m四方である。主柱の柱間は南北が2.0m（=0.25m×8）、東西が1.75m（=0.25m×7）と推定される。主柱から各側壁までは北面も東面も1.25m（=0.25m×5）程度である。以上の事実から、全体に0.25m方眼の計画線を南北に18区画・東西に17区画設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決めたものと推定できる。なお、北面の主柱掘り方は放射状に配されている。

古式土師器（115～118）と共に、掲載できなかつたがカゴメ土器片も出土している。土師器の壺（119）や須恵器（120）はSH3011からの混入と思われる。これらの遺物と、重複するSH3011よりも先行し、平面が胴張隅丸方形を呈することから、II期と判断される。

**SH3017**（第8図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-22区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した長方形を呈し、南北4.7m以上、南北4.0mの規模である。南寄りに炉を残す以外は不詳である。

重複するSH3018よりも新しく、SH3013よりも先行することから、III期と判断される。

**SH3018**（第8・27図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-21・22区）に所在する。

平面は隅丸方形を呈し、5.6m四方である。主柱の柱間は四面共に2.7m（=0.3m×9）を測る。主柱から各側壁まではいずれも1.45mであり、東・西も南・北も各々の両面合計は $1.45m \times 2 = 0.3m \times 9$ となる。以上の事実から、0.3m方眼の計画線を東西・南北に設定して主柱の位置を決め、この計画線にほぼ沿って側壁も掘り込まれたものと推定される。なお、周溝沿いの床面に小穴が並んでいるようであり、あるいは壁柱と同様な性格のものかと考えられる。なお、掘り方が検出されている東側の主柱は、丸味が強い放射状の配置傾向が窺える。炉の

ほかに、中央東寄りの床面に焼土の広がりが見られた。

出土土器は、甕（121～125）や中型の鉢（126・127）のほかに、小型の高壺や器台・鉢（128～138）の多さが目立つ。これらの遺物と、SH3018に先行して平面が隅丸方形を呈する点から、II期と判断される。

**SH3019**（第8図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-22区）に所在する。

平面は方形を呈するらしいが重複する竪穴や土坑に削平されているため、全形や規模は不明である。柱穴ほかの施設も明らかではない。

重複するSH3007・3008よりも新しく、SH3013・3014よりも先行することから、IV期かと推定される。

**SH3020**（第7・26図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-22・23区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、東西規模は東西5.0m、南北4.4m以上である。主柱の柱間は四面共2.0m（=0.5m×4）と推定できる。主柱から各側壁までは東・西両面が1.5m（=0.5m×3）、北面が1.4mを測る。したがって、0.5m方眼の計画線を設定して主柱を配し、側壁の位置を決めたのであろう。但し、北面の側壁はやや内側に掘られている。なお、主柱の掘り方は放射状に配されている。炉や竈は認められなかった。

南東の貯蔵穴らしい土坑等から土師器（96～99）が出土しており、重複するSH3014よりも先行することから、III期と推定される。

**SH3021**（第8・26図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-23区）に所在する。

平面は方形を呈し、南北5.0m、東西4.8mである。主柱の柱間は南北が2.8m（=0.4m×7）、東西が2.4m（=0.4m×6）である。主柱から側壁までは南・北両面が1.1m、東・西両面が1.2m（=0.4m×3）である。これらの事実から、全体に0.4m方眼の計画線を東西・南北に設定して主柱の位置を決めたと考えられる。但し、南・北両面の側壁は計画線よりやや内側で掘り下げたのであろう。なお、竈の両脇と南西隅に土坑があるが、どれが貯蔵穴か特定できない。

SH3015に先行するがSH3022・3036・3037よりも新しく、出土遺物や竈を備えて方形を呈する点から、IV期と判断される。

**SH3022**（第8・26図、第1表） 上段の中央南東寄り（C-23・D-3区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、全体は東西7.5m、南北7.0mの規模である。4本の主柱は矩形に復元し難くて疑問も残るが、柱間は、東西・南北共に4.0m (=0.25m×16) を測る。主柱から各側壁までは、東・西両面が1.75m (=0.25m×7)、南・北両面が1.5m (=0.25m×6) である。したがって、0.25m方眼の計画線を東西30区画、南北は28区画設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと推定される。なお、南面と西面の側壁肩には壁柱穴かと思われる小穴がある。

土師器の甕や高坏（100～106）と共に、小型の壺（107～113）が目に付く。これらの遺物と、重複するSH3037よりも新しく、SH3015・3021よりも先行することから、Ⅲ期と判断される。

**SH3023**（第9・26図、第1表） 上段の中央東寄り（C-17・22区）に所在する。

隅に丸味を少し残した方形の平面形を呈しており、東西4.8m、南北4.6mの規模である。主柱の柱間は四面共2.0m (=0.2m×10) である。主柱から各側壁までは西面で1.5m、東面で1.3m (=1.5m+1.3m=0.2m×14)、北面で1.4m、南面で1.2m (=1.4m+1.2m=0.2m×13) を測る。以上の事実から、0.2m方眼の計画線で東西に24区画、南北に23区画設定し、この計画線にしたがって主柱と側壁を配したものと推定される。なお、南面と西面の主柱中央には間柱らしい小穴がある。さらに側壁付近に小穴が見られ、壁柱の可能性もある。床面と貯蔵穴の埋土中層には炭化物が認められた。

平面が隅に丸味を少し残した方形を呈することと出土した高坏（114）から、Ⅲ期に属する推定される。

**SH3024**（第9・28図、第1表） 上段の中央東寄り（C-18・23区付近）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈しており、南北4.3m、東西4.2mの規模をもつ。中央北寄りに炉、南東隅に貯蔵穴が認められるが、柱穴は不明である。

SH3033よりも古く、隅に丸味を少し残した方形を呈するが、出土した土器（140～147）からⅣ期かと思われる。

**SH3025**（第9・28図、第1表） 上段の中央東寄り（C-18・23区）に所在する。

平面が隅に丸味を少し残した方形を呈しており、南北5.6m、東西5.5mの規模である。主柱の柱間は四面共2.5m (=0.5m×5) である。主柱から各側壁までは北面が1.5m (=0.5m×3)、南面が1.6m、東・西

両面が1.5mになる。したがって、0.5m方眼の計画線を東西・南北に11区画設定し、この計画線にしたがって主柱と側壁を配したものと推定される。但し、南面は計画線よりもやや外側に掘られている。なお、主柱から0.9m程の各隅に柱穴があり、北面や東面にはさらに側壁沿いに小穴が並ぶ傾向が窺える。また、主柱の掘り方は放射状に配されている。北面西寄りの土坑は後世のものである。焼土類は認められなかった。

平面が隅に丸味を少し残した方形を呈することと出土した土器（148～150）から、Ⅲ期に属すると推定される。  
**SH3026**（第8・28図、第1表） 上段の東縁（C-23区）に所在する。

直線的な周溝がL字形に残存していた。周溝の残存長さは南北が7.0m、東西が4.2mである。このほかに南西の主柱らしい柱穴も認められた。

須恵器（152）が出土したことと、方形を呈するらしい平面形から、Ⅳ期と判断される。

**SH3027**（第9・28・55図、第1・2表） 上段の中央（C-17区付近）に所在する。

平面は方形を呈し、4.55m四方の規模をもつ。主柱の柱間は四面共1.95m (=0.65m×3) である。主柱から各側壁まではいずれも1.3m (=0.65m×2) を測る。以上の事実から、0.65m方眼の計画線で東西・南北に7区画設定し、主柱や壁柱を配したのであろう。なお、周溝よりも内側の床面で主柱から東西で1.1m、南北で1.0mの位置に小穴が並んでいる。これは壁からはやや離れてはいるが、壁柱の一種と考えられる。また、南面の主柱穴は放射状の傾向が窺える。竈の東脇と西面の南北に土坑があるが、どれが貯蔵穴か特定できない。

土師器（155～160）や須恵器（161）と共に、勾玉（774）や石製双孔円盤（776・777）も出土した。これらの出土遺物と竈を備えて方形を呈する点から、Ⅳ期の所産と判断される。

**SH3028**（第10・29図、第1表） 上段の中央（C-16・17区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残したやや不正の方形を呈しており、東西5.3m、南北4.8mの規模である。主柱や周溝は明らかでないが、中央東寄りに炉、南東隅に貯蔵穴が認められた。

床面に炭化物があり、焼失した可能性がある。平面が隅に丸味を少し残したやや不整の方形を呈すること

と、出土した土器（172）から、Ⅲ期と判断される。

**S H3029**（第10・28図、第1表） 上段の中央（C-16区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、東西4.55m、南北4.1mの規模である。主柱の柱間は東西が2.25m（=0.25m×9）、南北が2.0m（=0.25m×8）を測る。主柱から各側壁までは東・西両面が1.15m、南・北両面が1.05mである。したがって、0.25m方眼の計画線を東西・南北に設定し、この計画線に沿って主柱の位置を決めたものと推定される。但し、側壁はやや計画線の内外に掘られている。なお、東面中央には間柱の可能性のある小穴がある。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅲ期かと推定される。

**S H3030**（第10・28図、第1表） 上段の中央（C-17区）に所在する。

東西5.3～5.7m、南北5.25mの規模をもち、平面は隅丸だがやや台形気味である。主柱の柱間は東西が3.15m（=0.35m×9）、南北が2.8m（=0.35m×8）を測る。主柱から各側壁までは、西面と北面が1.05m（=0.35m×3）、東面と南面が1.4m（=0.35m×4）を測る。おそらく、0.35m方眼の計画線を東西・南北に設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決めたものであろう。幅が1m近くという広い周溝は特徴的である。

出土遺物（170）と隅丸方形を呈することから、Ⅱ期かと推定される。

**S H3031**（第10・28図、第1表） 上段の中央（C-17区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈しており、3.9m四方の規模をもつ。主柱の柱間は四面共1.8m（=0.3m×6）である。主柱から各側壁までは、西面と南面が0.9m（=0.3m×3）、東面と北面が1.2m（=0.3m×4）を測る。おそらく、0.3m方眼の計画線を設定して東西・南北に13区画設定し、主柱や側壁の位置を決めたものであろう。

平面形が隅に丸味を少し残した方形を呈しているが、竈を備えていることや出土した4点の壺類（162～165）から、Ⅳ期と判断される。

**S H3032**（第11・28図、第1表） 上段の東縁（C-18・23区）に所在する。

北西部を削平されているが、北にやや広がり気味の

隅丸方形を呈する。南北4.8m、東西4.4mの規模である。南東の主柱穴が不明だが、柱間は2.4m（=0.4m×6）四方である。主柱から各側壁までは南・北両面が1.2m（=0.4m×3）、西面が1.2m（=0.4m×3）、東面が0.8m（=0.4m×2）を測る。おそらく、0.4m方眼を南北に12区画、東西に11区画設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決めたものであろう。なお、主柱の掘り方は放射状に配置した傾向が窺える。

床面に炭化物が認められ、消失した可能性がある。出土した土器類（166～169）と平面が隅丸方形を呈することから、Ⅱ期と推定される。

**S H3033**（第9・29図、第1表） 上段の中央東寄り（C-18・23区）に所在する。

南部をSH3024に削平されているが、平面は方形を呈する。東西は4.3mで南北は4.1m程の規模である。主柱の柱間は四面共2.0m（=1.0m×2）である。主柱から各側壁までは西面が1.1m、東面と北面が1.2m、南面が0.9m以上である。但し、各々の隅までは約1.0mである。したがって、約1.0m方眼の計画線を東西・南北に設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決めたものであろう。なお、東面と西面の北部分にはベッド状の高まりが認められた。

IV期かと思われるSH3024よりも新しく、平面が方形を呈して竈を備えていることや出土した土器（173）から、IV期と判断される。

**S H3034**（第11・29図、第1表） 上段の中央東縁（C-18区）に所在する。

南部をSH3043に削平されているが、隅に丸味を少し残した方形の平面形を呈する。東西は4.0m以上、南北は3.2m以上の規模である。主柱や周溝は不明だが、中央付近に炉が認められた。床面には炭化物があり、焼失した可能性がある。

SH3043よりも新しく、隅に丸味を少し残した方形の平面形を呈することと出土土器から、Ⅲ期と判断される。

**S H3035**（第11・29・55図、第1・2表） 上段の調査区中央西縁（C-16区）に所在する。

平面は方形を呈し、5.25m四方の規模である。主柱の柱間は四面共2.75m（=0.25m×11）である。主柱から各側壁まではいずれも1.25m（=0.25m×5）を測る。おそらく、0.25m方眼の計画線で東西・南北に21区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたものであろう。

なお、主柱の掘り方は放射状に配されている。また、竈には支石の代わりに高坏（189）が倒立させてあった。床面には炭化物があり、焼失した可能性がある。

土器類（184～191）のほかに、北西部の床面から滑石製臼玉（755～766）が出土した。Ⅲ期のSH3039より新しく、竈があり方形を呈することからⅣ期とした。

**SH3036**（第8・29・55図、第1・2表） 上段の南東部（C-23区）に所在する。

SH3021によって南西部を削平されているが、平面は隅に丸味を少し残した方形の平面形を呈し、東西が6.0m、南北が5.4mである。主柱の柱間は東西が3.0m（=0.3m×10）、南北が2.7m（=0.3m×9）を測る。主柱から側壁までは、東・西両面が1.5m（=0.3m×5）である。南・北両面は1.35mであり、 $1.35m \times 2 = 0.3m \times 9$ とも復元できる。したがって、0.3m方眼の計画線で東西に20区画、南北に18区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたのであろう。なお、炉や竈は認められなかった。

土器類（174・175）と共に、東面中央南寄りの側溝上から土製丸玉（785）が出土している。これらの遺物と、重複するSH3037よりも新しくてSH3015・3021・3022よりも先行し、平面形も隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅲ期に属すると推定される。

**SH3037**（第8図、第1表） 上段の南東部（C-23区）に所在する。

SH3021やSH3036ほかによって大きく削平されているが、平面は隅に丸味を少し残した方形を呈する。全体の規模は南北が5.9m以上、東西が4.3m以上である。なお、柱穴や竈等は不明である。

重複するSH3015・3021・3022・3036よりも先行し、平面形も隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅲ期に属すると推定される。

**SH3038**（第11・29図、第1表） 上段の中央（C-11区付近）に所在する。

平面はややいびつな方形を呈するが、東西・南北共に5.4mの規模である。主柱の柱間は四面共に3.0m（=0.6m×5）である。主柱から各側壁までは東・西両面が1.2m（=0.6m×2）である。また、北面は1.0m、南面は1.4mであることから、南・北両面の合計は $1.0m + 1.4m = 0.6m \times 4$ となる。したがって、0.6m方眼の計画線で東西・南北に9区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと推定される。なお、主柱

の掘り方は放射状に配されている。

出土した土器には混入品（196）もあるが、総体的に後期のものである。また、重複するSH3039よりも新しく、竈を備えて方形を呈する点から、Ⅳ期と判断される。

**SH3039**（第11・30図、第1表） 上段の中央（C-11・16区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残したやや長方形を呈し、東西5.3m、南北4.6mの規模である。柱や竈等は不明だが、中央東寄りに炉、南東隅に貯蔵穴が認められた。

重複するⅣ期のSH3035やSH3038よりも先行し、竈は持たないこと及び出土した土器（200～208）から、Ⅲ期と推定される。

**SH3040**（第12・29図、第1表） 上段の中央（C-12区）に所在する。

平面は方形を呈し、東西5.4m、南北5.1mの規模である。主柱の柱間は東西が3.0m（=0.3m×10）、南北が2.7m（=0.3m×9）である。主柱から各側壁まではいずれも1.2m（=0.3m×4）を測る。また、竈は北面の東から四分の2区画目の中に納まる。したがって、0.3m方眼の計画線で東西に18区画、南北に17区画を設定し、主柱や側壁及び竈の位置を決めたものと推定される。

出土した土器類（181～183）と竈を備えて方形を呈することから、Ⅳ期と判断される。

**SH3041**（第12・30図、第1表） 上段の中央（C-12・17区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、東西3.85m、南北3.7mの規模である。主柱らしい小穴が検出されたが不確実である。中央に西寄りに炉、北東隅に貯蔵穴が認められた。床面に炭化物が広がり、焼失した可能性がある。

隅に丸味を少し残した方形を呈して竈も無いが、SH3042よりも新しいことと出土土器から、Ⅳ期と判断される。

**SH3042**（第12・30図、第1表） 上段の中央西寄り（C-12・17区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈しており、7.5m四方の規模である。主柱の柱間は東西4.2m（=0.3m×14）、南北3.9m（=0.3m×13）を測る。主柱から各側壁までは西面が1.9m、東面が1.4mであり、両面の合計は $1.9m + 1.4m = 0.3m \times 11$ となる。また、北面は1.5m（=0.3m×5）、南面は2.1m（=0.3m×7）である。したがって、0.3m方眼で東西・南北に25

区画設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと推定される。なお、主柱の掘り方は放射状に配されている。また、南面中央の2段になった土坑が貯蔵穴と推定される。

重複するSH3041よりも先行していることや出土した土器類（220～223）から、Ⅱ期と推定される。

**SH3043**（第11・29図、第1表） 上段の中央東縁寄り（C-18区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、4.4m四方の規模である。主柱の柱間は北西が不明だが、2.2m（=0.55m×4）四方と推定される。主柱から各側壁まではいずれも1.1m（=0.55m×2）を測る。したがって、0.55m方眼の計画線で東西・南北に8区画設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと推定される。なお、中央西寄りに炉がある。床面には炭化物が認められ、焼失した可能性がある。

出土土器は少ないが（198）、重複するⅢ期のSH3034よりも先行し、隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅱ期と推定される。

**SH3044**（第12図、第1表） 上段の中央東縁寄り（C-18区）に所在する。

重複するSH3048に削平されて西面と南面の一部を残すのみだが、平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、東西3.45m、南北2.6m以上の規模をもつ。SH3048と違って周溝を持つが、柱穴や炉等は明らかではない。なお、中央南西寄りにある炉は2層を成しており、SH3048と同一地点に営まれたと考えられる。

重複するSH3048はこのSH3044の建て替えと考えられることと、平面が隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅲ期と判断される。

**SH3045**（第12・30図、第1表） 上段の中央北寄り（C-7区）に所在する。

平面は方形を呈し、南北4.0m、東西3.5mの規模である。主柱は南面の2穴以外が判然としないが、柱間は南北が2.0m（=0.25m×8）、東西が1.75m（=0.25m×7）と推定される。主柱から各側壁までは北面が1.25m（=0.25m×5）、東面と南面が0.75m（=0.25m×3）、西面が1.0m（=0.25m×4）を測る。したがって、0.25m方眼の計画線で南北16、東西14の区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたものと推定される。

なお、南面と東面には間柱の可能性がある小穴も見られる。さらに、西面には壁柱穴らしい小穴が残る。

東面の中央に竈、北東隅に貯蔵穴が営まれている。貯蔵穴は2段掘りになっている。床面には炭化物があり、焼失した可能性がある。

竈をもち方形を呈することや出土土器（224～229）から、Ⅳ期と判断される。

**SH3046**（第12・29図、第1表） 上段の中央（C-12区）に所在する。

削平が著しいが平面は方形を呈し、4.5m四方の規模をもつ。主柱の柱間は南北が2.1m（0.3m×7）、東西が1.8m（0.3m×6）である。南・北面の中央にも柱穴があるが、主柱よりも掘り方が大きくて東・西両面共に整然と配置されていることから、間柱ではなくて主柱が2間配されていると理解される。主柱から各側壁までは南・北両面が1.2m（0.3m×4）、西面が1.5m（0.3m×5）、東面が1.2mとなる。やはり、0.3m方眼で東西・南北に15区画を設定し、主柱や側壁の位置を決めたものであろう。なお、北面の中央やや東寄りに竈跡らしい焼土が残り、南東隅には貯蔵穴が営まれている。

出土した高坏（199）及び平面が方形を呈することや竈があるらしいことから、Ⅳ期かと推定される。

**SH3047**（第13・31図、第1表） 上段の中央北寄り（C-7・12区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈しており、東西5.0m、南北4.7mの規模である。北面の2柱穴は主柱かと思われるが、南面に対応するものが確認できなかつた。この北面の柱間は3.0mで、主柱から東・西両面の側壁までは1.0mを測る。おそらく、東西・南北に1.0m程の方眼を5区画設定し、この計画線に沿つて建てたものであろう。なお、側壁には所々に小穴の痕跡が認められ、壁柱が設けられていた可能性がある。東面中央に焼土が見られたが、竈ではない。

なお、埋土の下層には炭化物が目立ち、中層を隔てた上層からは鉄滓が出土した。出土した土器（242～247）と、平面が隅に丸味を少し残した方形を呈することから、Ⅲ期と推定される。

**SH3048**（第12図、第1表） 上段の中央東寄り（C-18区）に所在する。

南西部が失われているが、平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、南北4.2m、東西3.8mの規模である。重複するSH3044とは違って周溝をもたない。南面に2主柱穴を残すらしく、この柱間は1.9mである。主柱

から各側壁までは東・西・南面共に0.65mとなる。なお、中央南西にある炉は焼土が2層を成しており、SH3044と同一地点に営まれたと考えられる。

重複するSH3044を削平しており、SH3048はSH3044を建て替えたものと考えられる。隅に丸味を少し残した方形を呈しており、Ⅲ期と判断される。

**SH3049** (第13・31図、第1表) 上段の中央東寄り (C-17・18区) に所在する。

平面は隅丸方形を呈し、南北4.15m、東西4.0mの規模である。床面に小穴はあるが、どれが主柱か判然としない。南東隅の貯蔵穴は2段に掘られている。

粗いハケを施した甕(249)や小型器台(250)が出土していることと、隅丸方形を呈することから、Ⅱ期に属すると判断される。

**SH3050** (第9図、第1表) 上段のやや東寄り (C-18区) に所在する。

全形は明らかではなく、焼土と支石及びこれに伴う土師器片を検出したのみであった。焼土は支石の西側に広がっており、東面に設けられたものと推定できる。したがって、Ⅲ期のSH3025と重複していたと思われる。

竈を備えていることから、Ⅳ期と判断される。

**SH3051** (第13・30図、第1表) 上段の中央東寄り (C-13・18区) に所在する。

平面は北側でやや狭い略方形を呈し、隅に丸味を少し残す。南北4.1m、東西4.0mの規模をもつ。南面は不明であるが、北面は柱間2.65mの2穴があり、側壁までは東・西・北面が共に0.65mである。但し、その他の部分の側壁は張り出し気味でもう少し広い。おそらく0.65mの方眼を6区画設定し、この計画線に沿って主柱を建て、側壁はこの線より張り出し気味に掘ったものと考えられる。また、中央には間柱の可能性のある小穴がある。なお、炉はほぼ中央に、貯蔵穴は南東隅に設けられている。

平面が隅に丸味を少し残した方形を呈する点や出土土器(209)から、Ⅲ期と推定される。

**SH3052** (第13・30図、第1表) 上段の中央東縁 (C-13区) に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、4.5m四方の規模である。主柱の柱間は四面共2.0m (=0.25m×8)である。主柱から各側壁まではいずれも1.25m (=0.25m×5)を測る。したがって、0.25m方眼で東西・

南北に18区画設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決定したものと推定される。なお、南面の2主柱は建て替えの可能性がある。また、主柱より外側にも小穴が存在するが、規則性は認められなかった。

隅に丸味を少し残した方形を呈し、竈ではなく炉であることや出土した高杯(210)から、Ⅲ期と判断される。

**SH3053** (第13・31図、第1表) 上段の中央東縁寄り (C-13・14区) に所在する。

平面は方形を呈し、南北4.8m、東西4.5mの規模である。主柱の柱間は南北が2.7m (=0.3m×9)、東西が2.1m (=0.3m×7)である。主柱から各側壁までは北面が0.9m (=0.3m×3)、南面が1.2m (=0.3m×4)、東・西両面が1.2mである。したがって、0.3m方眼で南北に16区画、東西に15区画設定し、この計画線に沿って主柱や側壁の位置を決定したものと考えられる。なお、側壁肩には小穴が並んでおり、壁柱と考えられる。

平面が隅に丸味を少し残した方形だが竈はないことと出土した土器(248)から、Ⅲ期と判断される。

**SH3054** (第14・31図、第1表) 上段の中央東縁 (C-14区) に所在する。

平面は隅丸方形を呈し、東西4.0m、南北3.8mの規模である。主柱は北西を欠くが、柱間は四面共1.8m (=0.9m×2)である。主柱から各側壁までは東・西両面が1.1m、南・北両面が1.0mを測る。おそらく、0.9m方眼の計画線を東西・南北に設定し、この計画線に沿って主柱を配したものであろう。側壁は張り出し気味のために計画線から出るが、隅付近では計画線に沿っている。なお、主柱の掘り方は放射状に配されている。焼土や貯蔵穴は認められなかった。埋土には炭化物が多く含まれていた。

出土した土器(251～256)と、平面が隅丸方形を呈することから、Ⅱ期と判断される。

**SH4055** (第14・31・55図、第1・2表) 上段の北部 (C-2・7区) に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した方形を呈し、5.7m四方の規模である。主柱の柱間は側壁に対して振れているが、東西が3.6m (=0.3m×12)、南北が2.7m (=0.3m×9)である。主柱から各側壁までの平均は、西面と南面が1.2m (=0.3m×4)、北面が1.5m (=0.3m×5)、東面が0.9m (=0.3m×3)である。した

がって、0.3m方眼の計画線を東西19・南北18区画設定し、この計画線に沿って主柱を配したものであろう。炉は中央西寄りにある。

土器類（230～241）のほかに、貯蔵穴の北東近くの床面から土製丸玉（787）も出土している。出土土器と平面が隅丸方形を呈することから、Ⅱ期と判断される。

**S H4056**（第14図、第1表） 上段の調査区で検出された竪穴住居の内で最も北（B-22区）に所在する。

平面は隅に丸味を少し残した略方形を呈し、東でやや広くなるが3.9m四方の規模である。主柱や貯蔵穴は判然としないが、炉は中央北よりにある。

隅に丸味を少し残した方形であり、Ⅲ期とした。

**S H4057**（第13図、第1表） 上段の中央東縁（C-18区）に所在する。

平面は隅に丸みを少し残した方形を呈するらしいが北西部を少し残すだけであり、竪穴住居であるか自体も疑問を残す。規模をはじめ、周溝や炉等も不明である。Ⅲ期に属するかと思われる。

**S H2058**（第14図、第1表） 中段の水田跡南東部、調査区の最東端（E-22区付近）に所在する、唯一の竪穴住居である。

平面は方形を呈するが、規模は不明である。周溝はあるが、その他の施設は明らかではない。方形を呈することから、Ⅳ期かと推定される。

## （2）その他遺構（第4図）

**S E4502**（第15・34図） 調査区北西縁近く（C-1区）の上段に所在する、円形の素掘り井戸である。

径1.8～1.95mで、1.5mの深さを残していた。下部は径0.5～0.7mの筒状を呈し、上部は擂鉢状に広がる。土師器（301・302）や須恵器（303・304）が出土した。出土した層位は最上層を中心としているが、いずれも6世紀中葉のものである。したがって、6世紀中葉には廃絶したものと推定される。

なお、古墳時代の井戸は他に検出されなかった。

**土器列I**（第16・32図） 調査区南東、中段の水田跡の東縁（E-13・17・18区）で認められた。

比較的完形に近い土師器（257～265等）が、古墳時代の水田跡に沿って認められたものである。この水田面とほぼ同じ高さで転がるように散在しており、意図的に配置した様子は窺えなかった。

出土した土器はすべて古墳時代の前期後半（Ⅲ期）

に属する土師器であり、水田跡の廃絶期を示すものと考えられる。

**土器列II**（第17・32～34図） 調査区南東、中段の水田跡（E-8区）で認められた。

古墳時代の水田跡は西部を扇の要のようにして次第に低くなるが、この北方は数十cm低くなる段差を境に木津川に向かた緩傾斜面があり、ここでは各筆がやや広い水田跡が検出された。土器列IIは、この段差の斜面及び下の広い水田面に転落した状況で出土したものである。

土器列Iと同様に、完形に近い土師器（266～295等）が出土しており、これらはⅢ期を中心としている。

**大溝**（第18・35・36・55図、第2表） 調査区南東部の水田跡よりも北西（D-22・23、E-2区）にあり、木津川に向かって北流する自然の溝である。第一分冊で既に報告済みだが、土層図と木製品以外の遺物を掲載しておく。

報告済みの木製品と共に、多くの土器が出土した。土器は古式土師器がほとんどを占めるが、微量の縄文土器や須恵器も含まれる。縄文土器には、中期初頭（310）や晩期中葉（311）と後期らしい無文の体部片（312・313）がある。また、弥生時代後期らしい例（327）も皆無ではない。古式土師器の甕は、口縁端をつまみあげて外面にハケやタタキ、内面にケズリを施した例（333）もあるが、ハケあるいはタタキだけの例が多い。また、S字状口縁甕（341）も少量ながら見られる。さらに、上層からは須恵器（347）も出土している。

また、土錘も出土している。長さ5cm程の2例（779・780）と7cm程の1例（781）は調査区の西端近くで出土しており、長さ10cm程の例（782）は中程の南岸寄りで出土している。

**S K201**（第46図） 調査区南東部（E-3区）の水田跡に営まれた土坑である。

水田跡の覆土から掘り込まれており、径1m、深さ0.7mを残していた。ミニチュア土器（549）が出土した。

**S K302**（第19・34図） 上段東縁（C-23、D-3区）に位置する小土坑である。

長径0.75m、短径0.6m、深さ0.15m程を残すのみである。この北西3m程の位置にはL字状のわずかな段があり、竪穴住居の可能性がある。もしこれが竪穴住居とすると、SK302は竪穴住居に伴う遺構の可能性もある。

小型の壺（297・298）が出土した。

**S K402** (第34図) 上段中央 (C-8) に所在する土坑である。

長径2.55m、深さ0.45m程を残す。埋土は、古墳時代のものと違って地山に近く、暗黄褐色を呈していた。

縄文土器の破片 (296) が出土した。4単位の波状口縁を持つ深鉢であり、逆く字形の口縁部と腰部に貝殻腹縁文を施している。後期の元住吉山I式に属するものであろう。

**S K403** (第19・34図) 調査区南西縁の上段 (C-11区) に位置する土坑である。

長径約3m、短径2.2m、深さ0.1m程を残す。北部は小穴と重複しているものとして掘り下げたが、この小穴までは及ばなかった可能性が高い。

6世紀前葉 (IV期) の須恵器 (299・300) が出土した。

**S K404** (第19・46図) 上段の北西部 (C-2区) に所在する土坑である。

中世の道路側溝や柱穴によって削平されているが、長径1.8m、深さ0.6m程を残していた。

土師器の壺 (547) や須恵器の壺蓋 (548) が出土した。

**土器溜** (第20・21・37~46図) 調査区中央東部の中段が湾曲して下段が入り込んだ部分 (D-8区) に、大量の土器が廃棄されたものである。

古式土師器を中心とするが、弥生時代中期から古墳時代後期の須恵器及び木製品が出土した。出土状況は上から投棄された様子であり、層別的に分離することはできなかった。しかし、最下層の黒褐色粘土から出土した土器 (第36図) は一部に弥生時代後期 (I期) のものを含むが、古墳時代前期前半 (II期) のものが多い。古式土師器は、畿内を中心に東海地方や近江地方の影響を受けながらも伊賀地方特有のあり方を示す良好な資料である。なお、中段から離れた木津川本流側からの出土品にはI期の土器がやや目立つ傾向が認められた。また、上層からは須恵器片も出土している。

**S D3303** (第22・46図) 上段の中央西寄り (C-6 ~9) に所在し、東西を区画するように北流する溝である。

幅0.8m、深さ0.6mを残すV字溝であり、約57mが検出された。黒褐色の包含層が堆積していた南部では、この包含層より上から掘り込んでいた。中央やや北寄りの一部では、南から北に流路が変更して重複している。

溝の底からやや浮いた位置で6世紀の須恵器 (543~546) が出土している。

後述するが、この溝より西方も東方と同じ地形が続くにもかかわらず、同時代の竪穴住居は検出されなかつた。

**旧河道 I** (第4・47・55図、第2表) 調査区南東縁の下段 (D-14・18・19・23・24区) に所在する木津川の流路跡である。遺構と出土した木製品は既に第一分冊で報告済みであり、当分冊では遺物を掲載しておく。

出土土器はI期からIII期に及び、出土状況から分離することは不可能であった。また、土製丸玉 (786) も出土している。

**旧河道 II** (第4・48~50図) 調査区北縁の下段 (B-19・24、C-4区) に所在する木津川の流路跡である。遺構と出土した木製品は既に第一分冊で報告済みであり、当分冊では土器を掲載しておく。

出土土器は、やはりI期からIII期に及ぶが、出土状況から分離することは不可能であった。旧河道Iや大溝よりもI期が多いようである。

**沼沢地** (第4・34・55図、第2表) 竪穴住居群の立地する上段と南東の水田跡との間に、「沼沢地」と呼んだ自然地形がある。これも既に第一分冊で報告済みだが、出土した遺物を掲載しておく。

縄文時代晩期の突帯文土器 (305) は、ヘラ刻みの細い二条突帯深鉢の肩部片である。古式土師器 (306~309) が多く、手捏土器には双口の例 (308) や竹管文を施した例 (309) も見られる。また、北岸近くからはやや大型の土錐 (783) も出土している。

**中段** (第4・51図) 竪穴住居群の立地する上段と東方の沼沢地との間を中段と呼んだが、この部分には特に遺構は認められなかつた。しかし、古式土師器を中心に若干の土器 (634~638) が出土している。

### (3) その他の遺物 (第51~55図、第2表)

既述の遺構や包含層等を中心として各地点から多数の土器が出土しているが、今となっては正確な出土地点が不確かになっているものもあり、これらを包含層出土のものと併せて一括して掲載した。

一部に弥生時代中期の土器 (639・646・663) や古墳時代後期の須恵器 (699~704) も見られるが、大部分は弥生時代後期から古墳時代前期に属する。

また、滑石製白玉 (767~769) や石製管玉 (770・771) と石製勾玉 (772・773) が出土した。さらに、中世の遺構からだが土製丸玉 (784) も検出された。なお、このほかに磨製石包丁1点や打製石鏃も出土している。

## 第Ⅲ章 概括と課題

### (1) 遺物に関して

当報告でも『概要』<sup>①</sup>と同様に、弥生時代後期をI期、古墳時代の前期前半をII期、前期後半をIII期、後期をIV期、と呼んでいる。土器は、II期が庄内式、III期が布留式にはほぼ並行し、須恵器や竈が伴うと思われるものはIV期とした。

土器列や大溝・土器溜・旧河道はもちろん、堅穴住居出土の遺物であっても、必ずしも一括資料とは限らないことは当然である。しかし、土器の場合は型式分類も加味して堅穴住居単位の一括性を認め、その他の出土品も加えて各期の代表的な土器を第1図にまとめた。この図では他遺跡の例も若干援用したが、同じ伊賀地方でも名張とそれ以外とではやや様相が異なるため、ここでは名張の資料は対象外とした。

なお、伊賀地方における弥生時代から古墳時代にかけての土器編年は早くから試みられており<sup>②</sup>、今日まで精力的に取り組まれている<sup>③</sup>。しかし、当報告では詳細な編年は控え、地域色と各期の器種組成や技法に関する実態把握に留意しつつ、概要と同じくI～IV期という大まかな時期区分をするに留めた。

**親指外技法・親指内技法** 弥生時代後期（I期）から古墳時代前期（II・III期）の土器は、各器種の口縁部や脚裾部等の内反りや外反りが特徴的である。具体的には、I期では口縁部も脚裾部も内反りだが、II期には外反りが盛行し、III期にはまた内反りになる。

こうした形態変化の理由は、土器製作時の指の當方に由来すると考えられる<sup>④</sup>。すなわち、利き腕の親指を器壁の外側にし、人差し指を内側にして摘んで成形すると、土器は自然に内反りになる。反対に、親指を内側にすると自ずと外反りになる。このような製作技法を、「親指外技法」や「親指内技法」と呼んでおくこととする。該期の型式変化は製作技法の変化に起因する、との基本認識に基づくものである。

**II期の土器**（第1図） II期（古墳時代前期前半）では、親指内技法が盛行する。壺は、東海地方のいわゆるパレススタイルや柳ヶ坪は見られない。甕には、摘み上げ口唇で肩が張り尖底となり、外面にタタキとハケメを重ね、内面にはヘラケズリを施して薄く仕上げるという、庄内式の各特徴を揃えた例も散見されるが、その数は少

ない。かわりに、庄内甕の型式要素の全てではなく、いずれかをのみ備えた例が一般的である。とりわけ、口唇は角頭形ではなくて薄くなるが摘み上げがなく、肩は張らずに丸味の強い体部と尖底に近似して立ち上がりのない平底で、粗いハケメとタタキを併用するかどちらか片方だけのもの、そして内面はナデのままの例が多い。内面のヘラケズリが見られる場合でも、軽く施すだけで器壁が薄くなるまでは施さない例が多い。台付甕及び近江地方的な受口の甕や鉢も見られる。一方、S字状口縁台付甕<sup>⑤</sup>（以下「S字甕」と呼ぶ）は例外的存在であり、これはa類に属する<sup>⑥</sup>。さらに例外的だが、北陸地方的な5字口縁の甕もある<sup>⑦</sup>。高坏は、庄内式的な例とともに東海地方の欠山式<sup>⑧</sup>の新しい部分に類似する例も多い。小型で椀形の坏部をもち脚裾が広い小型高坏は、底部から口縁部への移行が角張って脚裾部に施文するという、東海地方に見られるような例はない。小型器台には、畿内的なものと東海的なものとがある。

以上のように、II期は畿内を中心に東海や近江の影響を受けながら、北陸とも交流している。但し、甕で見たように他地方からの影響を個別の要素毎に分解して受容をしており、この点に地域性が窺える。

該当例としては、SH3016・3018・3049・3054やSH3042・4055がある。このほかに、宮ノ森遺跡堅穴住居4<sup>⑨</sup>や北門遺跡<sup>⑩</sup>・西浦遺跡等、類例は多い。

**III期の土器**（第1図） III期（古墳時代前期後半）には、親指外技法が次第に一般化し、庄内式的要素を多く残すものから布留式に類似するまでを含む。畿内的な型式要素をばらばらに取り入れるという伊賀地方の地域性が続く。口唇を折り返して丸底で内面をケズリ、外面にタタキとハケメという典型的な布留式甕は少ないが、各個体には何らかの要素を取り入れている。体部外面タタキが残る場合でも、II期と同様に粗いものが多い。受口甕のほかに、S字甕のb類や5字甕<sup>⑪</sup>も少量だが認められる。壺や甕には立ち上がりの無い平底が残る。小型丸底壺も出現する。高坏は布留式に類似するが、初期には脚部の透孔が残る。小型器台の口縁部は摘み上げ傾向が強い。

該当例は、SH3004・3034やSH3020・3039等である。また、下郡遺跡矢田川調査区の焼失家屋である堅穴住

居2からの出土品も好例である<sup>⑩</sup>。

**IV期の土器**（第1図） IV期（古墳時代後期）は、竈が出現して古手の須恵器が伴うであろう時期のもの（SH3035・3038・3040等）と、5世紀後葉の須恵器が伴う例（土器列II等）や、6世紀代の須恵器が伴うもの（SH3021・3024・3027・3015・SE4502等）を一括した。

なお、SH3035では従来なら布留式期と判断したような高壺が竈に使用されており、竈使用の早い例としても注目される。この頃には、古手の須恵器も出現していた可能性が高い。

**堅穴住居出土の銘々器** 小型の高壺や壺は、銘々器の可能性が高いと考えられる。やはり小型の壺や器台もその可能性があろう。当遺跡では、弥生時代には目立たないが、古墳時代前期（II・III期）には小型の高壺や器台が多く、後期（IV期）には土師器の壺が中心となって須恵器の壺類も次第に増加していく。このような現象は当遺跡に限ったことではないが、多数の堅穴住居出土土器は銘々器の器種変遷を具体的に示していよう。

一方、堅穴住居から一定数が出土した例の器種と点数を見ると、SH3005では壺が5点、SH3009では小型の高壺と壺が共に3点、SH3021・3027・3031では壺が4点、そして最も大規模なSH3004では高壺が13点であった。したがって、堅穴住居で使用された銘々器は、13点は例外として4点前後が一般的であったと考えられる。このような点数は、堅穴住居の居住人数を考えるうえでも参考になろう。

**土錘**（第55図） 当遺跡から出土した土錘は5点に過ぎないが、いずれも大溝や沼沢地からの出土であった。土錘の水辺での出土は散発的であることから、魚網の錘としての使用中に遺失したものと考えられる。

これに対して、堅穴住居からは滑石製臼玉や管玉・勾玉・双孔円盤・砥石・土製丸玉等は出土したが、土錘は1点も認められなかった。当遺跡では実施しなかつたが、堅穴住居の埋土を篩い掛けした場合でも同様な結果が得られている<sup>⑪</sup>。

すると、魚網は堅穴住居以外で保管されていたのか、という疑問が残る。その場合は、魚網という貴重な生産手段は堅穴住居を越えた社会単位の共有物として保管されていた、との理解もあり得よう。

## （2）遺構に関して

**放射状掘り方**（第1表） 当遺跡の堅穴住居はすべて

古墳時代に属しており、方形プランと四主柱を基調と/or>している。この主柱の掘り方は必ずしも方形ではないが、その側縁は柱筋方向に揃わずに45度程振れており、建物芯から放射状に配されている場合が多い。

このような柱掘り方のあり方は、古墳時代の豪族居館等とされる大型掘立柱建物の隅の柱掘り方にもしばしば見られるが、おそらく両者共に先行する円形豎穴における同心円状配置の伝統を引き継いだものであろう。

**任意尺による設計**（第1表） 当遺跡の豎穴住居は方形で四主柱を基調としているが、その建築にあたっては一定の計画性が窺える。すなわち、任意の長さをその場かぎりにせよ基準の物差としているようである<sup>⑫</sup>。ここではこれを「任意尺」と呼んでおく。但し、「尺」と言つても特定の歴史的意味を持つものではない。ともかく、この任意尺で東西・南北に何区画かを設定し、主柱をはじめとして側壁等の配置をしたと推定された。任意尺の長さが0.2mが2例、0.25mが7例、0.3mが10例、0.35mが2例、0.4mが3例、0.5mが3例、0.55mが3例、0.6mが2例、0.65mが2例、0.7mが1例、0.9mが1例、1.0mが2例、1.7mが1例である。但し、これらの数値は最大公約数である。したがって、この内の0.4m以上は何尺分かであった可能性が高い。すると、任意尺の実長は0.3m弱を中心に0.2mから0.35mに集中することがわかる。但し、これは素掘りの遺構であることから5cm程度が精度の限界と考え、5cm刻みで検討した結果である。

上記のように、任意尺の実長は堅穴住居毎に違うことから、物差とは言えまだ私的・臨時的なものにとどまっており、社会的な広がりを持った普遍性はもち得ていないことが窺える。そしてこの任意尺は、肘から手首まで等といった身体尺だったかと想定される。

**V字溝**（第4・22図） 上段で検出された57棟の堅穴住居は、II期からIV期という所属期で分けて分布状況を見ても、使用された任意尺の実長で分類してみても、各堅穴住居と遺跡全体との中間に何らかの安定した社会単位を認めることは困難である。

また、この堅穴住居群が立地している上段は6世紀に廃絶したV字溝（SD3303）よりも西にまで広がっているにも拘わらず、西方には同時代の堅穴住居は検出されなかった。そして、堅穴住居群の南方は調査区外のために不明だが、北方と東方は地形的に限られてい

る。したがって、IV期の竪穴住居群はV字溝によって区画されていた可能性が高い。一方、唯一検出された井戸SE4502は、V字溝より西に位置する。

V字溝は、市内でも高瀬遺跡<sup>⑯</sup>や北門遺跡等にある。また、群馬県の三ツ寺I遺跡<sup>⑰</sup>では竪穴住居群と豪族居館・祭祀場・倉庫群が区画されている。そして、高瀬遺跡でもV字溝の東西で性格の差異が推定されるうえ、各種の祭祀遺物や神奈備形の丘陵を望む立地も注目されている。

V字溝のある北堀池遺跡は、あたかも弥生時代の環濠集落のようにも見えるが、その溝は古墳時代後期に存在していたと推定され、単純に同一視できない。むしろ、当遺構も三ツ寺I遺跡や高瀬遺跡等と同様な性格をもつていた可能性が考えられる。但し、V字溝を境に性格の異なる遺構や遺物が確認されているわけではない。

ともかく、当遺跡の古墳時代には竪穴住居が何棟かで構成される安定した単位集団は析出できず、竪穴住居全体、すなわち遺跡全体でひとつの社会単位だったと理解される。この点は、平安時代後期から鎌倉時代には屋敷地をもった掘立柱建物群が展開している状況とは大きく異なる。北堀池遺跡における古墳時代から平安時代の間に生じた、社会の基礎的な単位に関する大きな変化が注目される。

## 〔註〕

①a 三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査概要II』(1979年)

b 三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査概要III』(1980年)

② 宇佐晋一・森川櫻男「伊賀における弥生式土器・土師器の集成一型式分類と編年的試案一」(『伊賀郷土史研究』第4輯、伊賀郷土史研究会、1961年)

③ 石井智大「伊賀地域における弥生時代終末期～古墳時代前期の土器編年」(『研究紀要』第19-1号、三重県埋蔵文化財センター、2010年)

④ こうした問題に関しては、井上和人氏に直接ご教示いただいたことがある。

⑤a 大参義一「S字状口縁土器考」(『いちのみや考古』No.13、一宮考古学会、1967年)

b 大参義一「弥生式土器から土師器まで—東海地方西部の場合—」(『名古屋大学文学部研究紀要』

XLVII、1968年)

⑥ 以下、下記の編年に拠る。

山田猛・岸田早苗ほか『山城遺跡・北瀬古遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)

⑦ 西浦遺跡に例があり、下記bから転載した。

a 福田典明「上野市内出土の古式土師器」(『小芝遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1993年)

b 伊賀市『上野市史 考古編』(2005年)

⑧ 註⑥の文献でも記したが、汎東海地方西部(伊勢湾沿岸域)的な土器様式として広義の「欠山式」と呼び、その中に各地方型式がある、と理解している。

⑨ 註⑦bの文献から転載した。

⑩a 福田典明『北門遺跡(第1次)発掘調査報告』(上野市教育委員会、2004年)

b 小倉整ほか『北門遺跡(第3次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2004年)

⑪ 伊賀市の西浦遺跡(註⑦a・bの文献)や小芝遺跡(註⑦aの文献)に例がある。註⑦aから転載した。

⑫ 中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』(上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会、1978年)

⑬ 竪穴住居の埋土を全て篩い掛けすることは、下記aの遺跡における昭和61(1986)年度以降の調査や下記bの遺跡等で実施されている。その結果は北堀池遺跡と基本的に変わらず、各種の玉類ほかが出土しているが、土錐は認められなかった。

a 山田猛・森川幸雄・岸田早苗『大鼻遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)

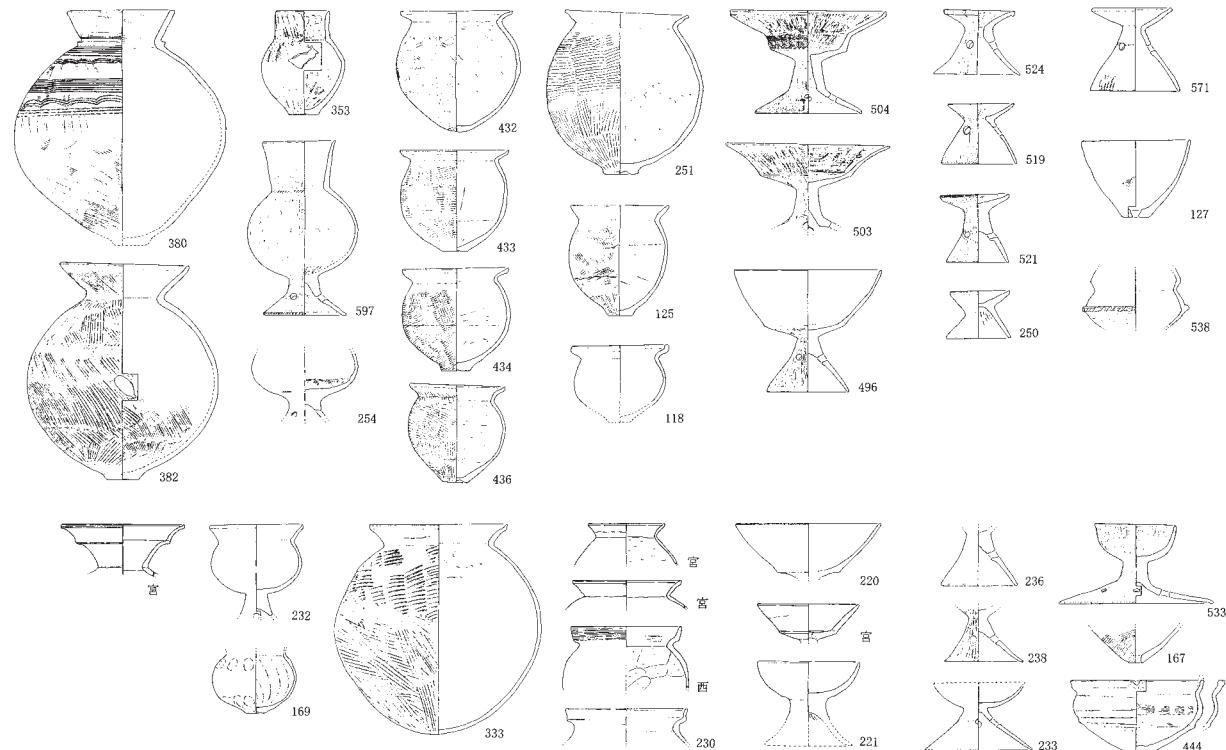
b 穂積裕昌「IV. 稲生遺跡」(『南谷遺跡・稻生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1995年)

⑭ 同様な検討は、山城遺跡(註⑥の文献)でも行なった。但し、当時は「任意尺」ではなくて「分割」を中心と考えていた。

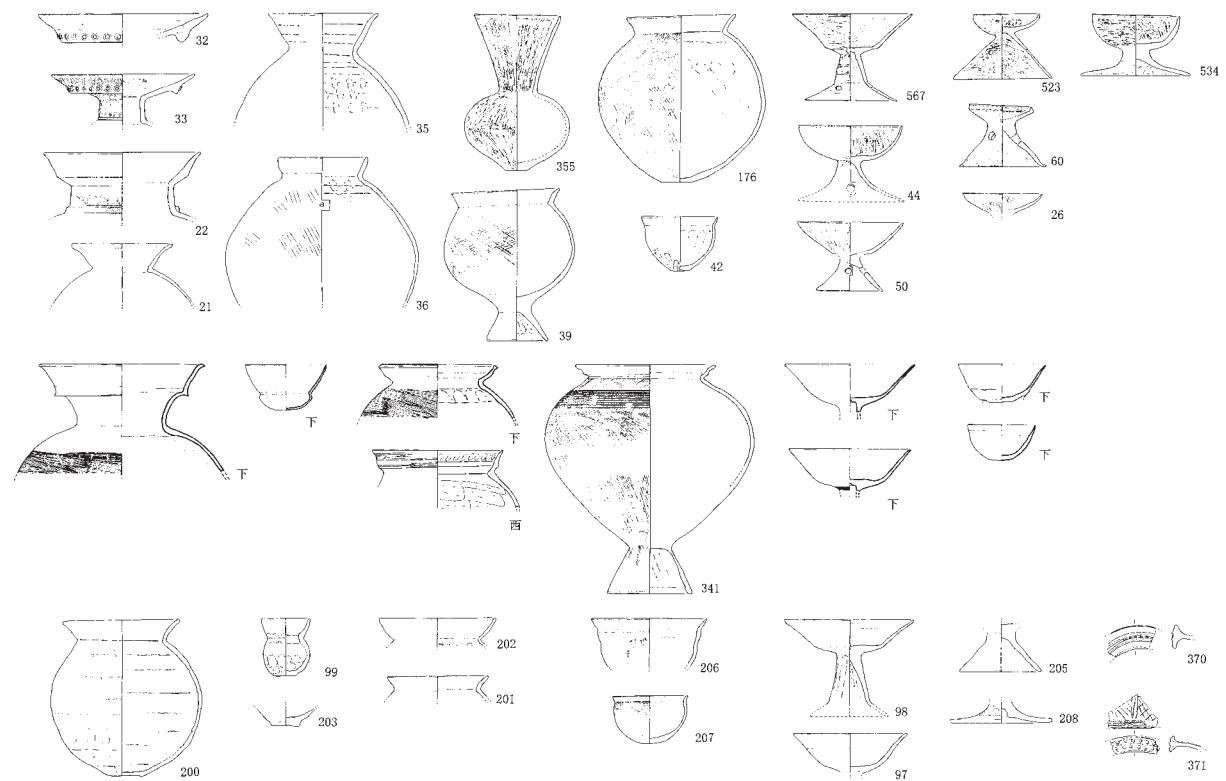
⑮ 服部芳人「三重県・高瀬遺跡」(『考古学ジャーナル』No.289、ニューサイエンス社、1988年)

⑯ 下城正ほか『三ツ寺I遺跡』(群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株、1988年)

II期

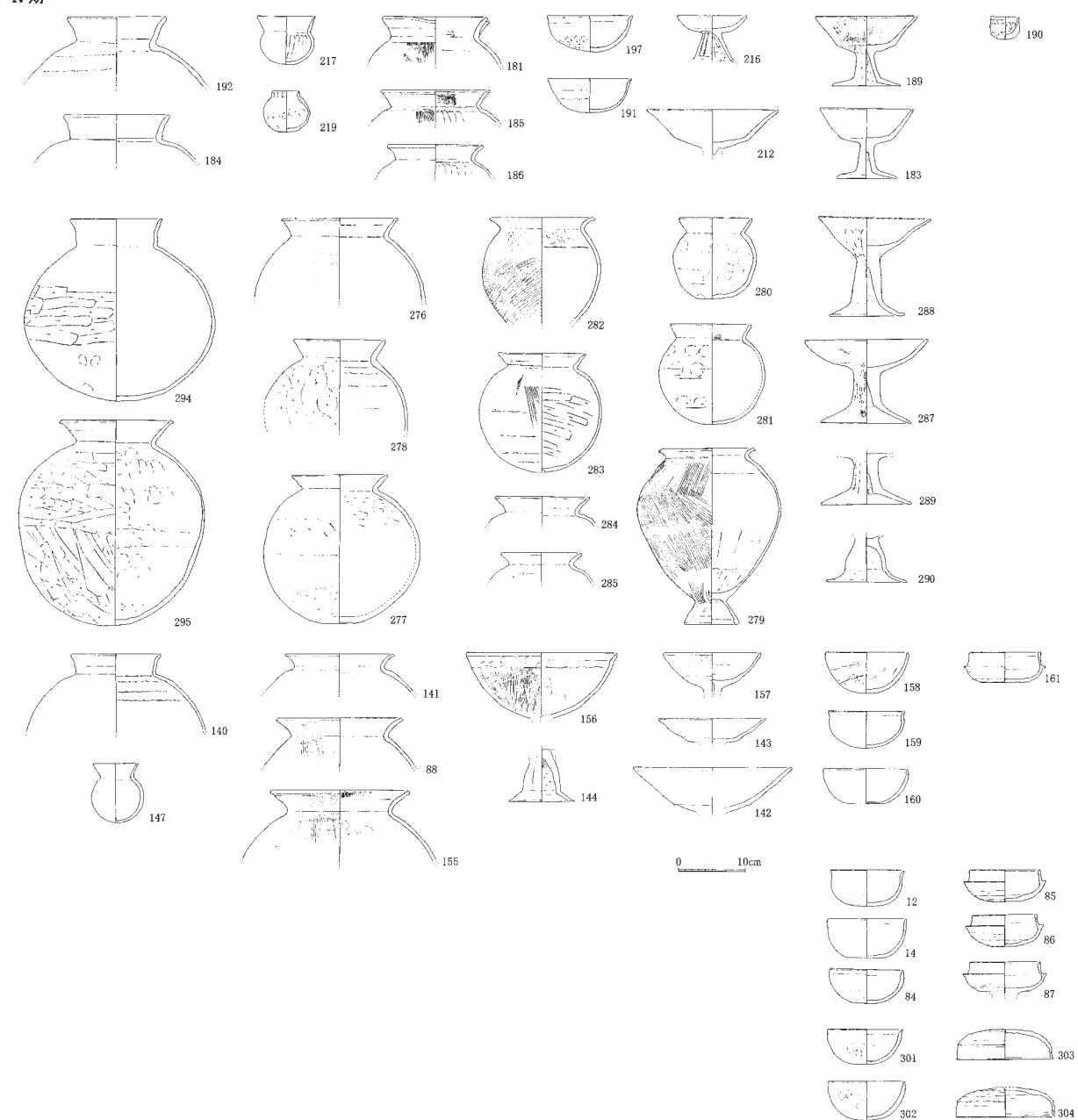


III期



第1図 II～IV期の土器(1) 1/10

IV期



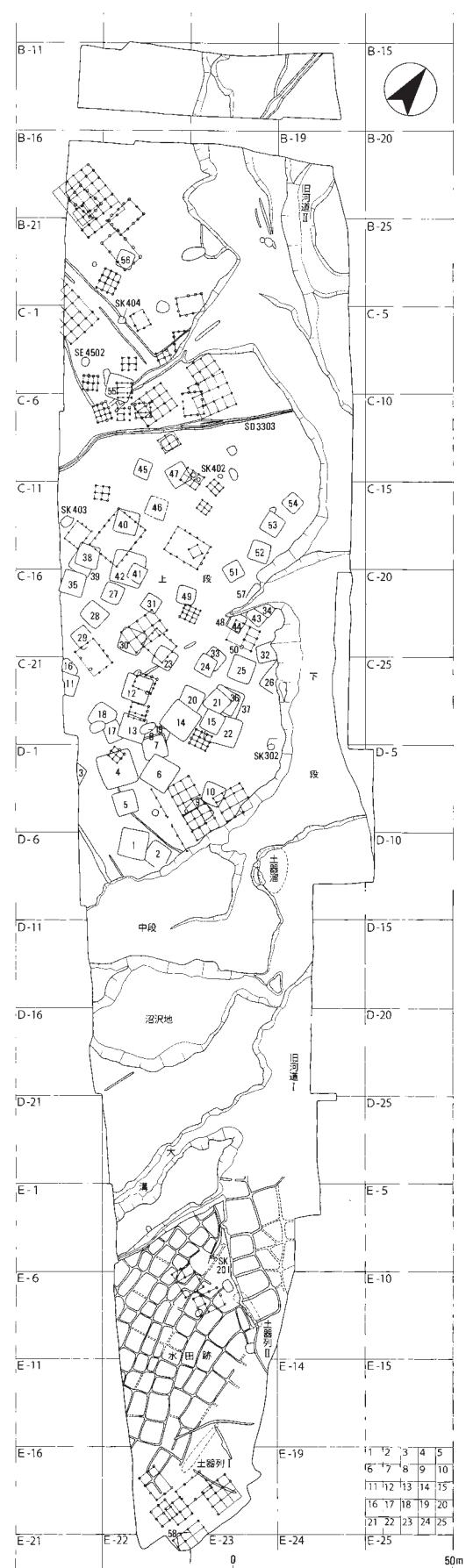
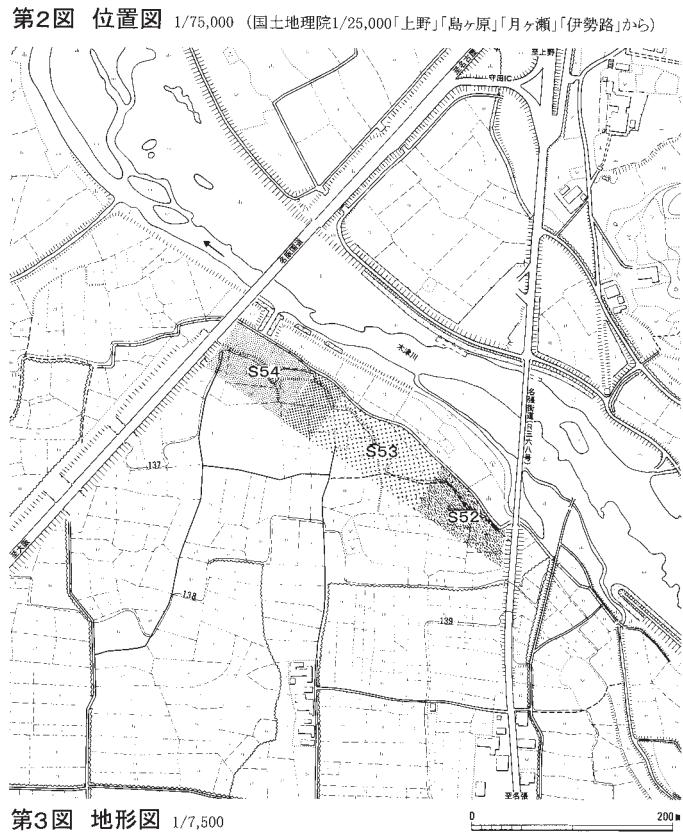
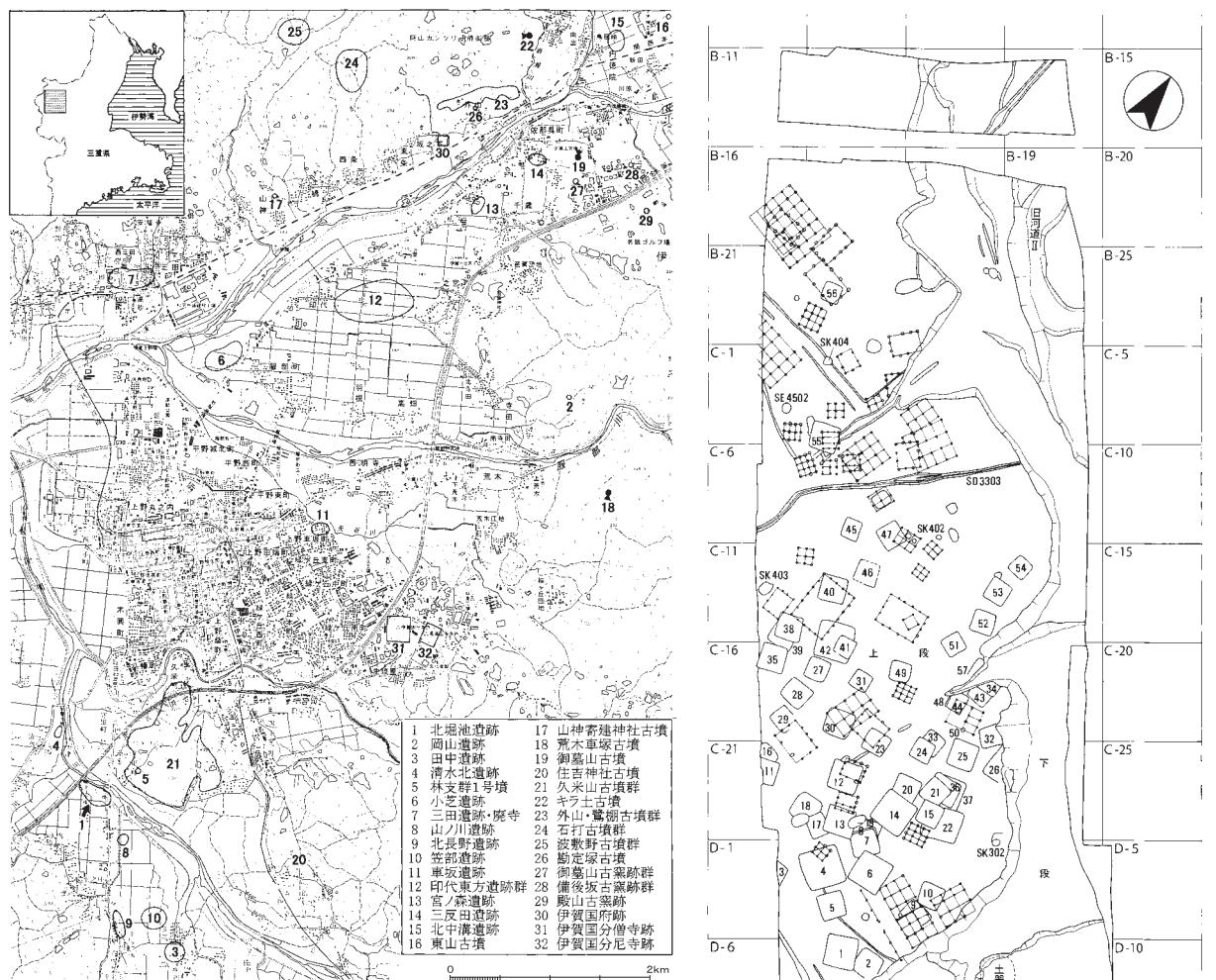
第1図 II～IV期の土器(2) 1/10 [宮=宮ノ森遺跡(註⑦)、西=西浦遺跡(註⑦)、下=下郡遺跡(註⑫)]

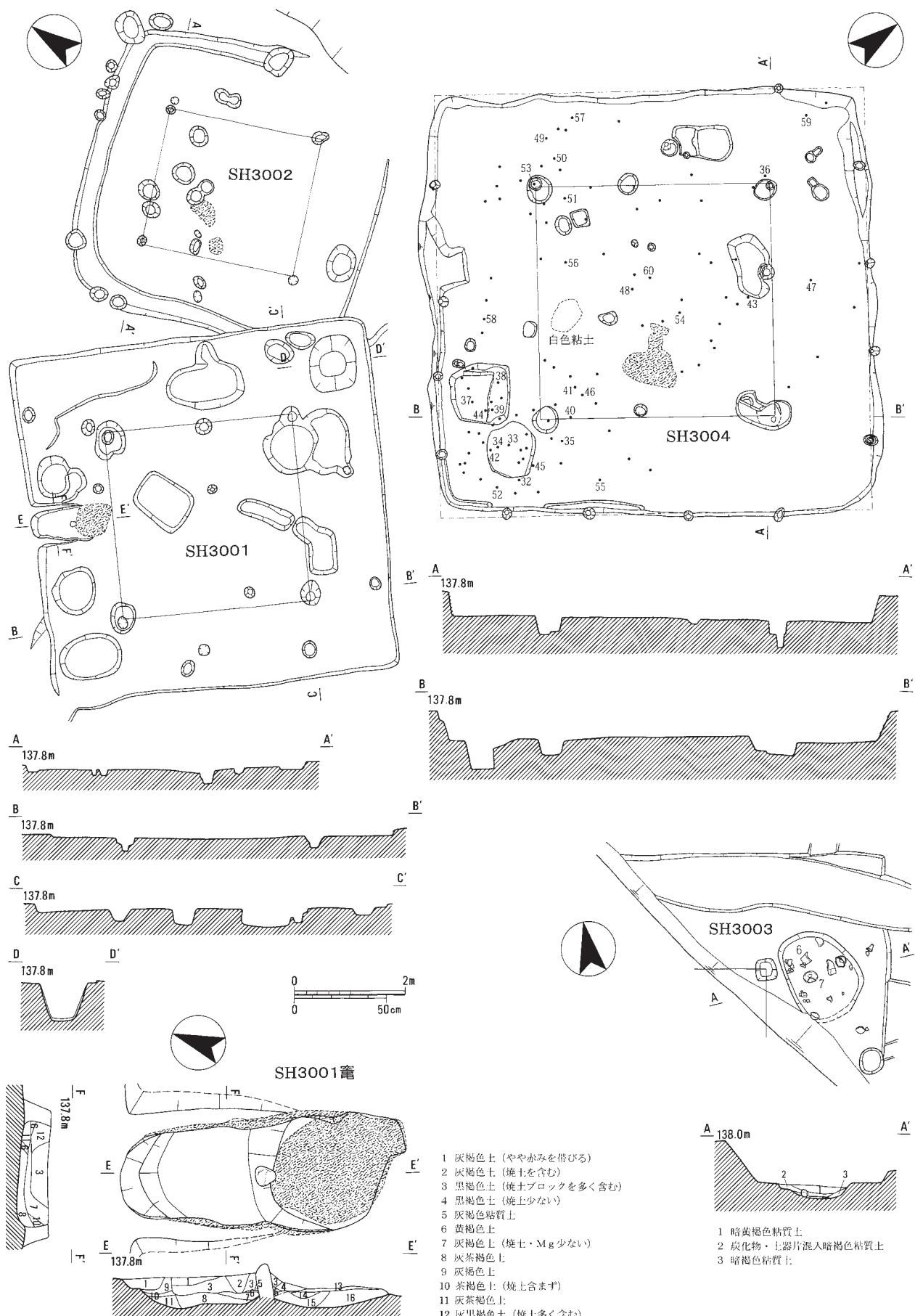
④所属期は全て古墳時代で、Ⅱ期=前期前半、Ⅲ期=前期後半、Ⅳ期=後期

見店八住ノ翌日

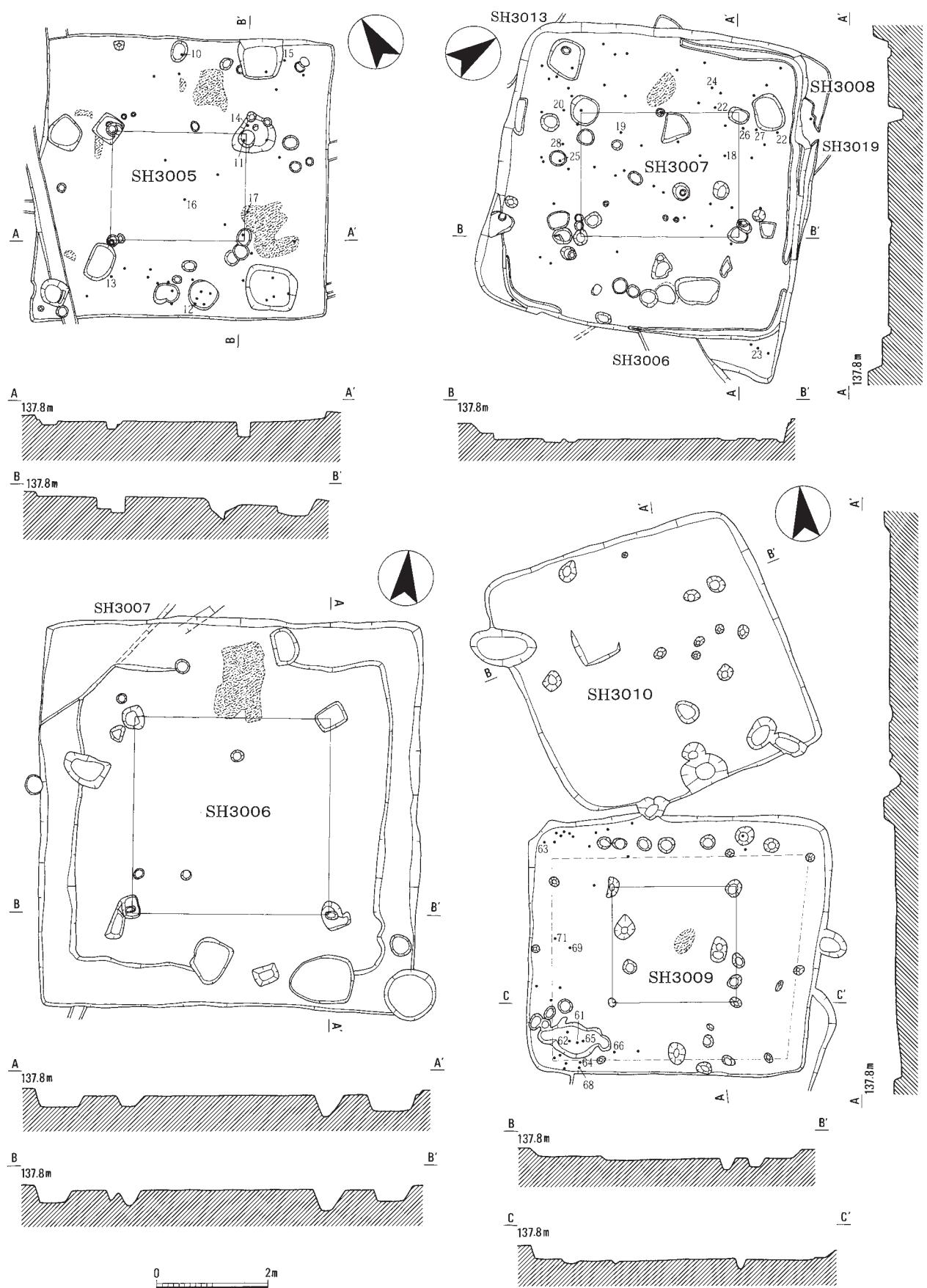
No.	材質・種類	法量 (mm)	重量(g)	色 調	殘存度	出土遺構・土層等	所属期	備考	著者
705	滑石製白玉	直径:8×厚:1.7 0.1以下	青黑色 (10BG2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
706	滑石製白玉	直径:4×厚:1.7 0.1以下	青黑色 (10BG1/7/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
707	滑石製白玉	直径:2×厚:1.8 0.1以下	青黑色 (5B2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
708	滑石製白玉	直径:1×厚:1.7 0.1以下	青黑色 (5BG2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
709	滑石製白玉	直径:1×厚:1.7 0.1以下	青黑色 (5BG2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
710	滑石製白玉	直径:6×厚:1.4 0.1以下	青黑色 (5B1/7/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
711	滑石製白玉	直径:1×厚:2.0 0.1以下	綠黒色 (5G1/7/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
712	滑石製白玉	直径:5.0×厚:3.0 0.2	暗綠灰黑色 (5G3/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
713	滑石製白玉	直径:1.8×厚:3.5 0.1	暗綠灰黑色 (7.5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
714	滑石製白玉	直径:5.0×厚:2.5 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
715	滑石製白玉	直径:5.0×厚:2.8 0.2	暗紅→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
716	滑石製白玉	直径:1.7×厚:3.0 0.1	暗紅→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
717	滑石製白玉	直径:4.6×厚:3.0 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
718	滑石製白玉	直径:1.9×厚:2.4 0.1	綠黒色 (5G2/1)	ほぼ完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
719	滑石製白玉	直径:1.9×厚:2.6 0.1	綠黒色 (10GY2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
720	滑石製白玉	直径:1.6×厚:2.9 0.1	暗紅→灰黑色 (5G3/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
721	滑石製白玉	直径:1.7×厚:2.2 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
722	滑石製白玉	直径:1.7×厚:2.4 0.1	暗紅→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
723	滑石製白玉	直径:1.9×厚:2.6 0.1	暗紅→灰黑色 (5GY4/1)	ほぼ完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
724	滑石製白玉	直径:1.8×厚:2.4 0.1以下	暗紅色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
725	滑石製白玉	直径:1.9×厚:2.3 0.1	暗紅→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
726	滑石製白玉	直径:1.8×厚:2.6 0.1	青黑色 (10BG2/1)	ほぼ完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
727	滑石製白玉	直径:5.0×厚:3.0 0.1以下	暗紅→灰黑色 (2.5GY3/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
728	滑石製白玉	直径:4.8×厚:2.3 0.1	綠黒色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
729	滑石製白玉	直径:4.6×厚:2.4 0.1	綠黒色 (10GY2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
730	滑石製白玉	直径:4.8×厚:2.8 0.1	暗紅→灰黑色 (2.5GY3/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
731	滑石製白玉	直径:1.7×厚:2.0 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
732	滑石製白玉	直径:1.6×厚:2.0 0.1	暗紅→灰黑色 (2.5GY3/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
733	滑石製白玉	直径:1.8×厚:2.2 0.1	綠黒色 (5G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
734	滑石製白玉	直径:1.8×厚:2.0 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
735	滑石製白玉	直径:1.3×厚:1.9 0.1以下	暗紅→灰黑色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
736	滑石製白玉	直径:1.8×厚:2.1 0.1以下	暗紅→灰黑色 (2.5GY4/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
737	滑石製白玉	直径:1.7×厚:2.1 0.1	綠黒色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
738	滑石製白玉	直径:1.9×厚:1.9 0.1以下	綠黒色 (5G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
739	滑石製白玉	直径:5.1×厚:1.8 0.1	綠黒色 (10G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
740	滑石製白玉	直径:5.0×厚:1.7 0.1	綠黒色 (5G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
741	滑石製白玉	直径:4.7×厚:1.6 0.1	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
742	滑石製白玉	直径:4.6×厚:2.0 0.1	綠黒色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
743	滑石製白玉	直径:1.8×厚:1.6 0.1以下	綠黒色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
744	滑石製白玉	直径:1.9×厚:1.3 0.1以下	綠黒色 (5G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
745	滑石製白玉	直径:5.0×厚:1.4 0.1以下	綠黒色 (10G2/1)	一部欠	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
746	滑石製白玉	直径:4.4×厚:1.4 0.1以下	青黑色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
747	滑石製白玉	直径:4.6×厚:1.6 0.1以下	綠黑色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
748	滑石製白玉	直径:4.1×厚:1.6 0.1以下	綠黑色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
749	滑石製白玉	直径:4.0×厚:1.2 0.1以下	青黑色 (5G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
750	滑石製白玉	直径:4.4×厚:1.2 0.1以下	青黑色 (5BG)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
751	滑石製白玉	直径:4.8×厚:1.1 0.1以下	暗緑灰色 (7.5GY3/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
752	滑石製白玉	直径:4.1×厚:1.8 0.1以下	綠黑色 (10G2/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
753	滑石製白玉	直径:3.5×厚:1.1 0.1以下	綠黑色 (5G1/7/1)	完	SII3014 西面中央床面	IV期	数珠繫き状態で出土		
754	滑石製白玉	直径:3.2×厚:1.6 0.1以下	綠色	ほぼ完	SII3014 南面六穴	IV期			
755	滑石製白玉	直径:5.1×厚:4.3 0.2	綠灰色 (5GY5/1)	ほぼ完	SII3035 北西床面	IV期			
756	滑石製白玉	直径:5.2×厚:4.2 0.2	利→灰黑色 (5GY4/1)	ほぼ完	SII3035 北西床面	IV期			
757	滑石製白玉	直径:4.9×厚:4.0 0.1	綠灰色 (7.5GY5/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
758	滑石製白玉	直径:5.0×厚:3.8 0.1	暗綠灰色 (7.5GY4/1)	ほぼ完	SII3035 北西床面	IV期			
759	滑石製白玉	直径:5.1×厚:3.7 0.1	暗青灰色 (5BG4/1)	ほぼ完	SII3035 北西床面	IV期			
760	滑石製白玉	直径:5.0×厚:3.4 0.1	暗綠灰色 (7.5GY4/1)	ほぼ完	SII3035 北西床面	IV期			
761	滑石製白玉	直径:5.0×厚:3.1 0.1	青灰色 (5BG5/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
762	滑石製白玉	直径:5.2×厚:3.0 0.1	利→灰黑色 (5GY5/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
763	滑石製白玉	直径:5.3×厚:3.1 0.1	暗綠灰色 (5G1/1)	一部欠	SII3035 北西床面	IV期			
764	滑石製白玉	直径:4.9×厚:2.2 0.1	利→灰黑色 (2.5GY4/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
765	滑石製白玉	直径:5.1×厚:2.3 0.1	利→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
766	滑石製白玉	直径:5.2×厚:2.9 0.1以下	利→灰黑色 (2.5GY5/1)	一部欠	SII3035 北西床面	IV期			
767	滑石製白玉	直径:5.3×厚:2.0 0.1	暗綠灰色 (5G1/1)	一部欠	SII3035 北西床面	IV期			
768	滑石製白玉	直径:4.2×厚:2.0 0.1	暗利→灰黑色 (5GY4/1)	完	SII3035 北西床面	IV期			
769	滑石製白玉	直径:6.6×厚:2.5 0.2	青黑色 (N1.7/1)	一部欠	SII3035 北西床面	IV期			
770	石製管玉	直径:5.2×厚:2.9 0.1以下	利→灰黑色 (2.5GY5/1)	一部欠	SII3035 北西床面	IV期			
771	石製管玉	直径:4.2×厚:2.0 0.1	暗利→灰黑色 (5GY4/1)	完	B-21-18 床面	IV期			
772	石製勾玉	長径:9.0×幅:7.1×厚:4.0 0.6	利→綠色 (10GY7/1)	一部欠	B-21-18 床面	IV期			
773	石製勾玉	長径:17.2×幅:11.1×厚:5.1 1.2	利→灰黑色 (10GY6/2)	完	B-17-2 窓1	IV期			
774	石製勾玉	長径:20.6×幅:11.9×厚:6.6 2	灰白色 (5N7/1)	一部欠	SII3027 南西隅床面	IV期			
775	石製鉤車	径:41.0×厚:8.0 15.2	黑色 (N2/1)	一部欠	SII3015 南西床面	IV期			
776	石製鉤車	径:41.0~24.2×厚:4.0 3.5	利→灰黑色 (2.5GY6/1)	一部欠	SII3027 南西隅床面	IV期			
777	石製鉤車	径:4.5~16.9×厚:3.0 1.2	利→灰黑色 (5GY6/1)	ほぼ完	SII3027 南西隅床面	IV期			
778	砥石	最大幅34.1×深:32. 94	灰白色 (2.5M8/1)	一部欠	SII3014 北面西寄廊上	IV期			
779	土鍬	最大幅17.4×深:49	浅黃色 (2.5M7/3)	一部欠	土鍬質	IV期			
780	土鍬	最大幅15×長:48 10.2	黃燈色 (10YR7/2)	一部欠	大瀧 E-2	IV期			
781	土鍬	最大幅18×長:67 19.2	灰黃色 (10YR6/2)	完	土鍬質	IV期			
782	土鍬	最大幅27×深:97 65.5	灰黃色 (2.5V7/2)	一部欠	大瀧 D-22-20 黑灰色粘土	IV期			
783	土鍬	最大幅31×深:97 50	淺黃色 (2.5V8/3)	一部欠	沼泥地 D-12-16 單素褐色粘土	IV期			
784	土製丸玉	綫径13×横径15 2.5	灰白色 (5N8/1)	一部欠	B-21-5 P1 魚方	III期			
785	土製丸玉	綫径16×横径18 4.9	橙色 (5V16/6)	ほぼ完	SII3036 東面中央南寄周溝上	III期			
786	土製丸玉	綫径31×横径33 32	利→黒色 (5V3/1)	完	旧河道 I D-19-1 黑灰色粘土	III期			
787	土製丸玉	綫径44×横径60 40.4	灰黃色 (2.5V7/2)	半欠	SII4055 南面寄中央床面	II期			

第2表 玉類、その他の石製品・土製品一覧

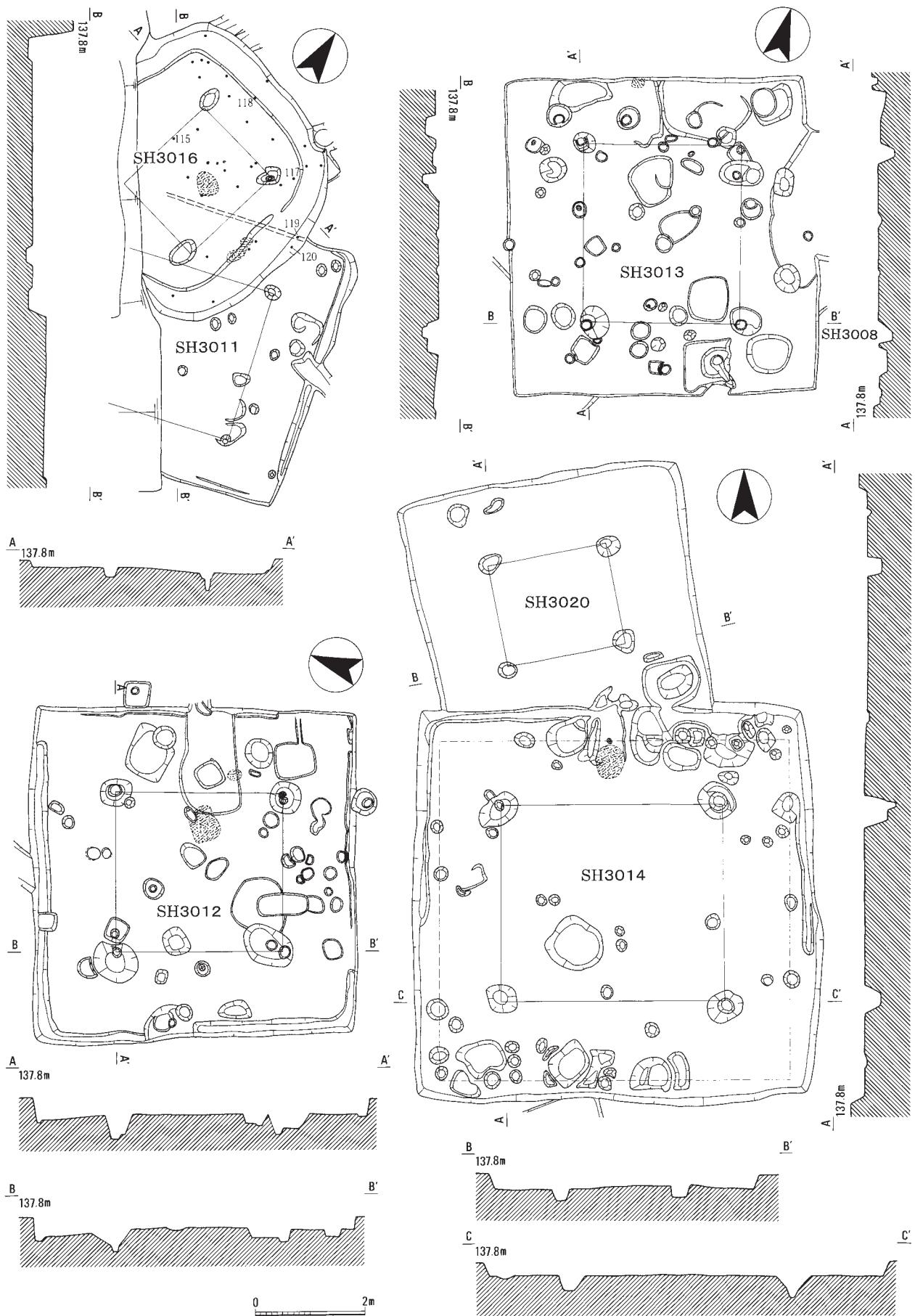




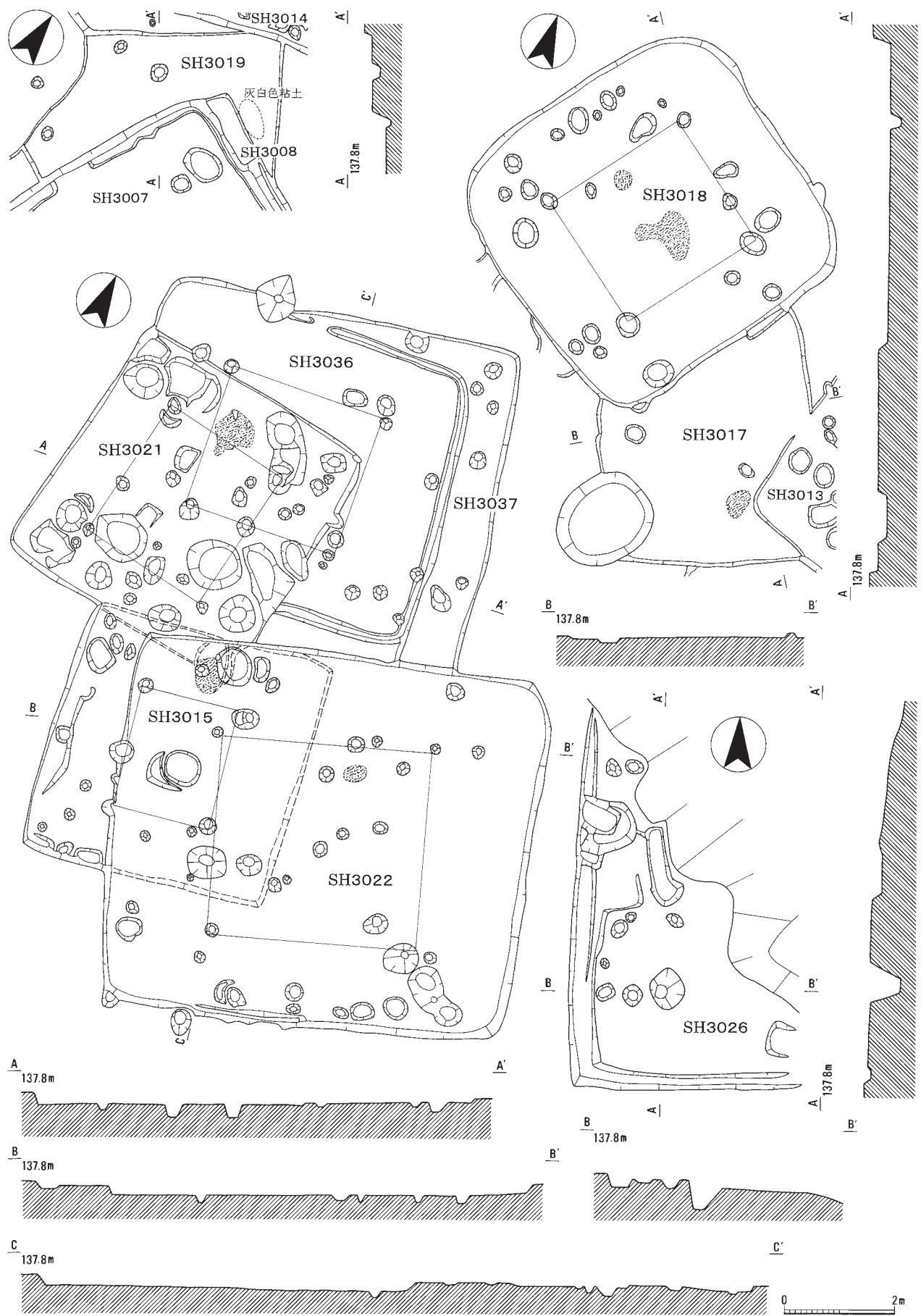
第5図 SH3001～3004実測図 1/100・1/60・1/30 (網目は焼土)



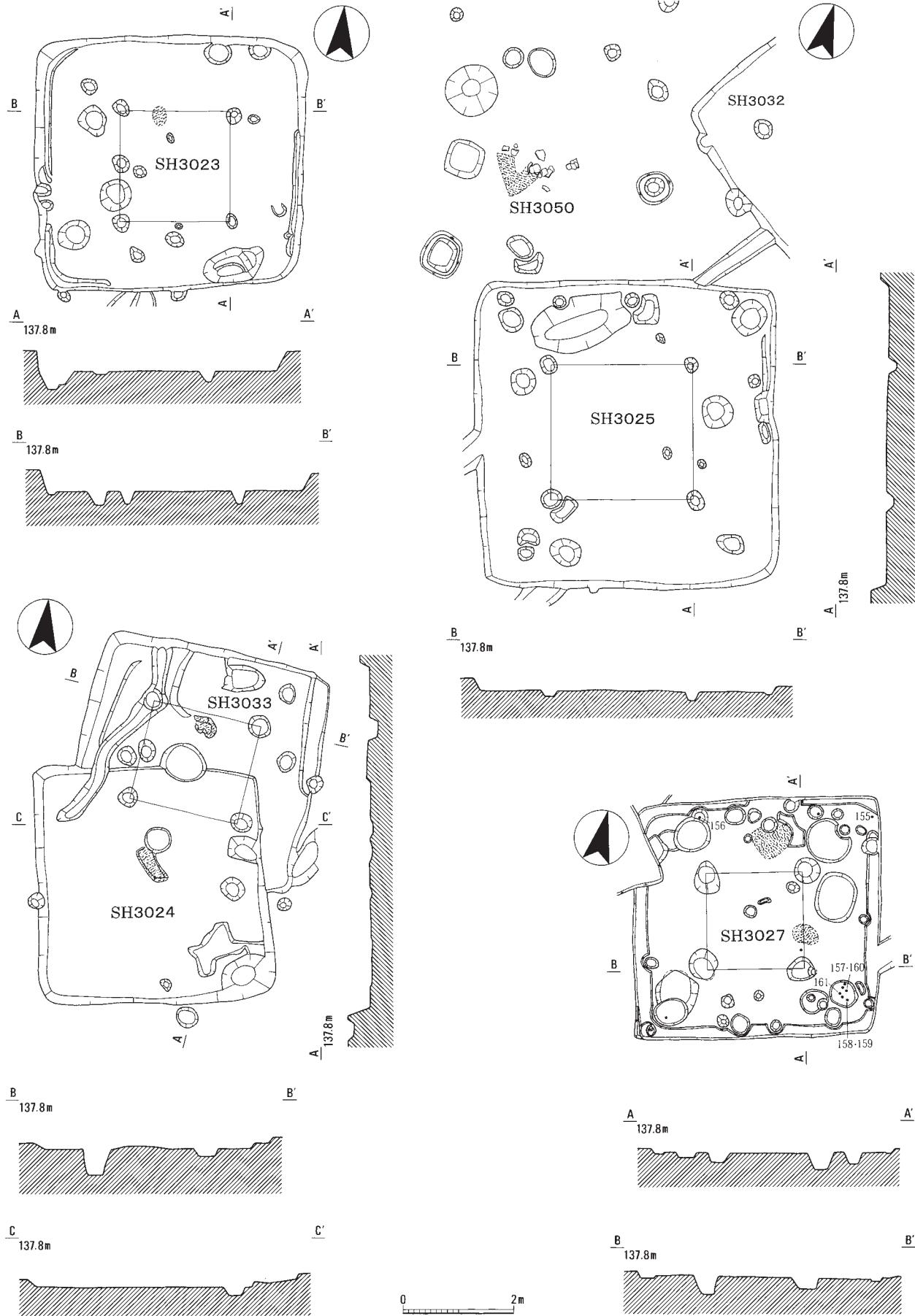
第6図 SH3005～3010実測図 1/100 (網目は焼土、但しSB3005は炭化物)



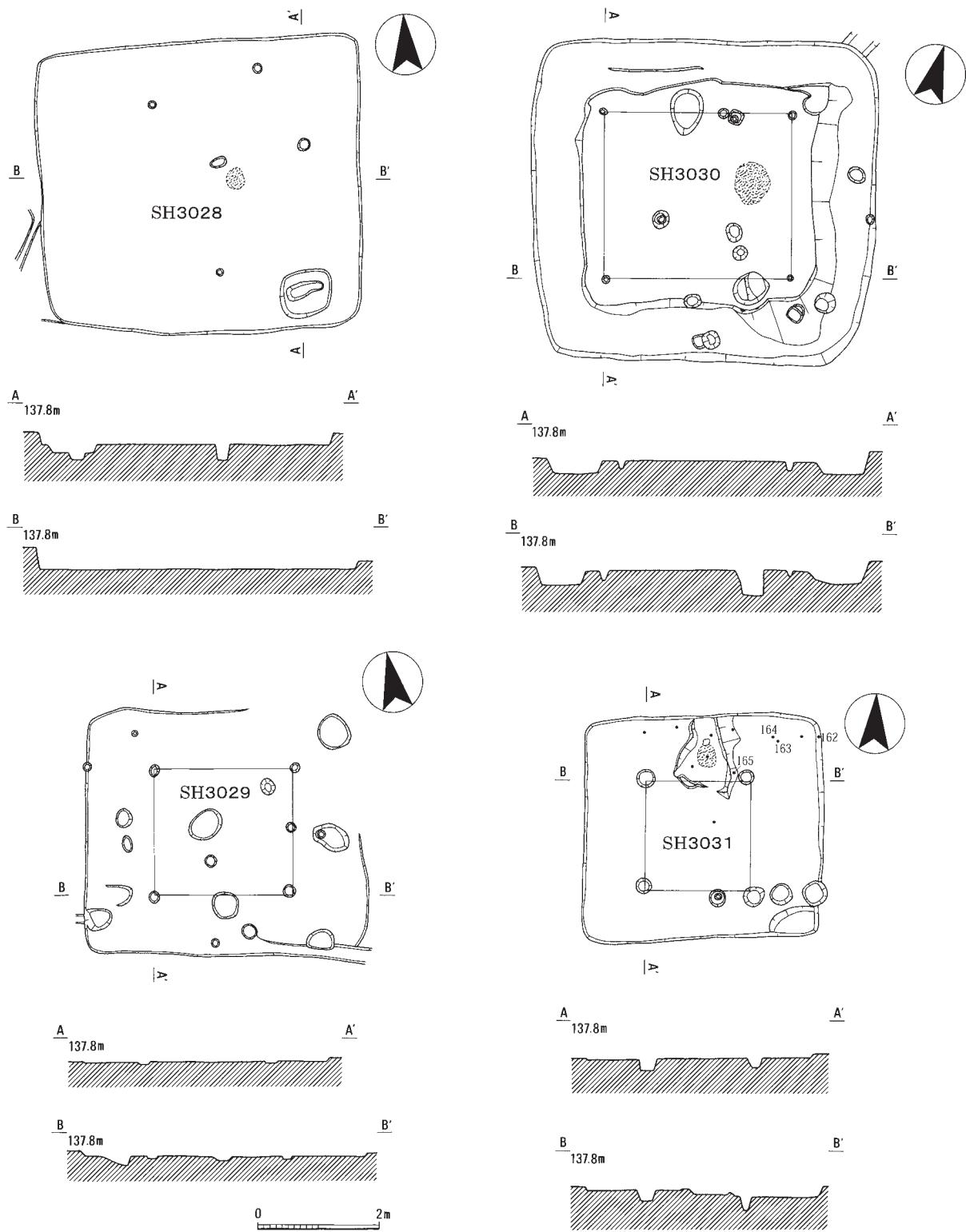
第7図 SH3011～3014・3016・3020実測図 1/100 (網目は焼土)



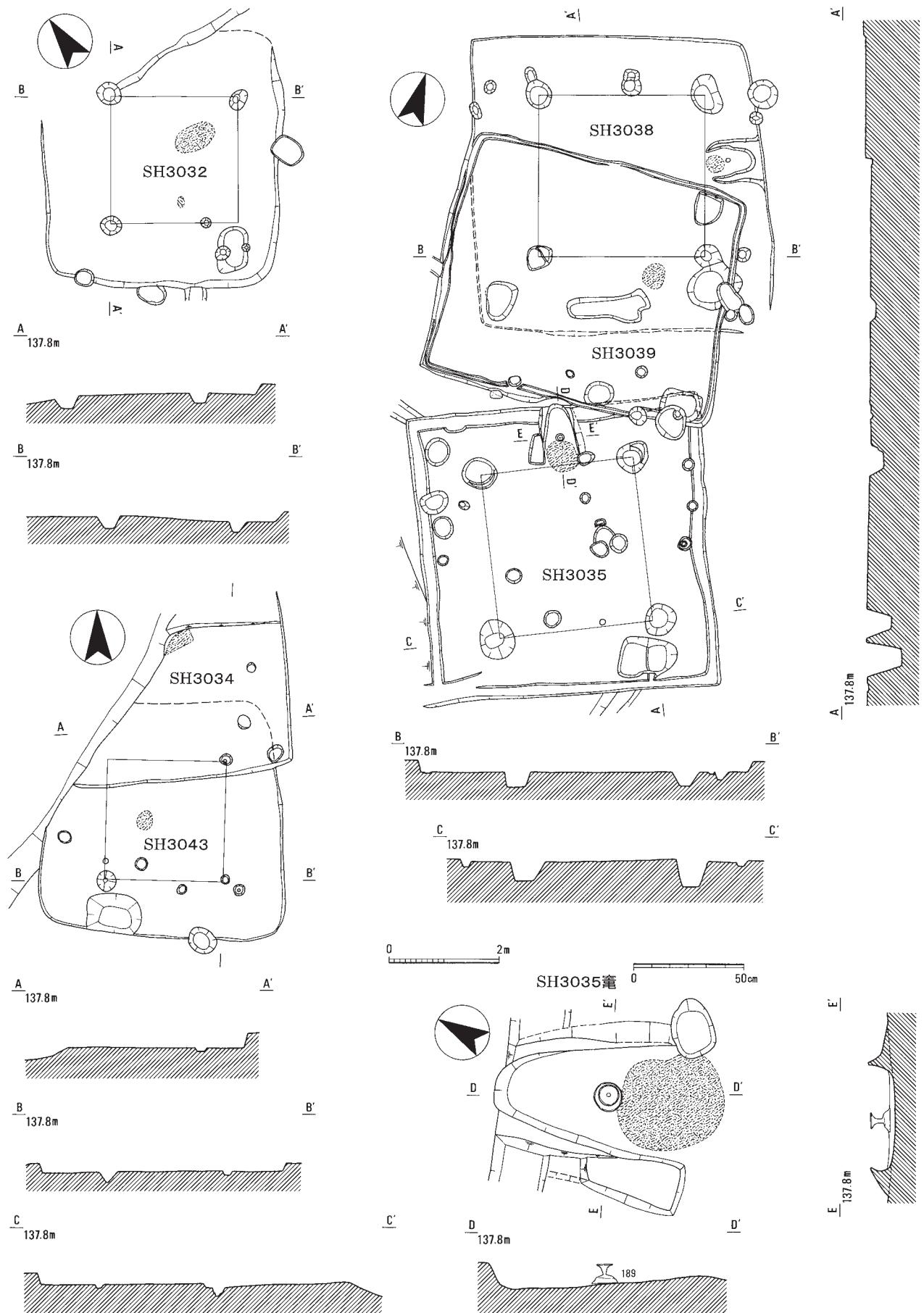
第8図 SH3015・3017～3019・3021・3022・3026・3036・3037実測図 1/100 (網目は焼土)



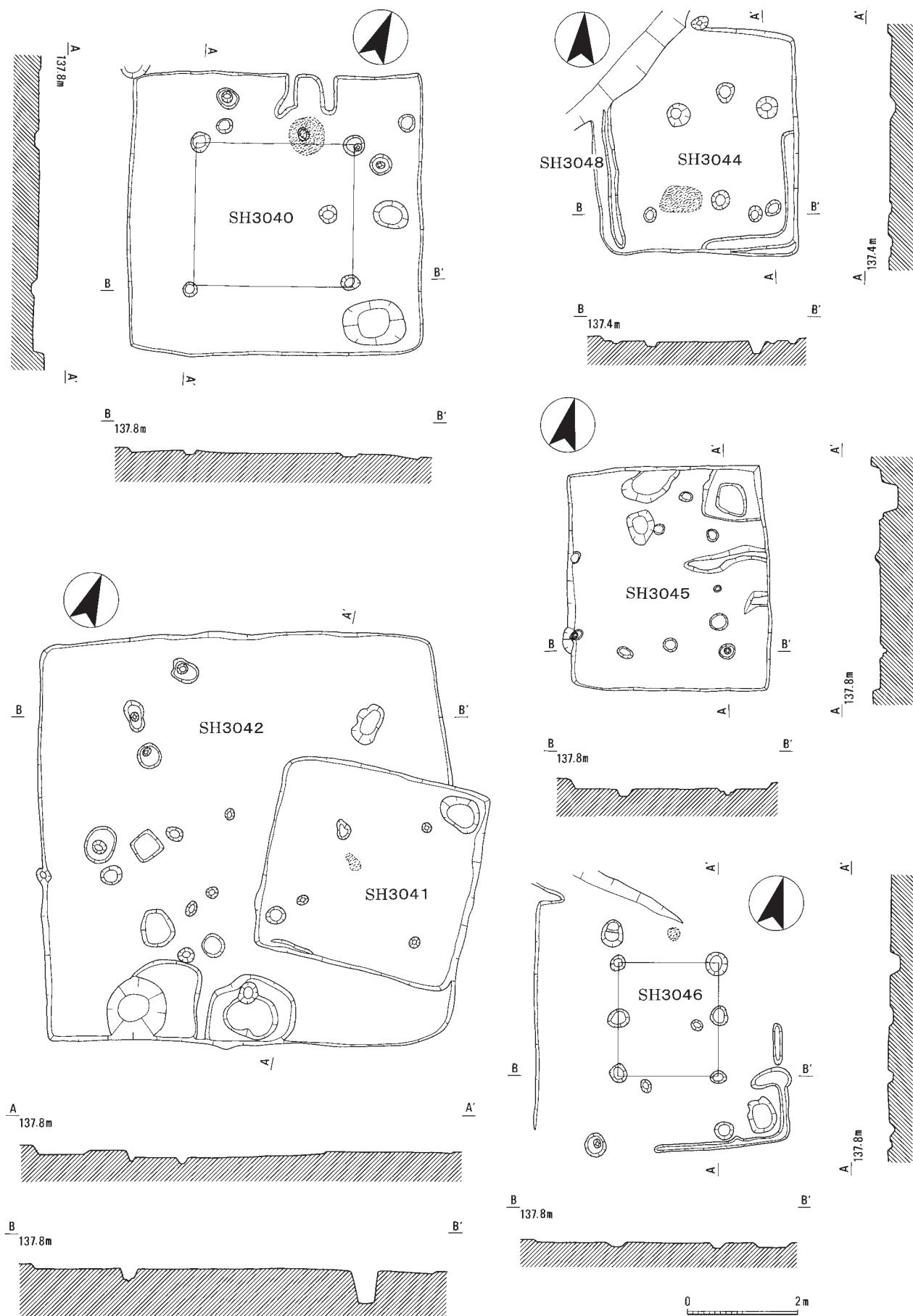
第9図 SH3023～3025・3027・3032・3033・3050実測図 1/100 (網目は焼土)



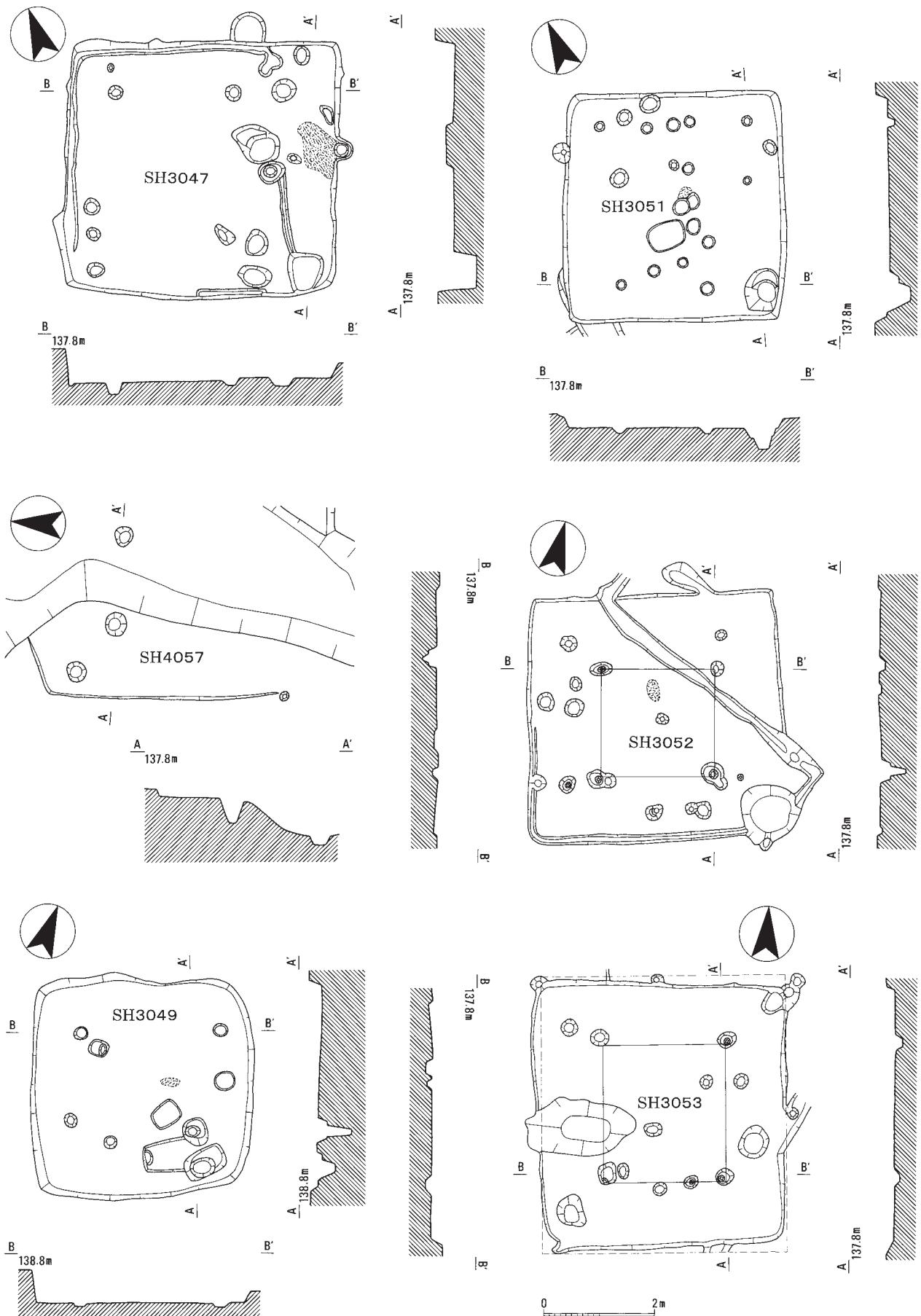
第10図 SH3028～3031実測図 1/100 (網目は焼土)



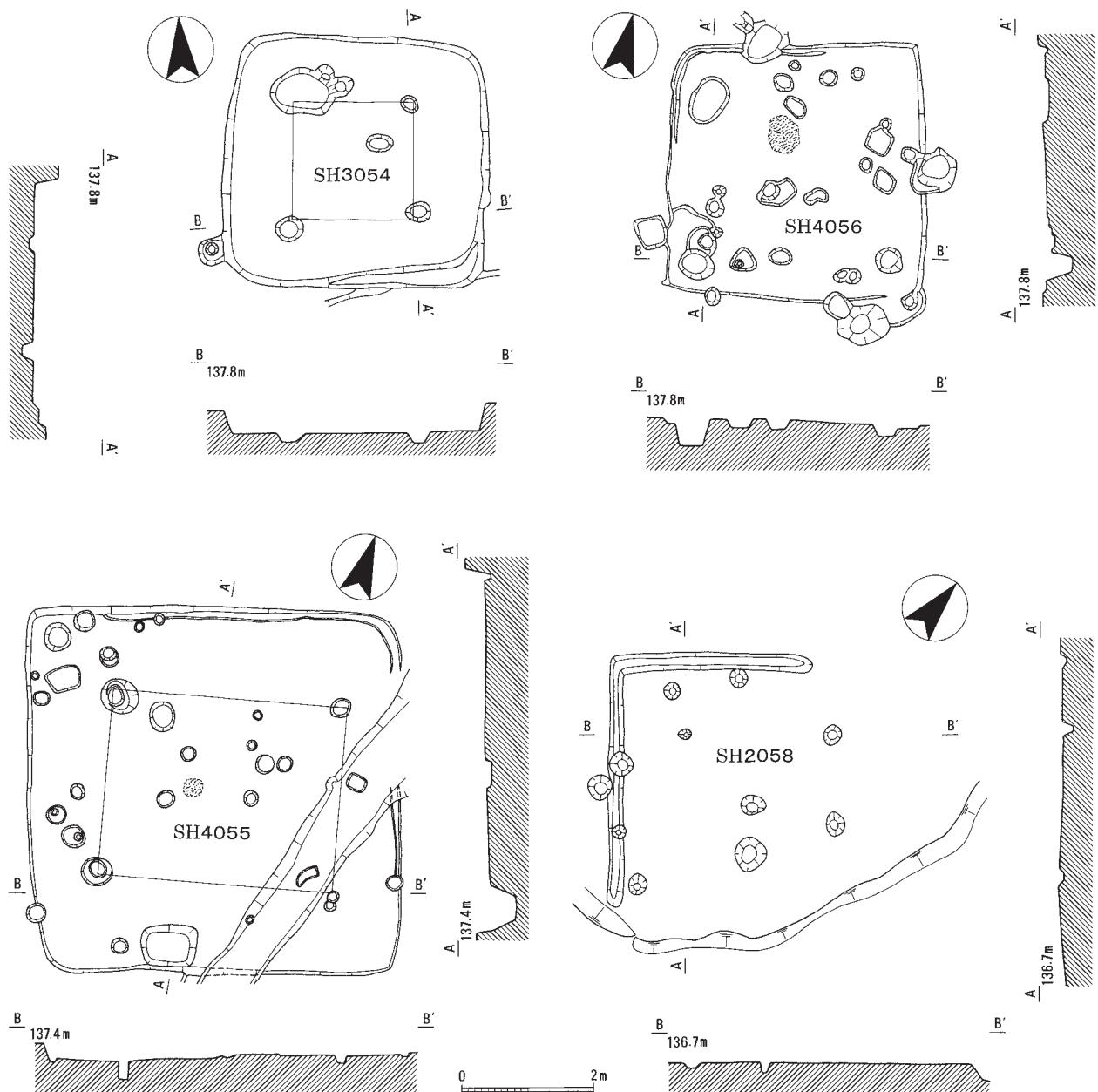
第11図 SH3032・3034・3035・3038・3039・3043実測図 1/100・1/25 (網目は焼土)



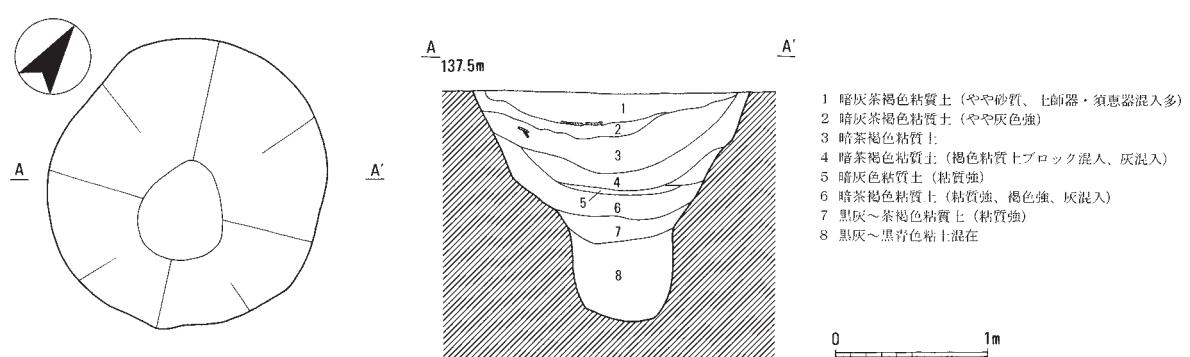
第12図 SH3040~3042・3044~3046実測図 1/100 (網目は焼土)



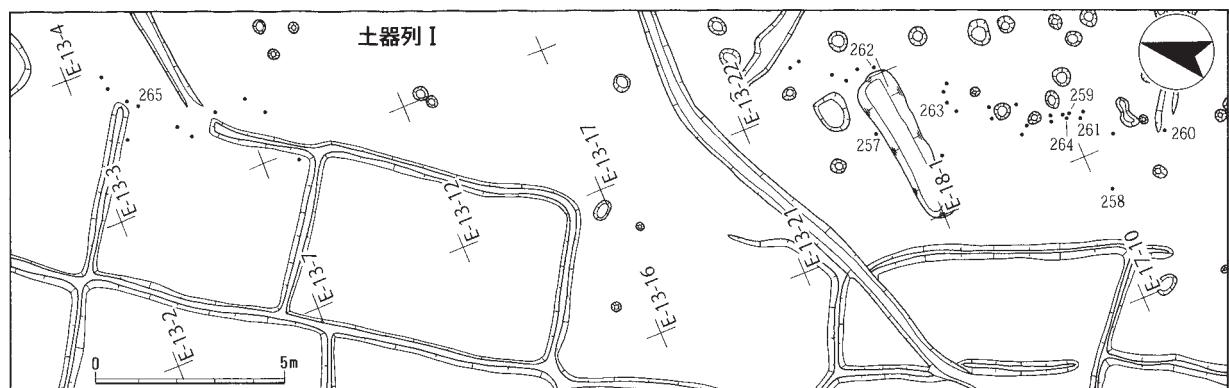
第13図 SH3047・3049・3051～3053・4057実測図 1/100 (網目は焼土)



第14図 SH3054・4055・4056・2058実測図 1/100 (網目は焼土)



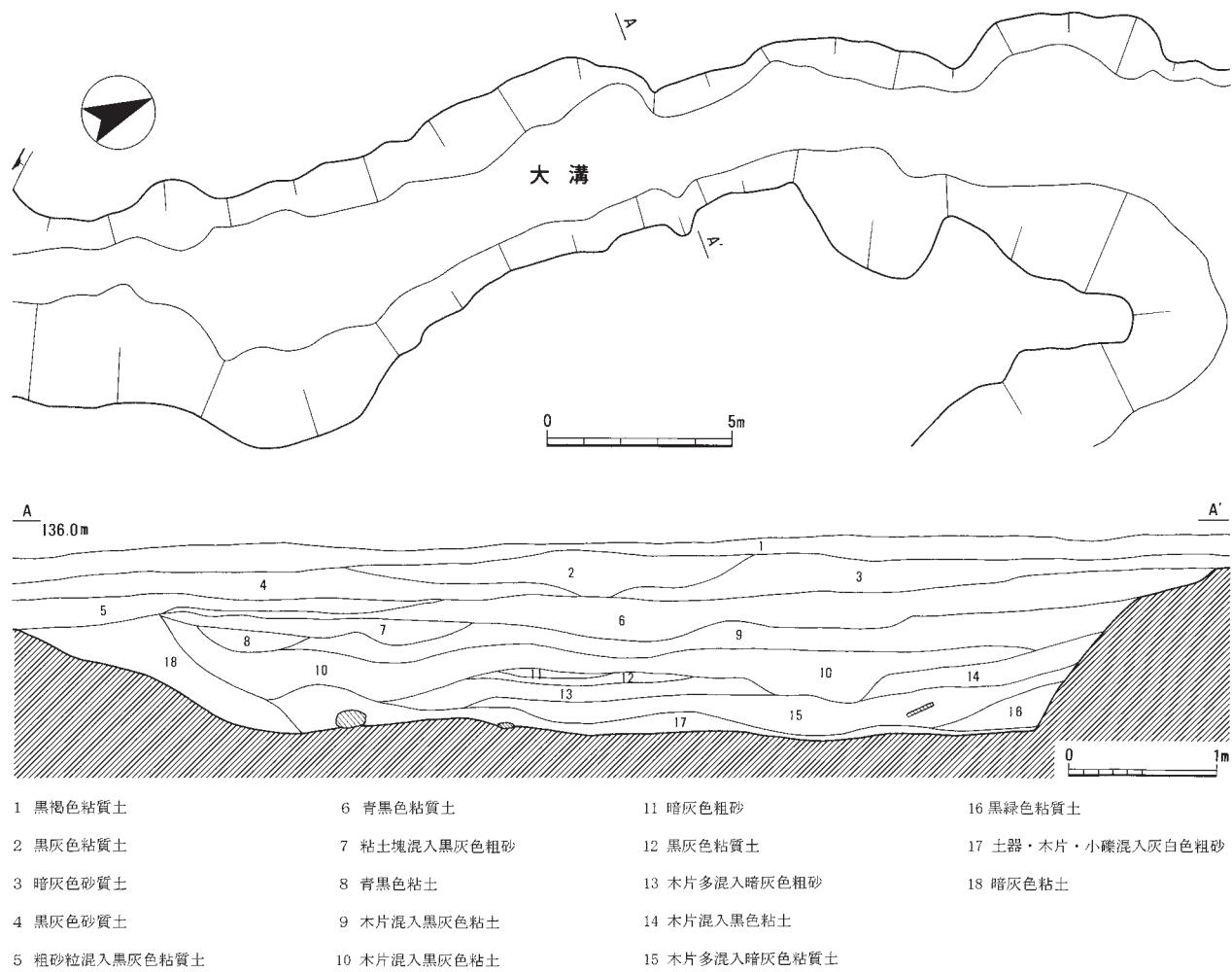
第15図 SE4502実測図 1/50



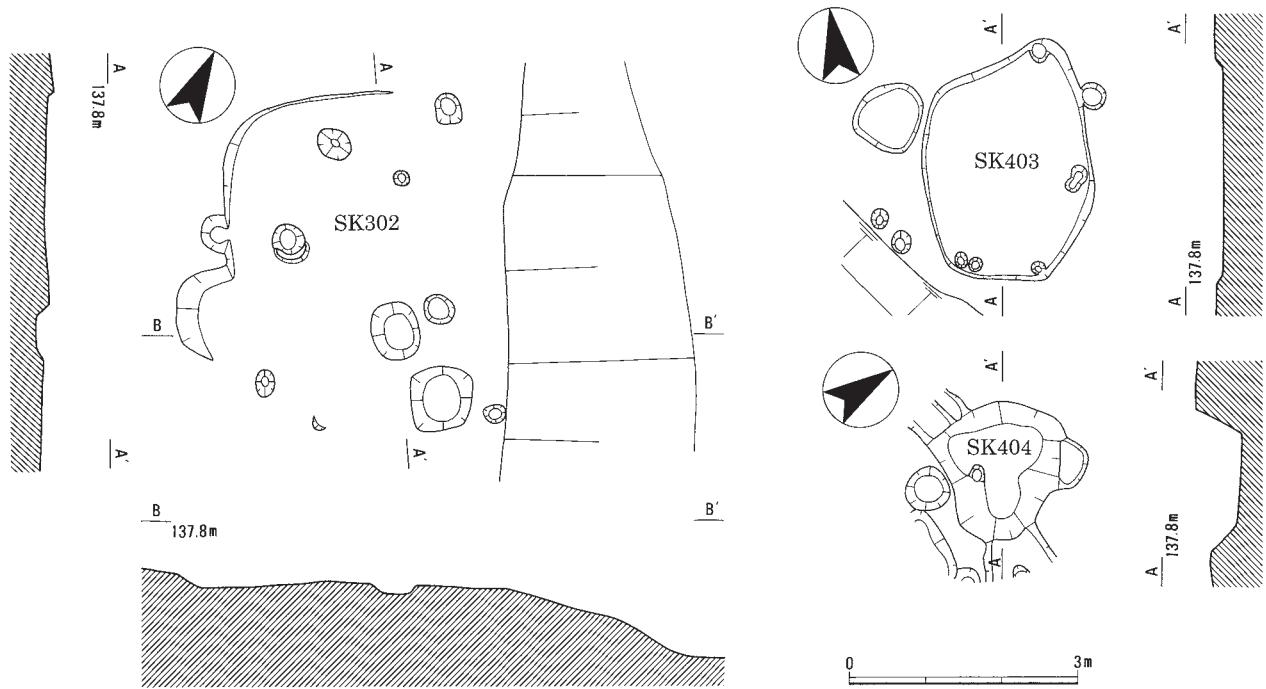
第16図 土器列 I 実測図 1/200



第17図 土器列Ⅱ実測図 1/50



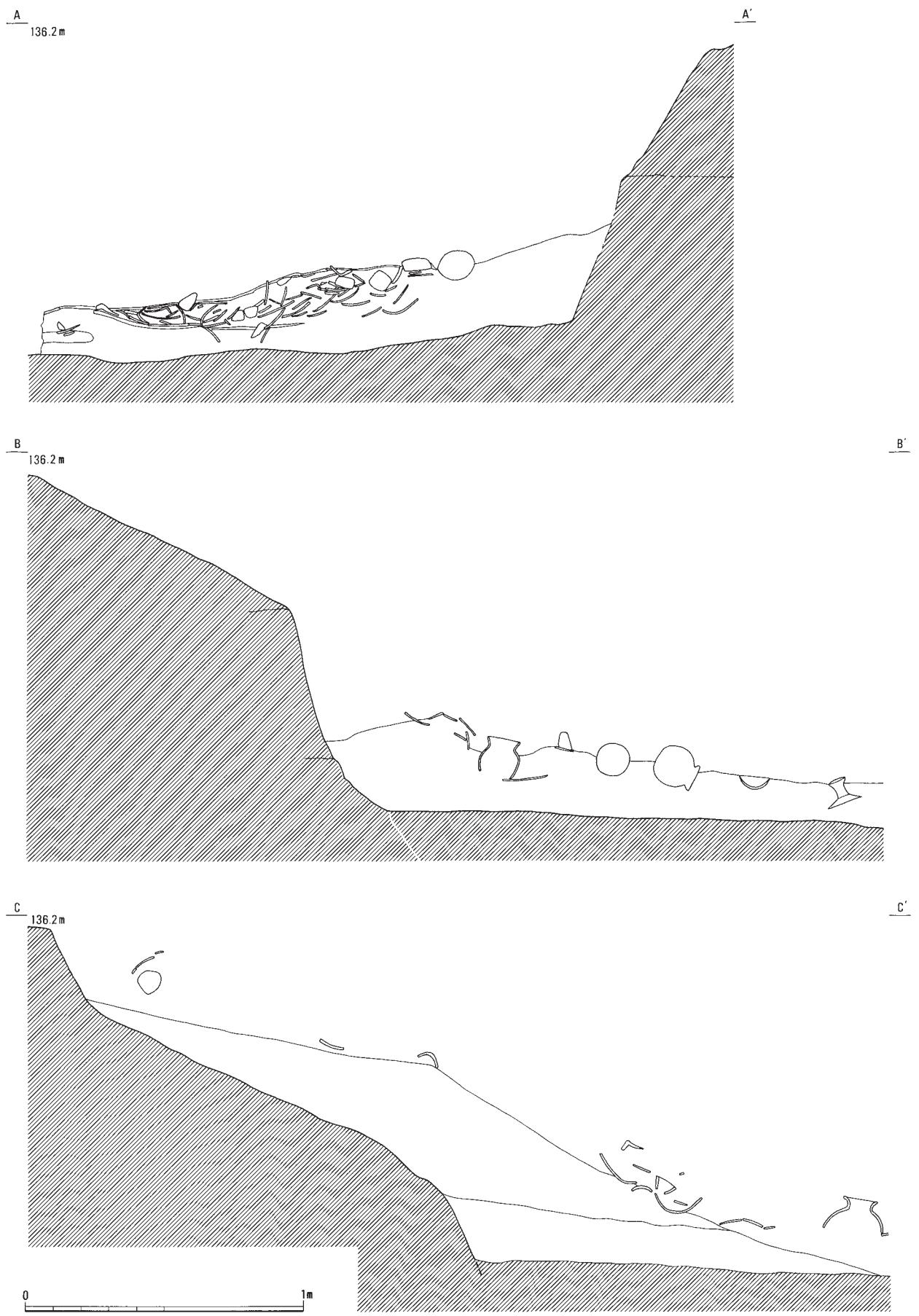
第18図 大溝実測図 1/200・1/50



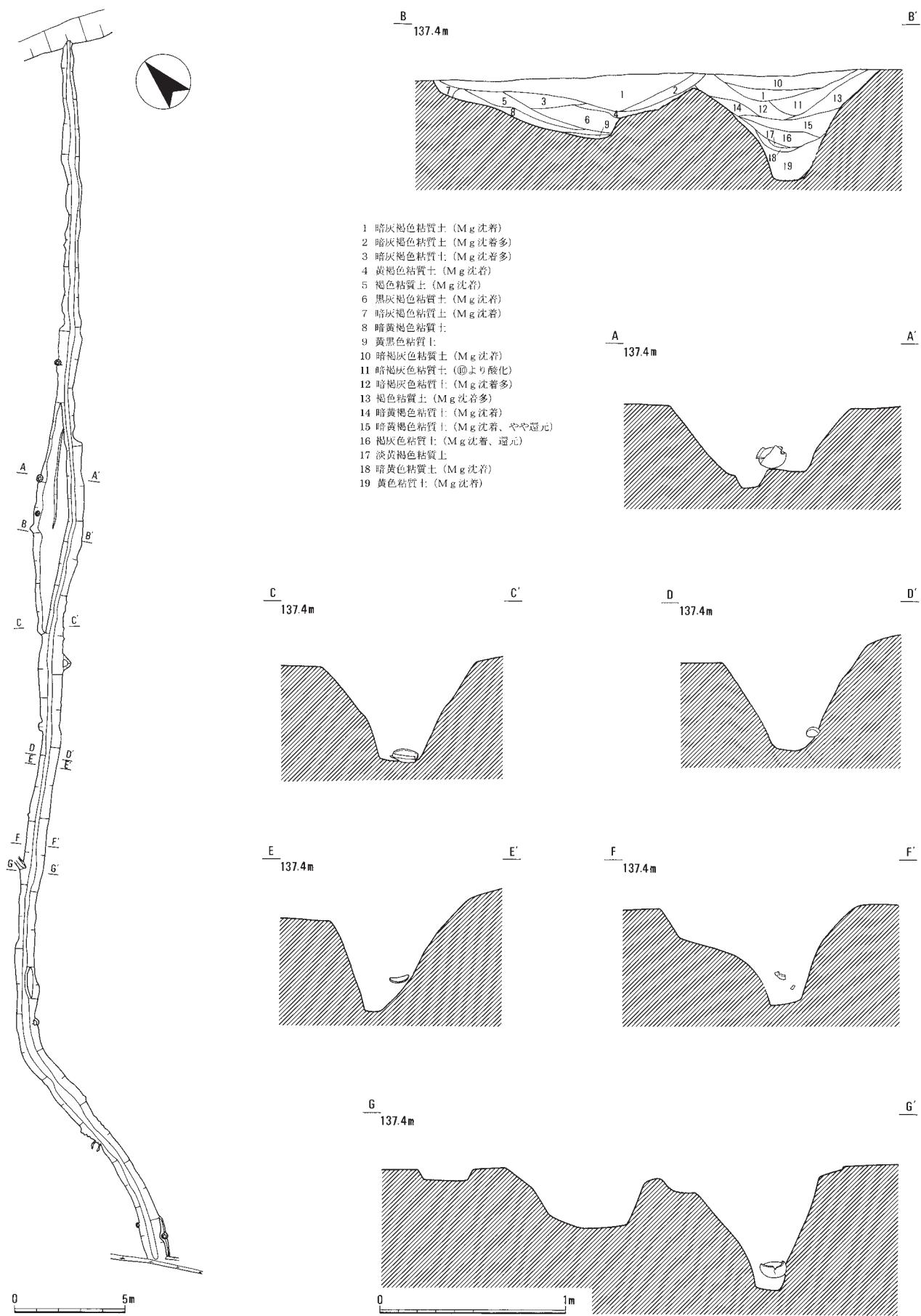
第19図 SK302・403・404実測図 1/100



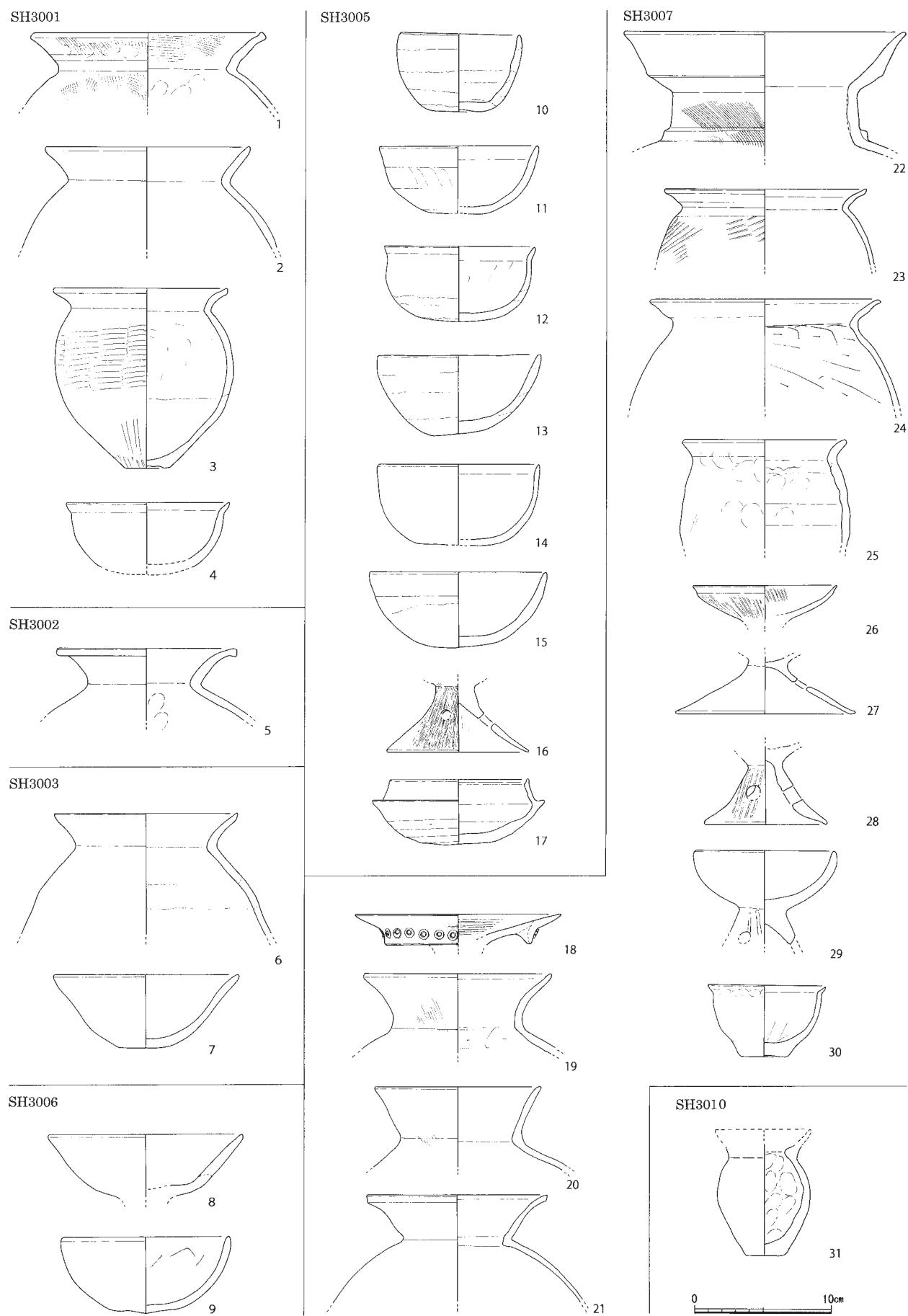
第20図 土器溜平面図 1/40



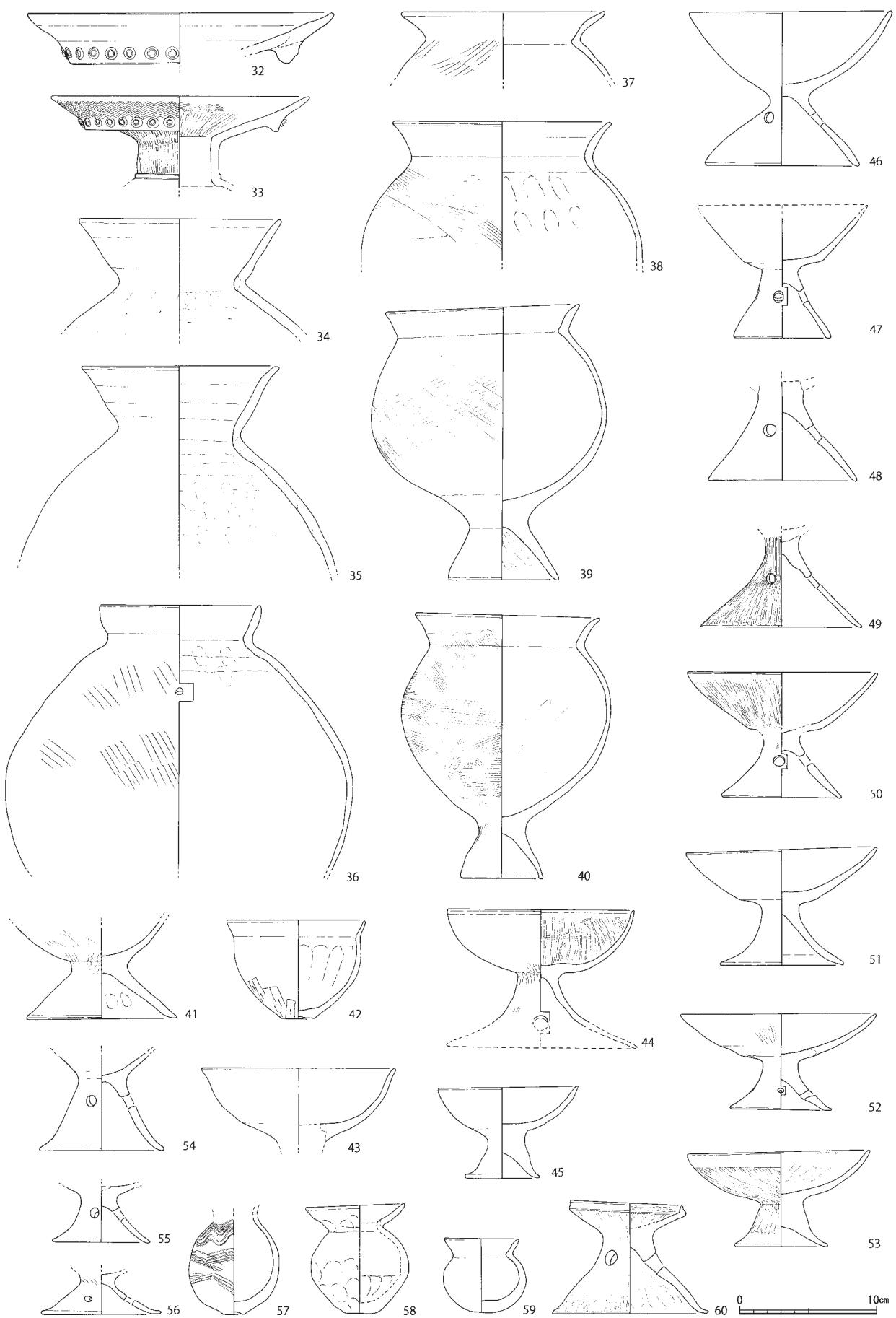
第21図 土器溜断面図 1/20



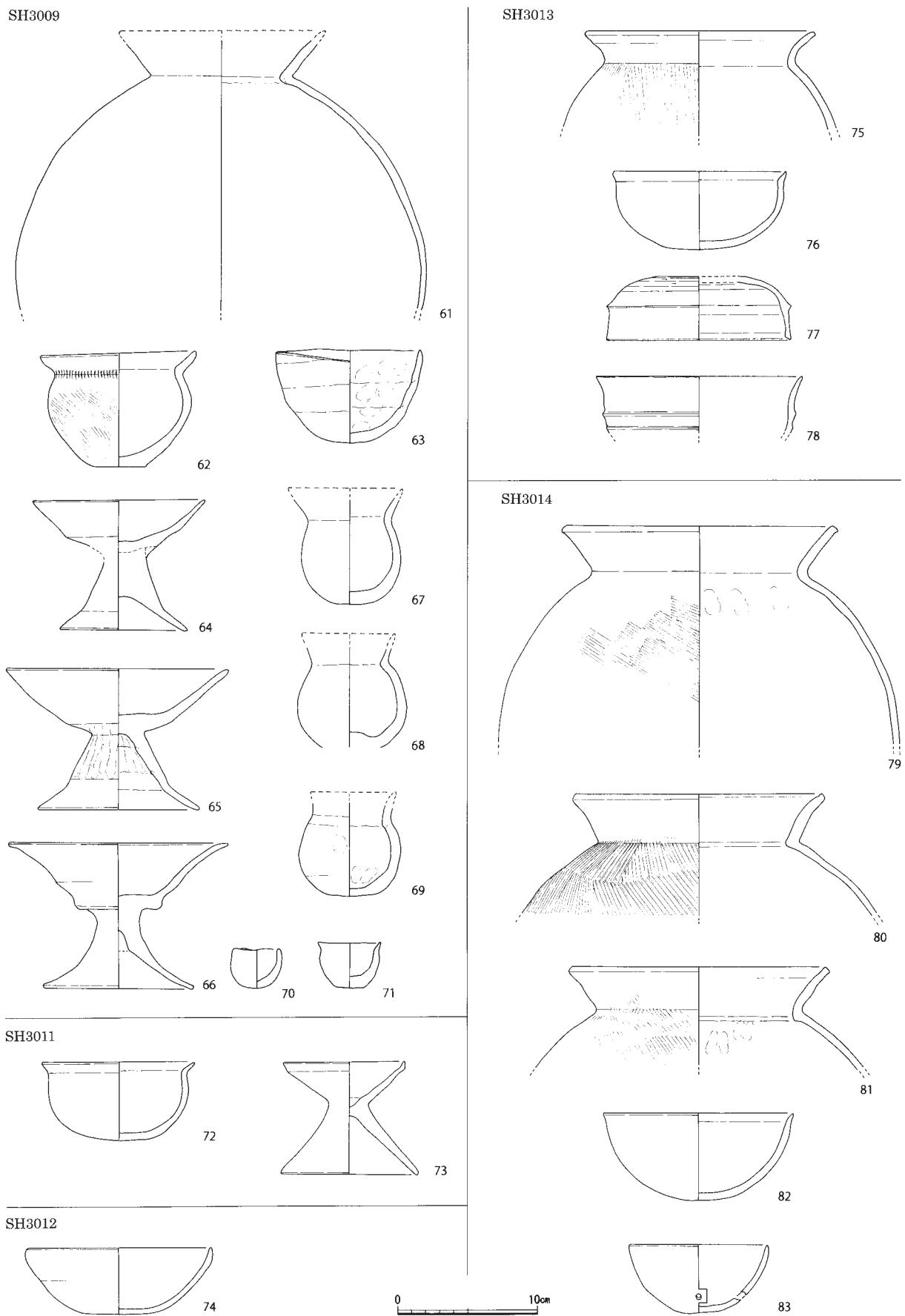
第22図 SD3303実測図 1/250・1/30



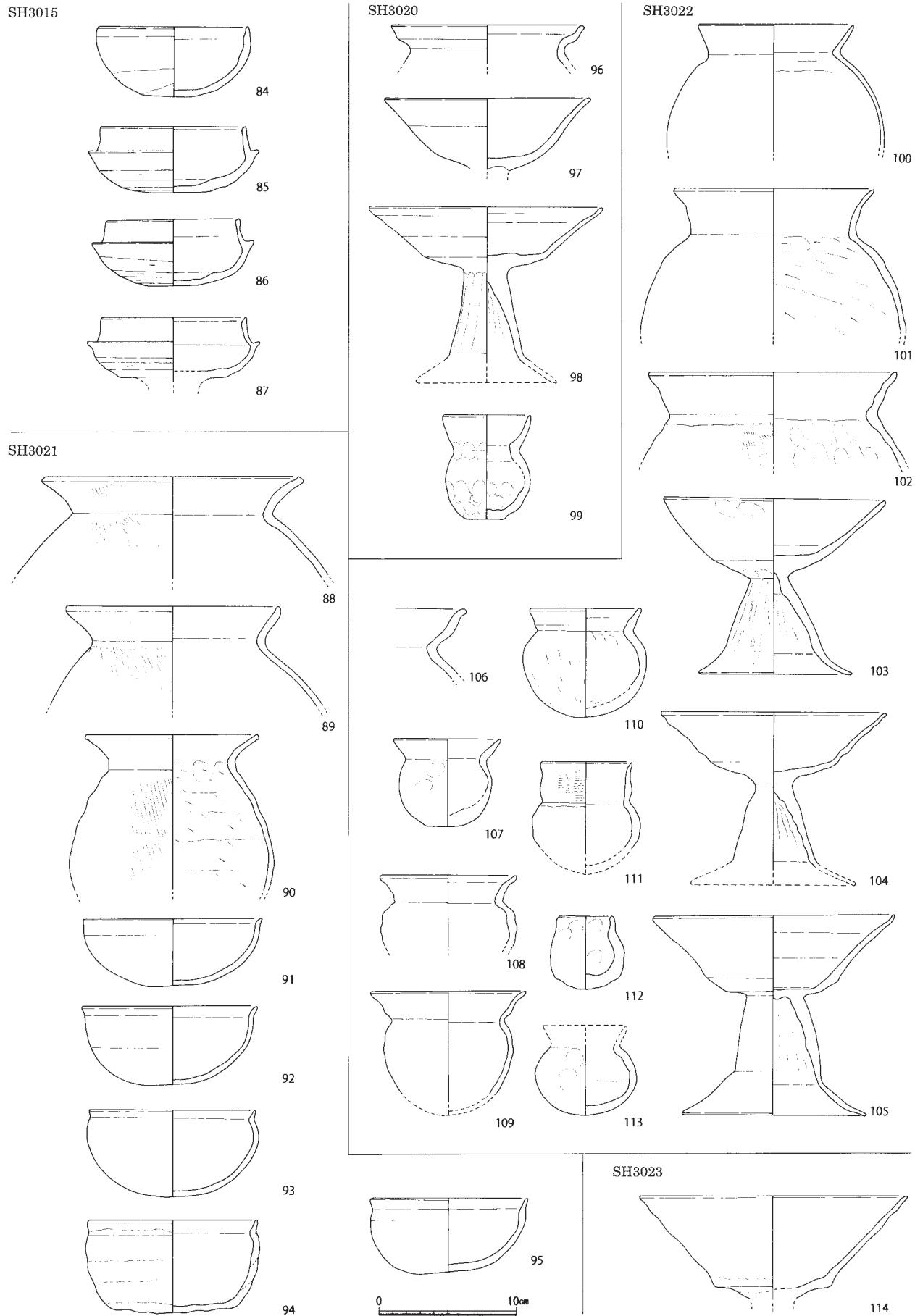
第23図 SH3001～3003・3005～3007・3010出土土器実測図 1/4



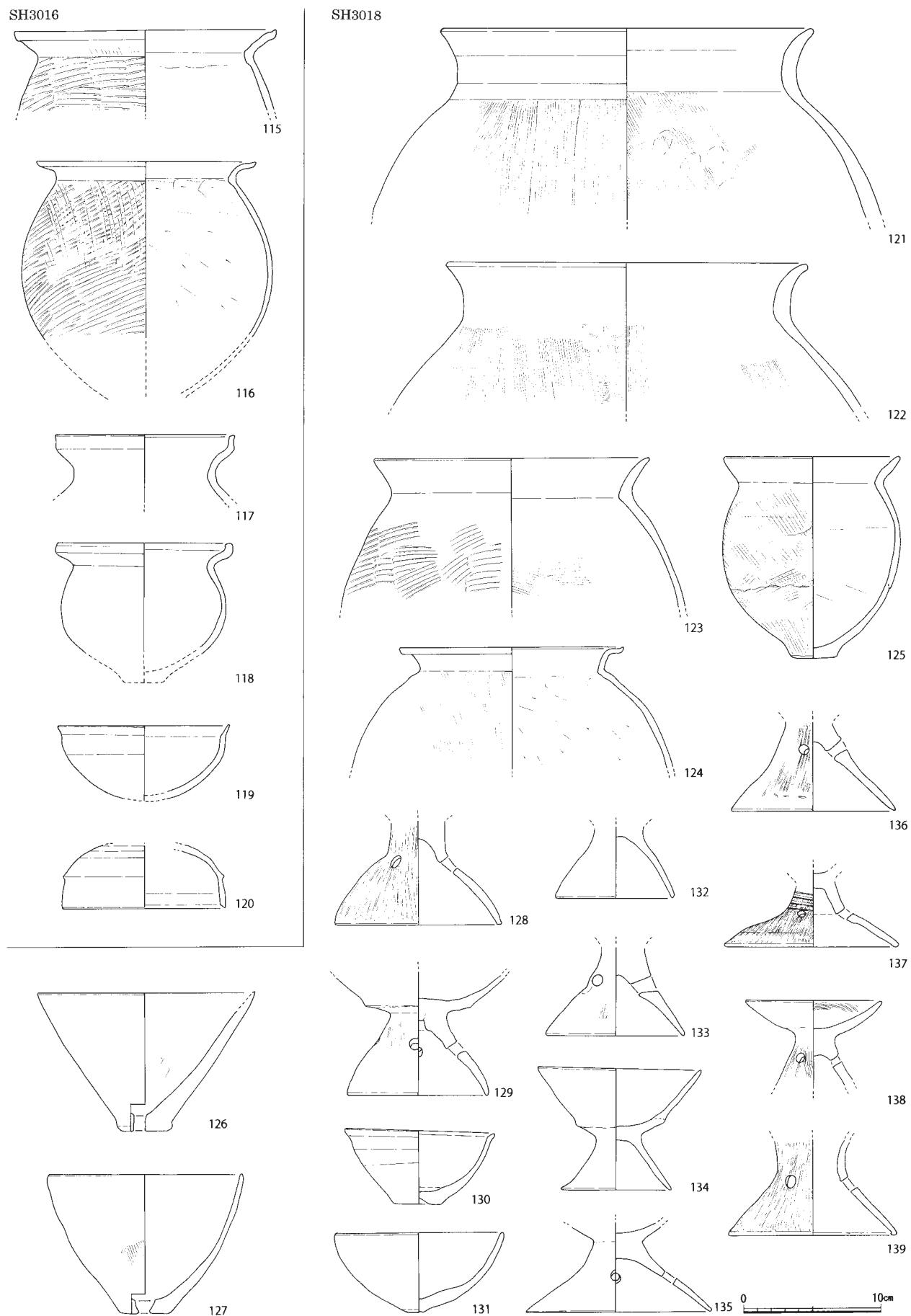
第24図 SH3004出土土器実測図 1/4



第25図 SH3009・3011～3014出土土器実測図 1/4

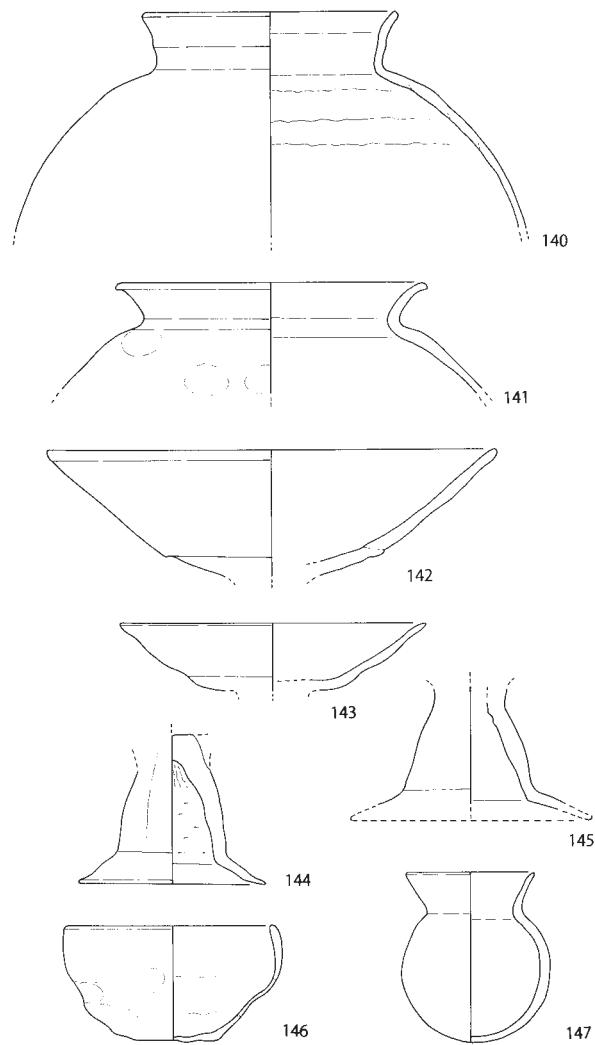


第26図 SH3015・3020～3023出土土器実測図 1/4

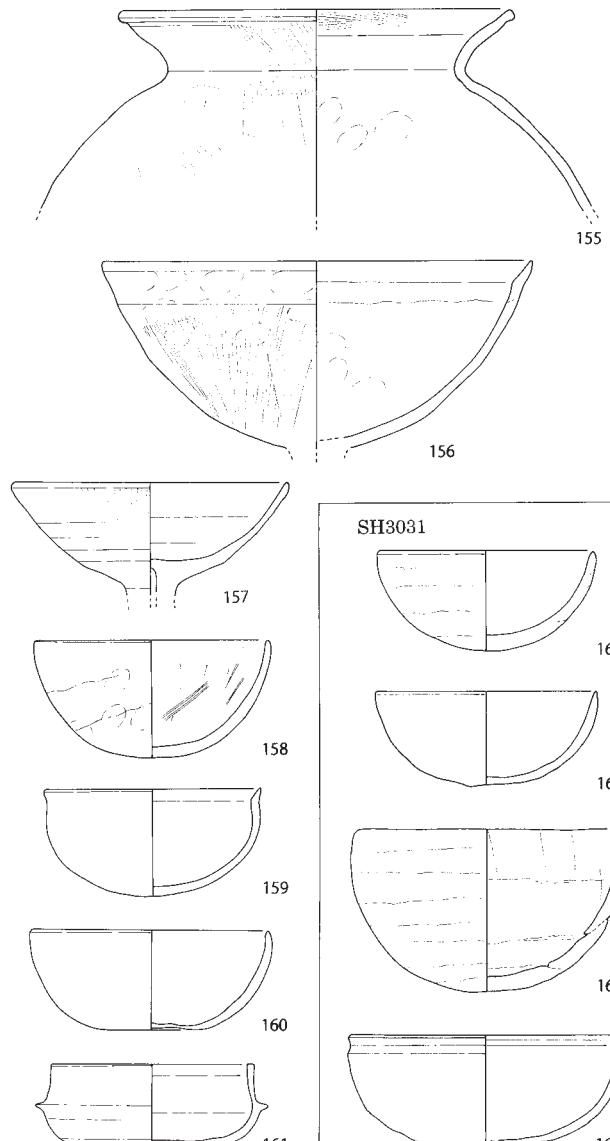


第27図 SH3016・3018出土土器実測図 1/4

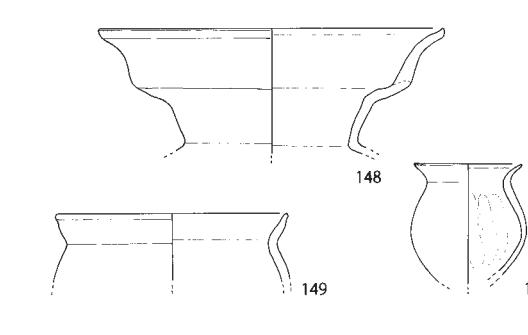
SH3024



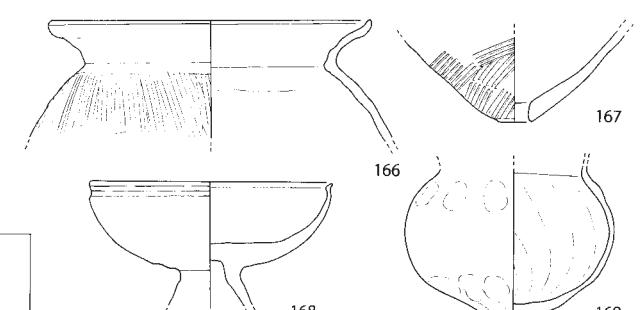
SH3027



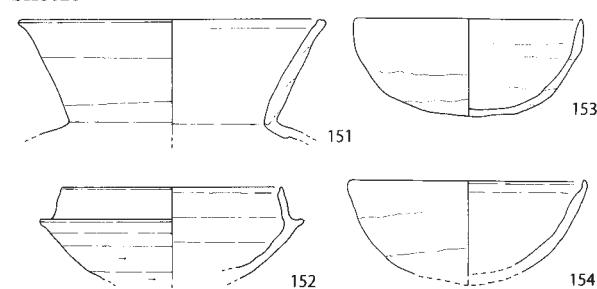
SH3025



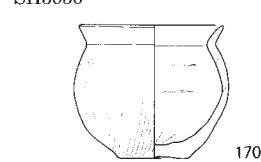
SH3032



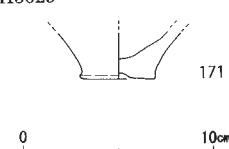
SH3026



SH3030

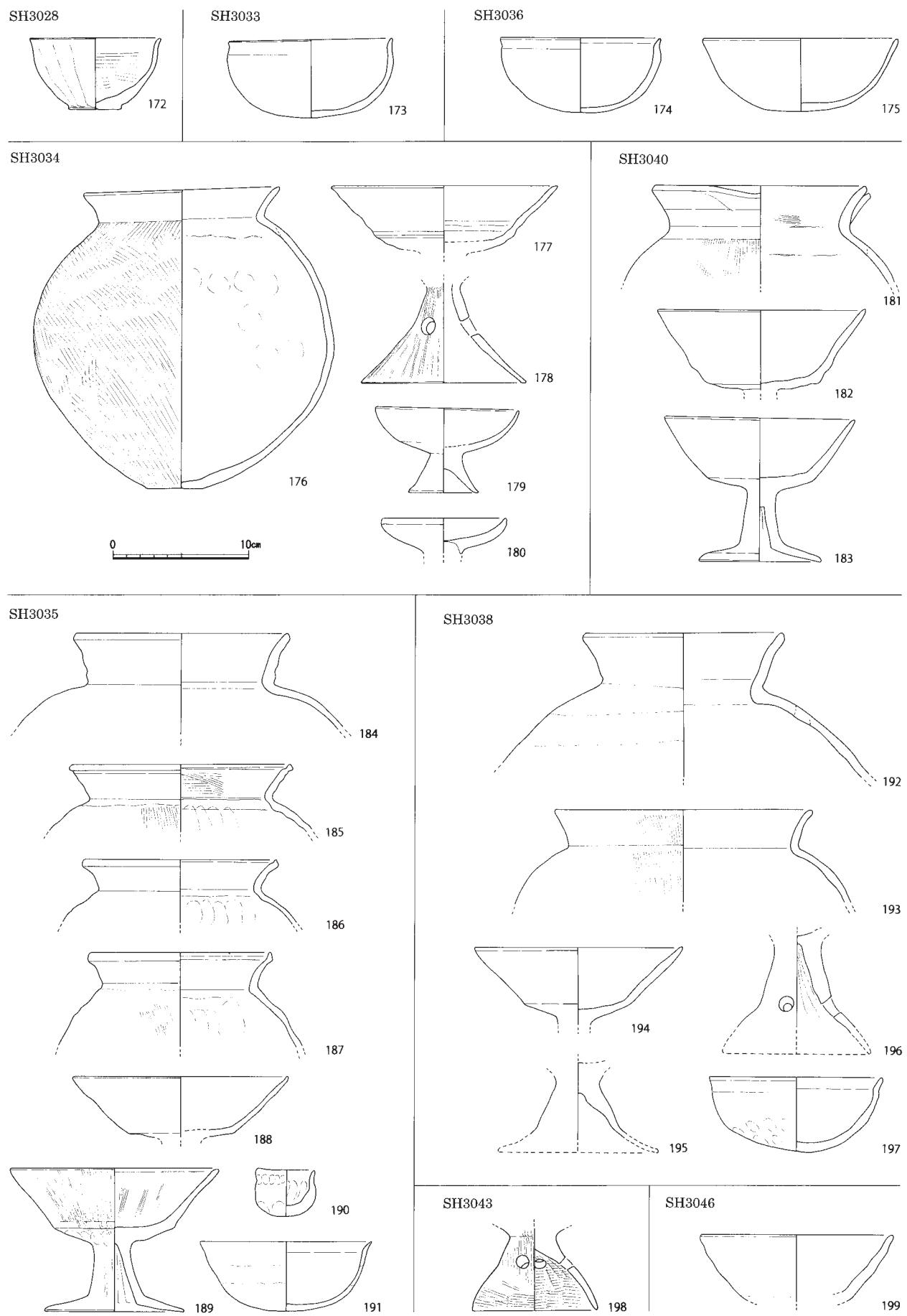


SH3029

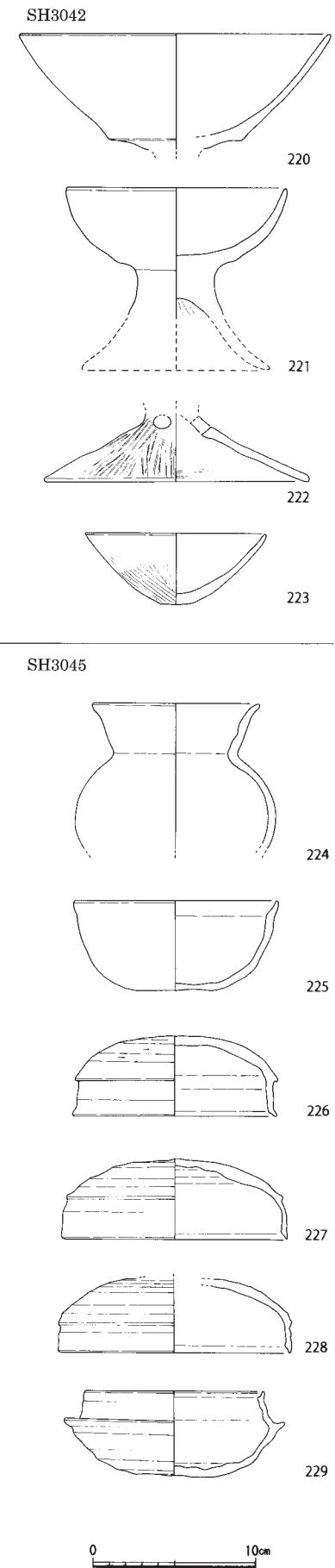
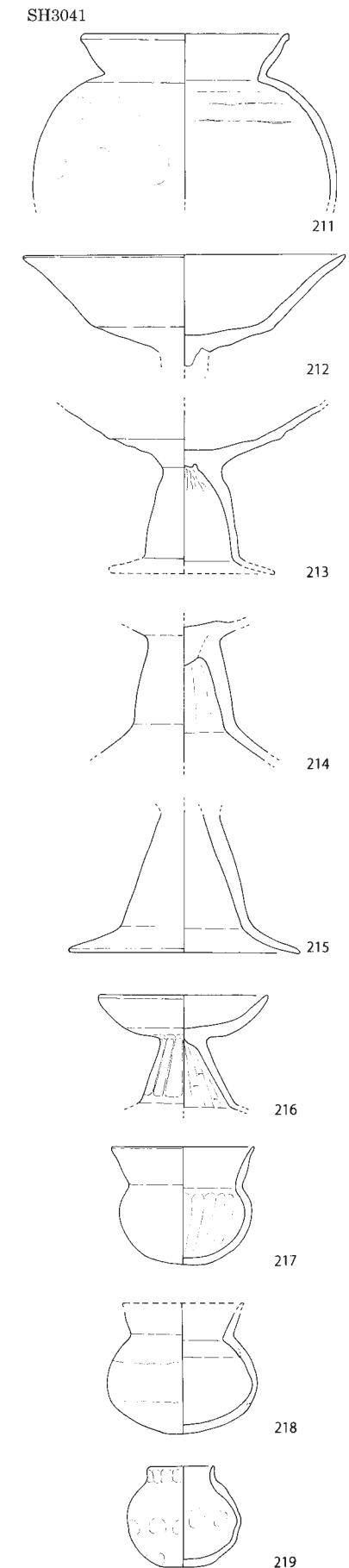
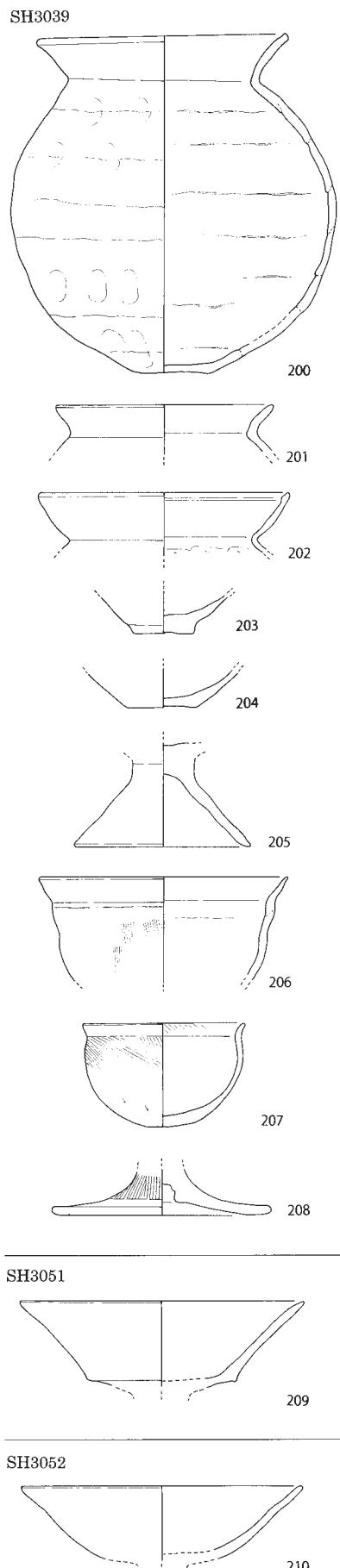


0 10cm

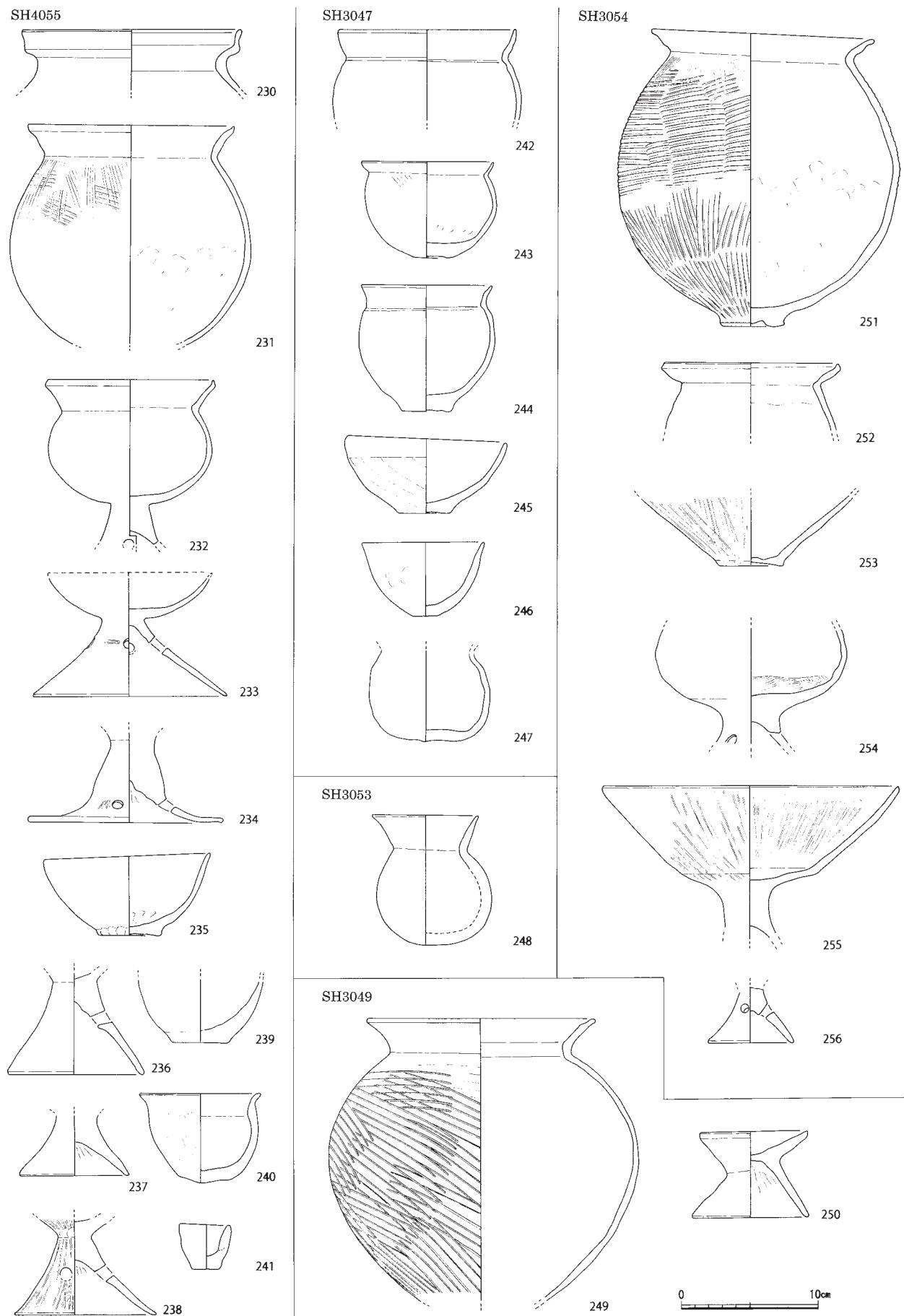
第28図 SH3024~3027・3029~3032出土土器実測図 1/4



第29図 SH3028・3033～3036・3038・3040・3043・3046出土土器実測図 1/4

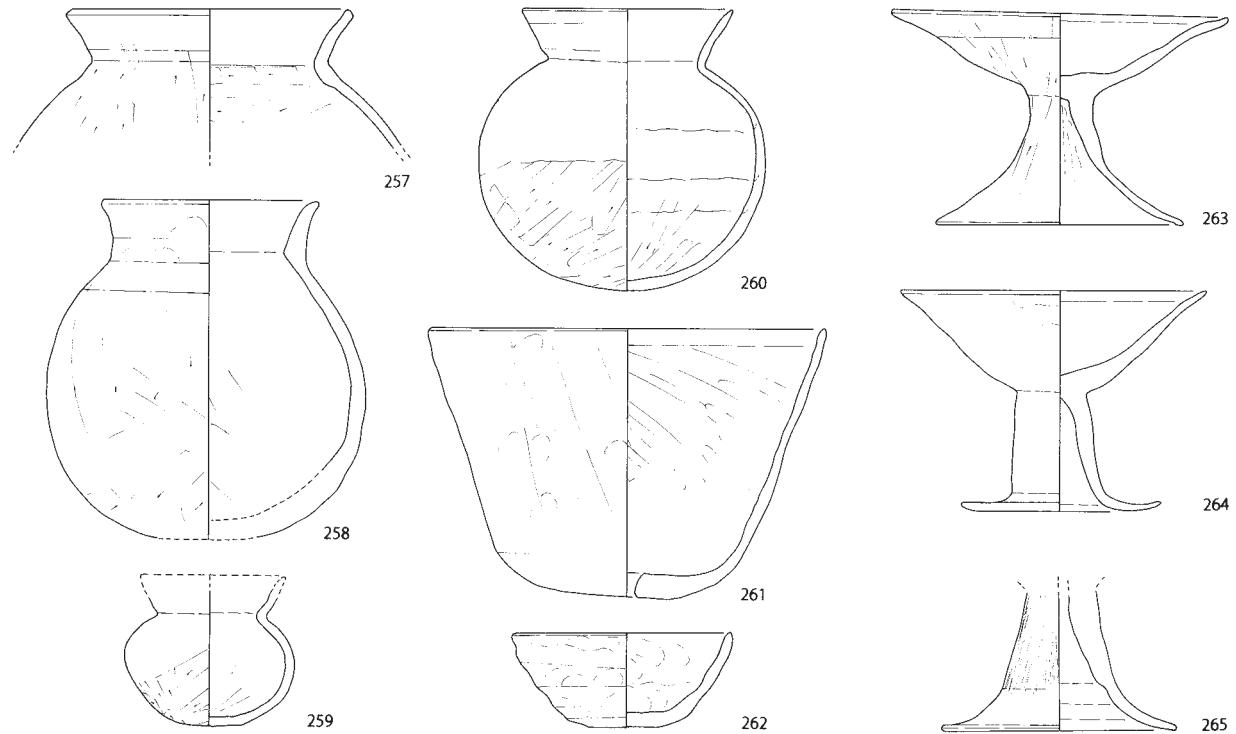


第30図 SH3039・3041・3042・3045・3051・3052出土土器実測図 1/4

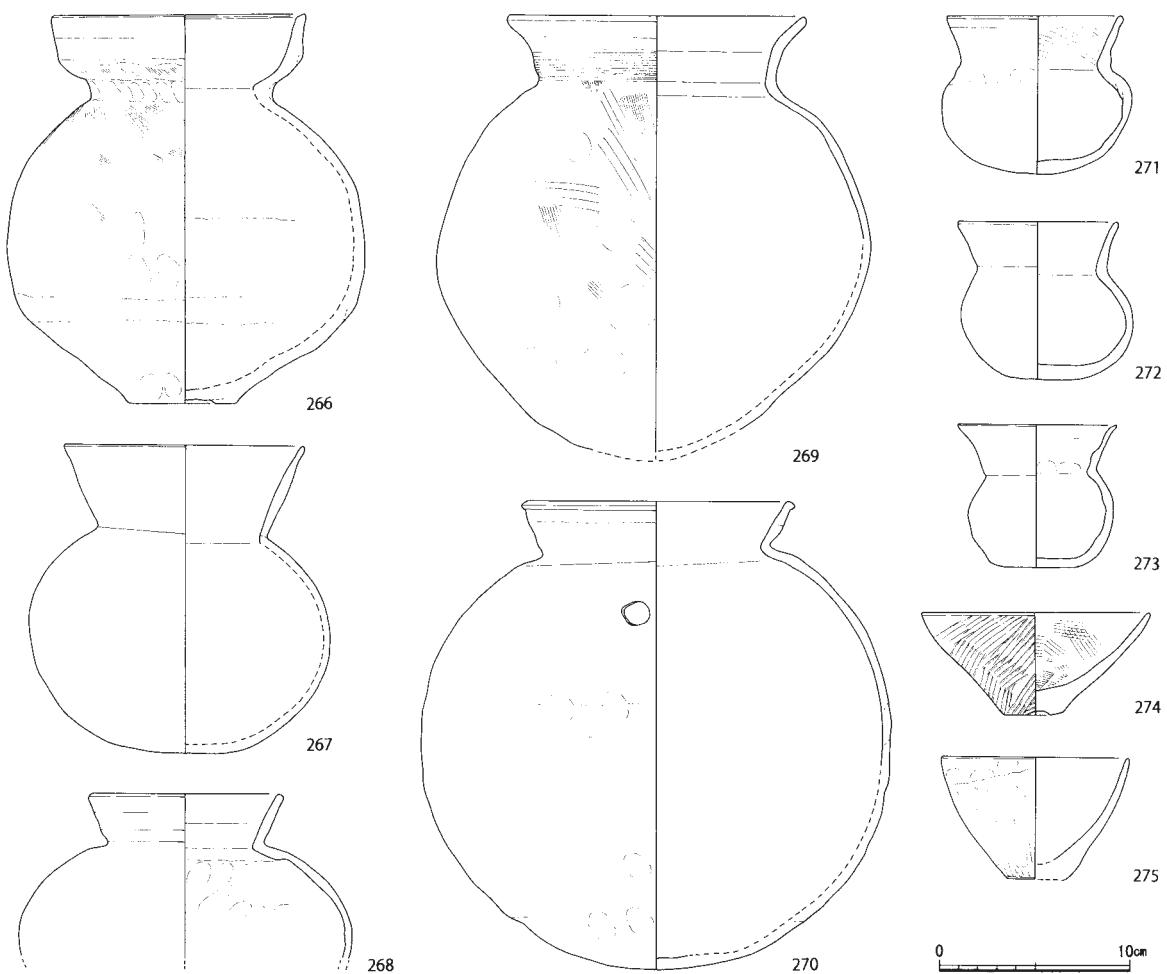


第31図 SH3047・3049・3053・3054・4055出土土器実測図 1/4

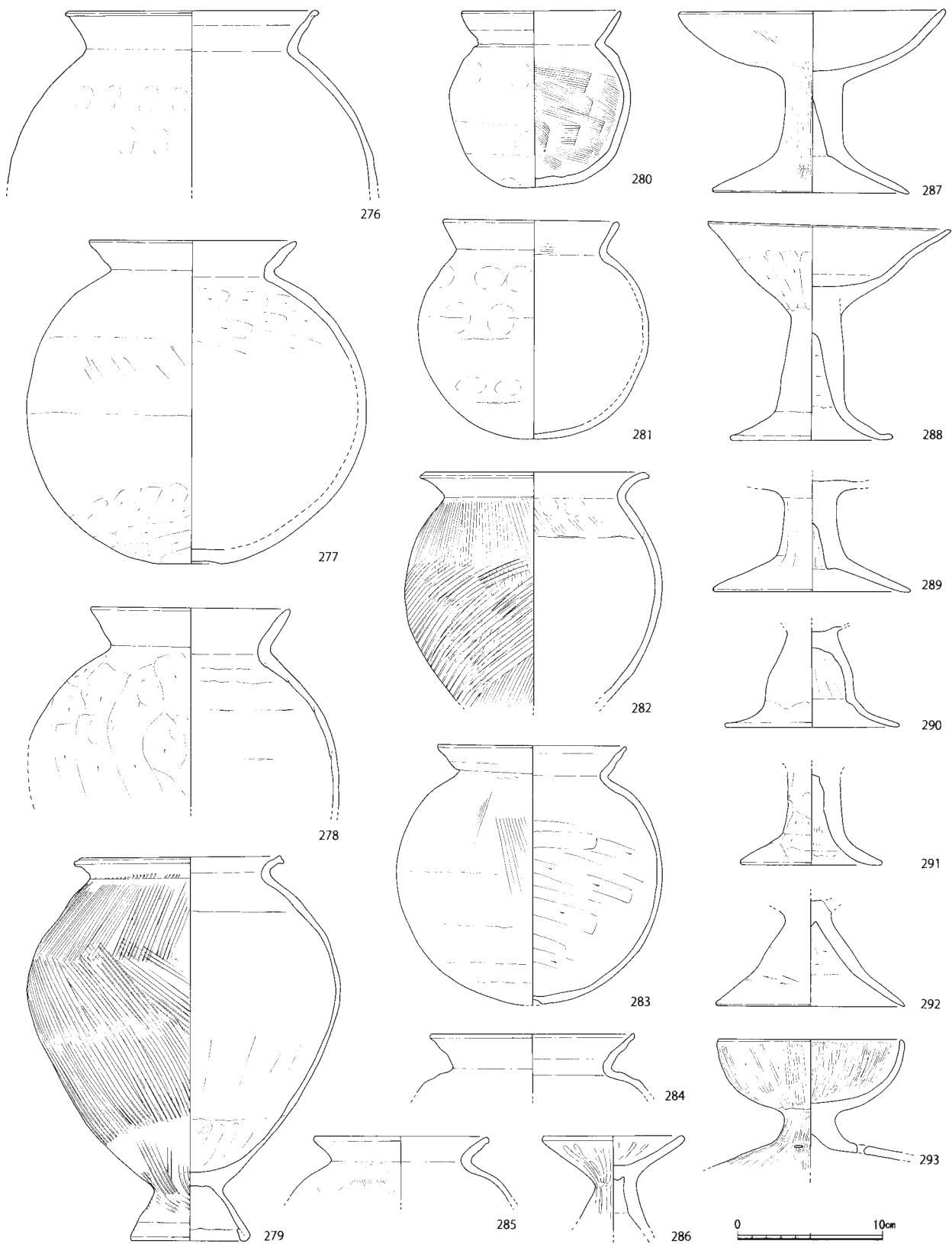
土器列 I



土器列 II

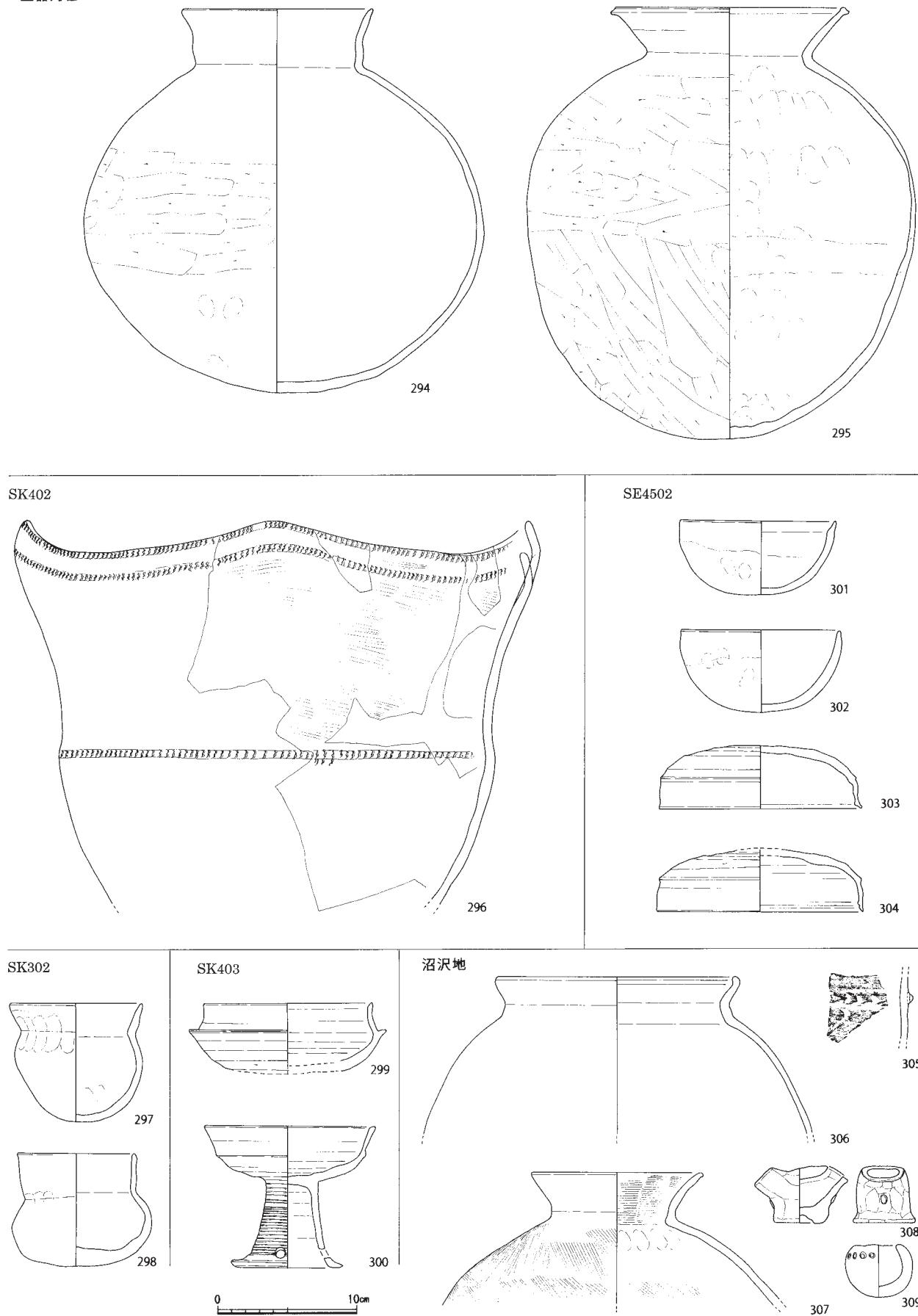


第32図 土器列 I・II 出土土器実測図 1/4

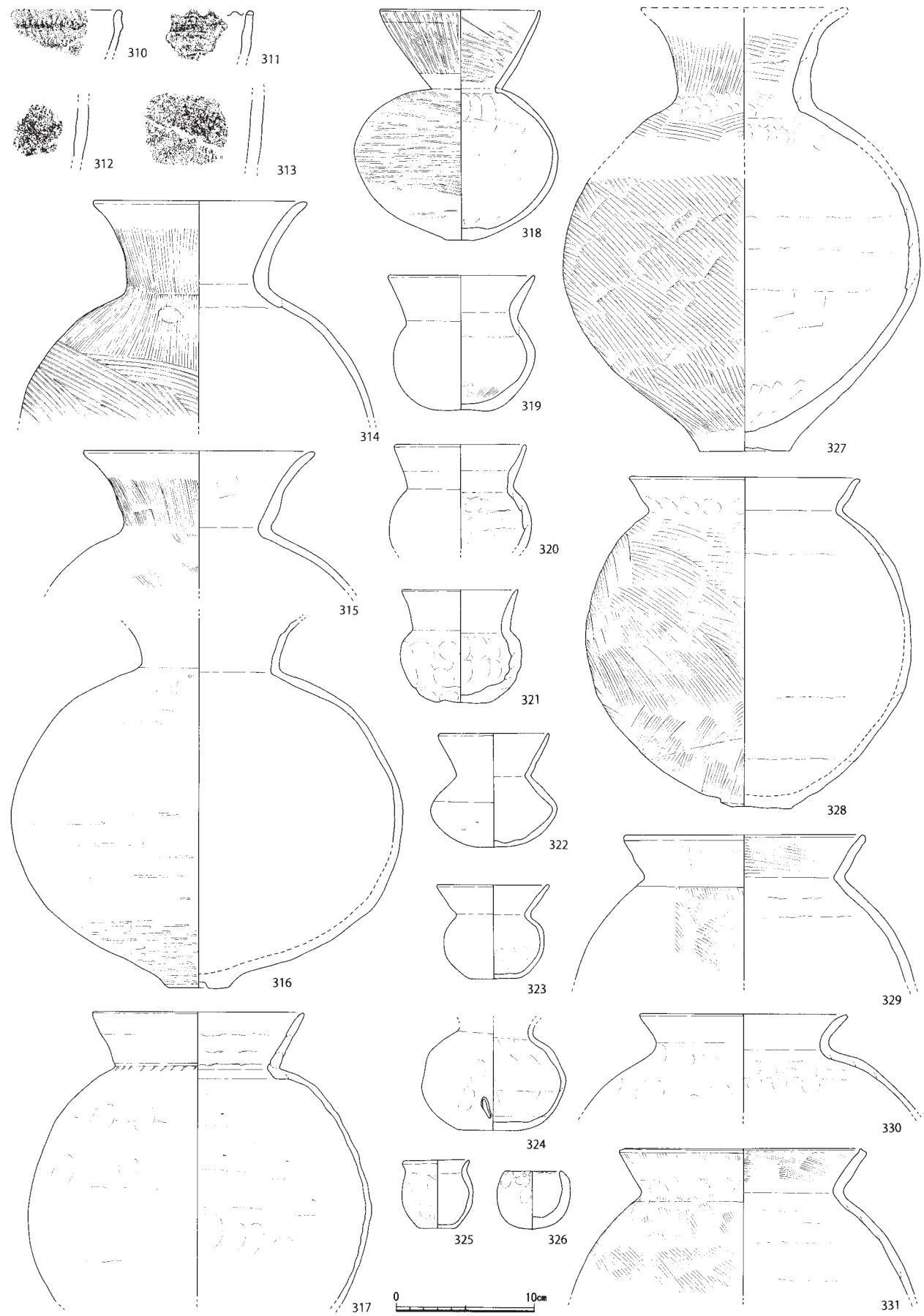


第33図 土器列Ⅱ出土土器実測図 1/4

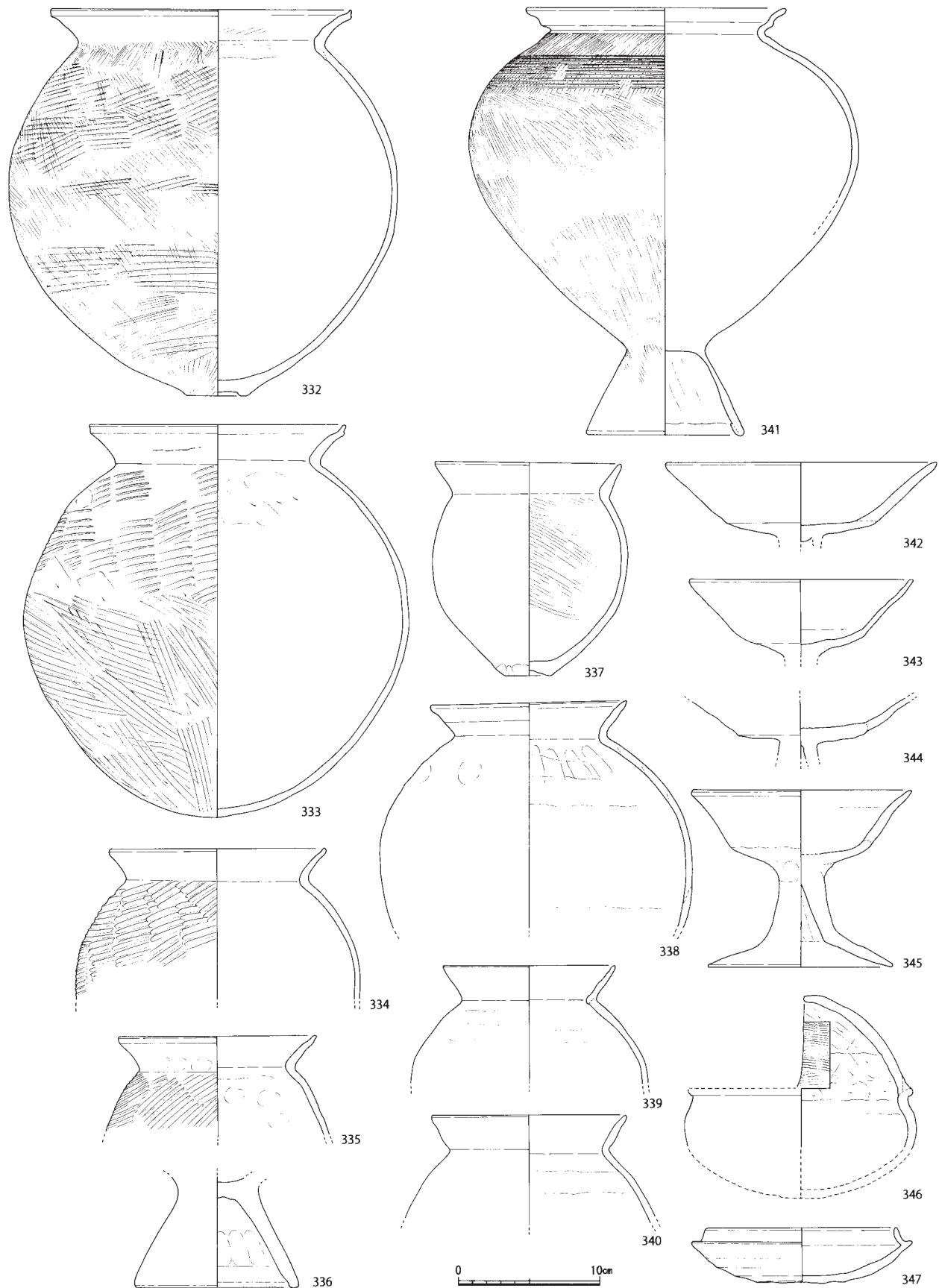
土器列 II



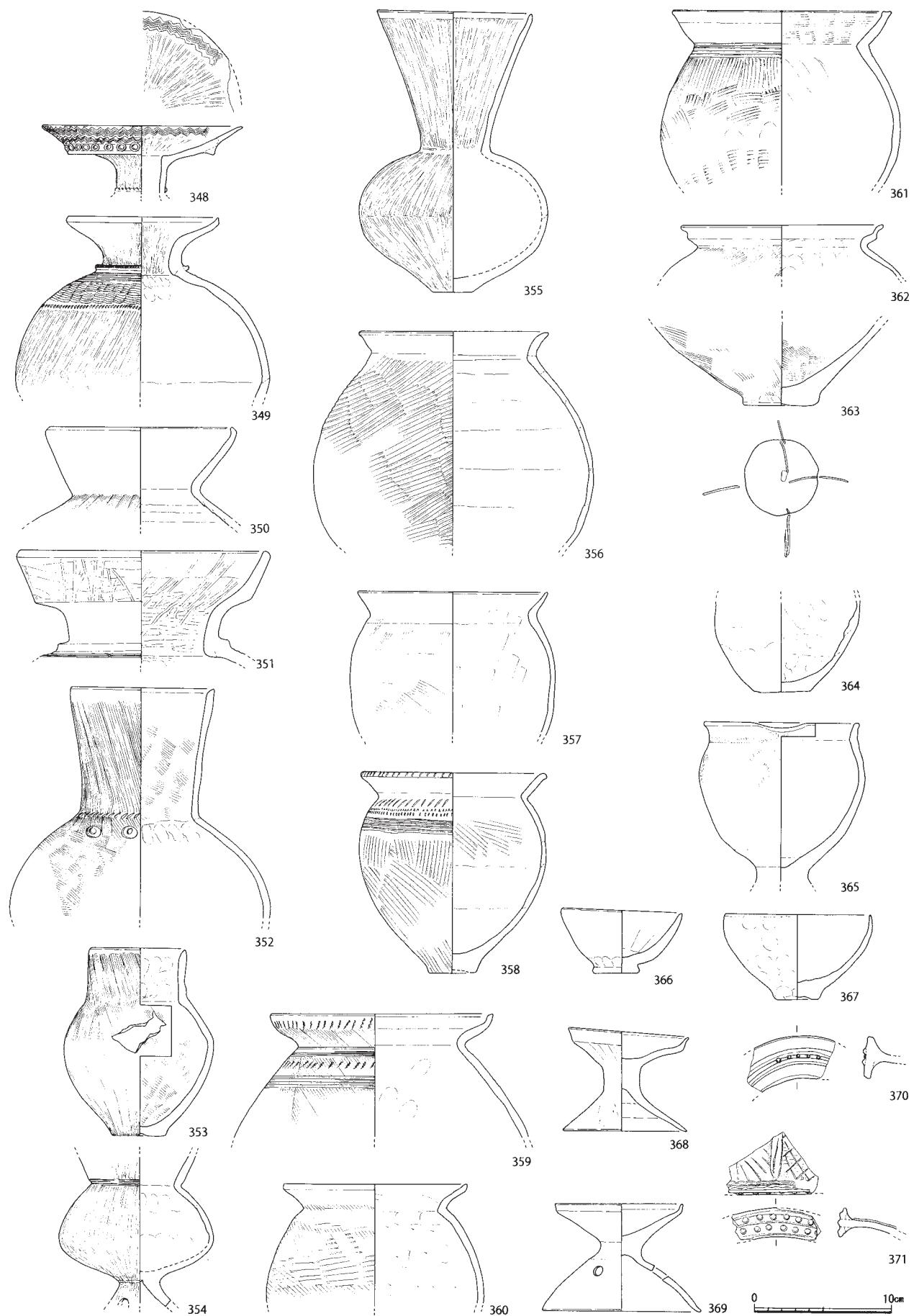
第34図 土器列 II、SK302・402・403、SE4502、沼沢地出土土器実測図 1/4



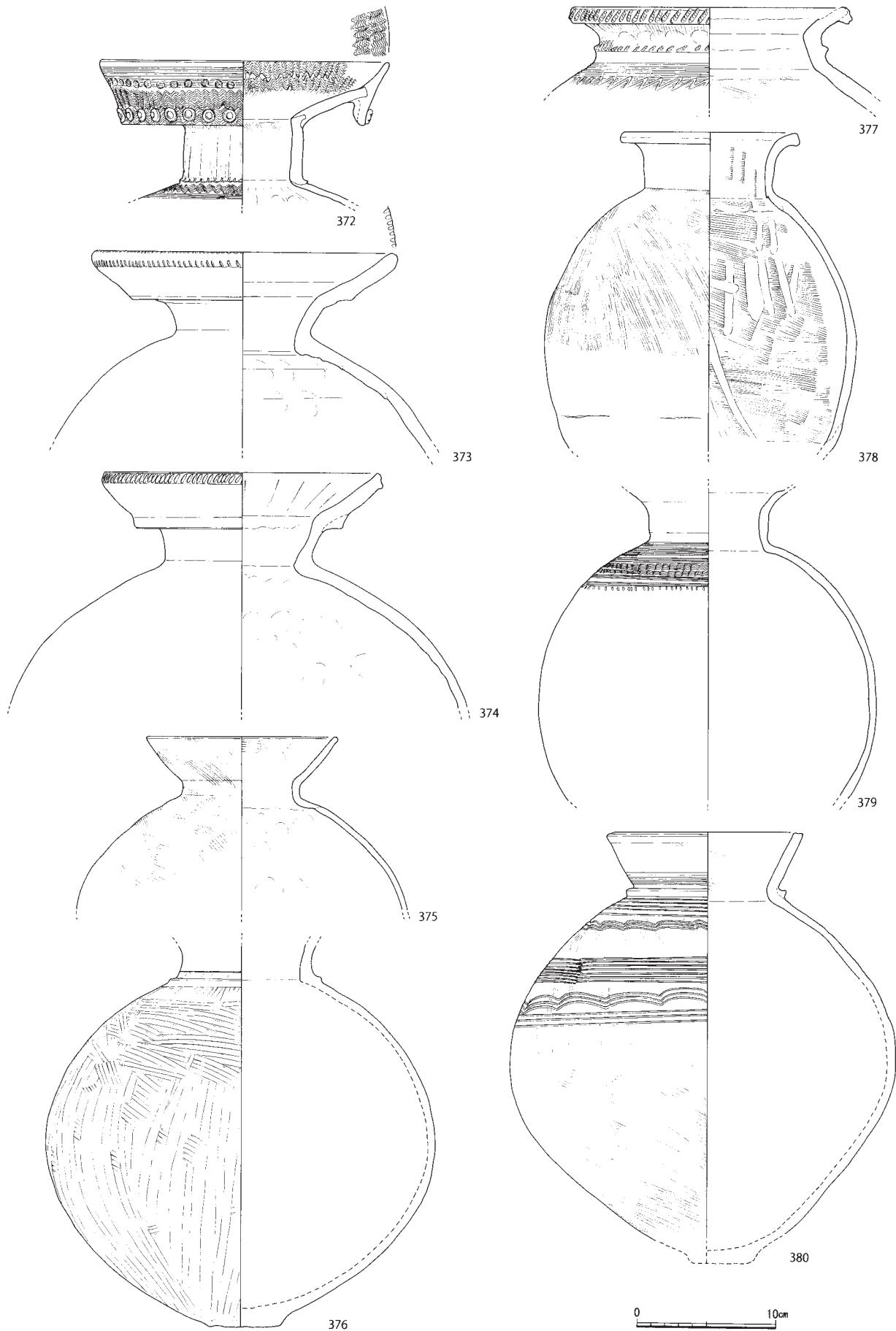
第35図 大溝出土土器実測図 1/4



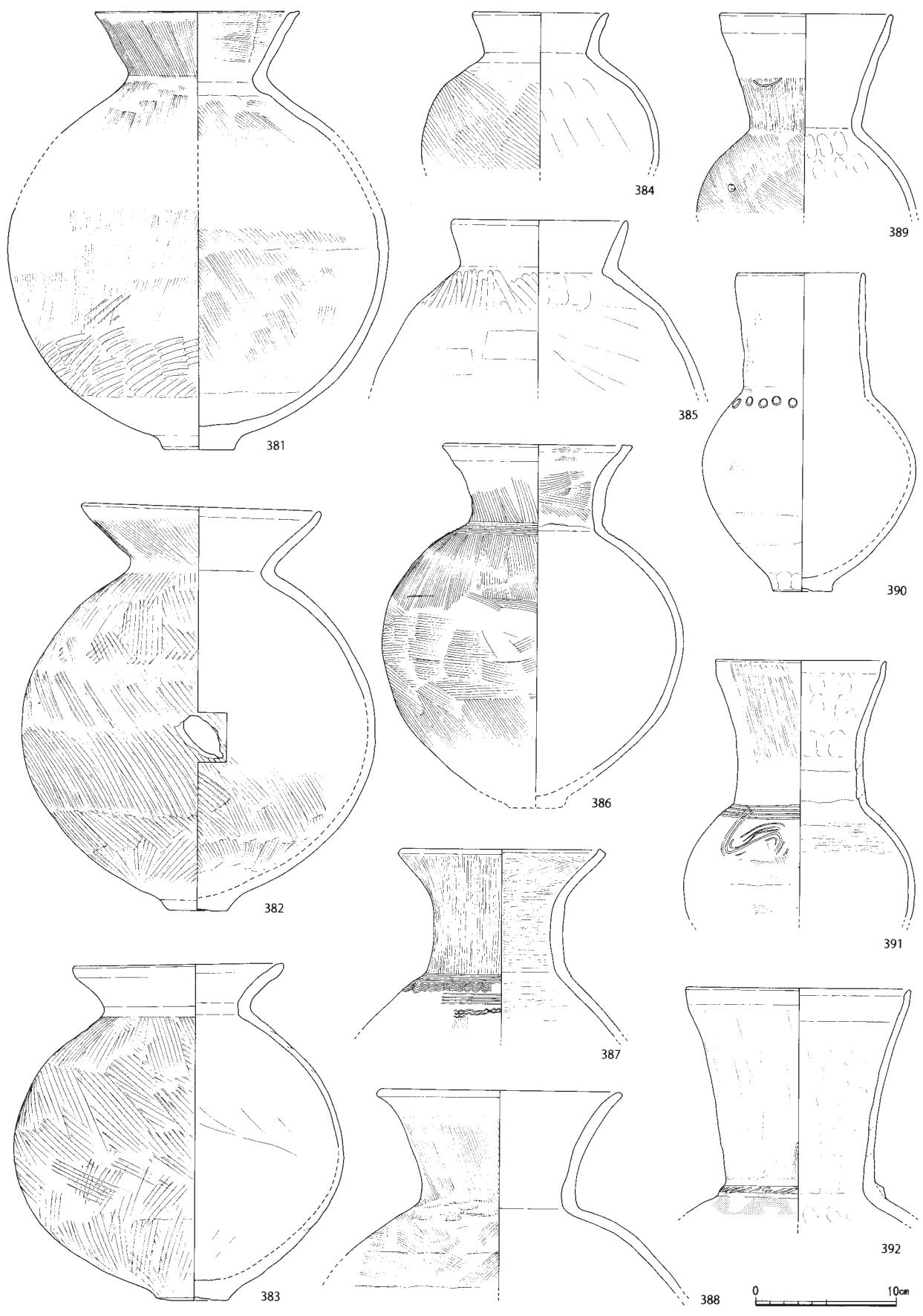
第36図 大溝出土土器実測図 1/4



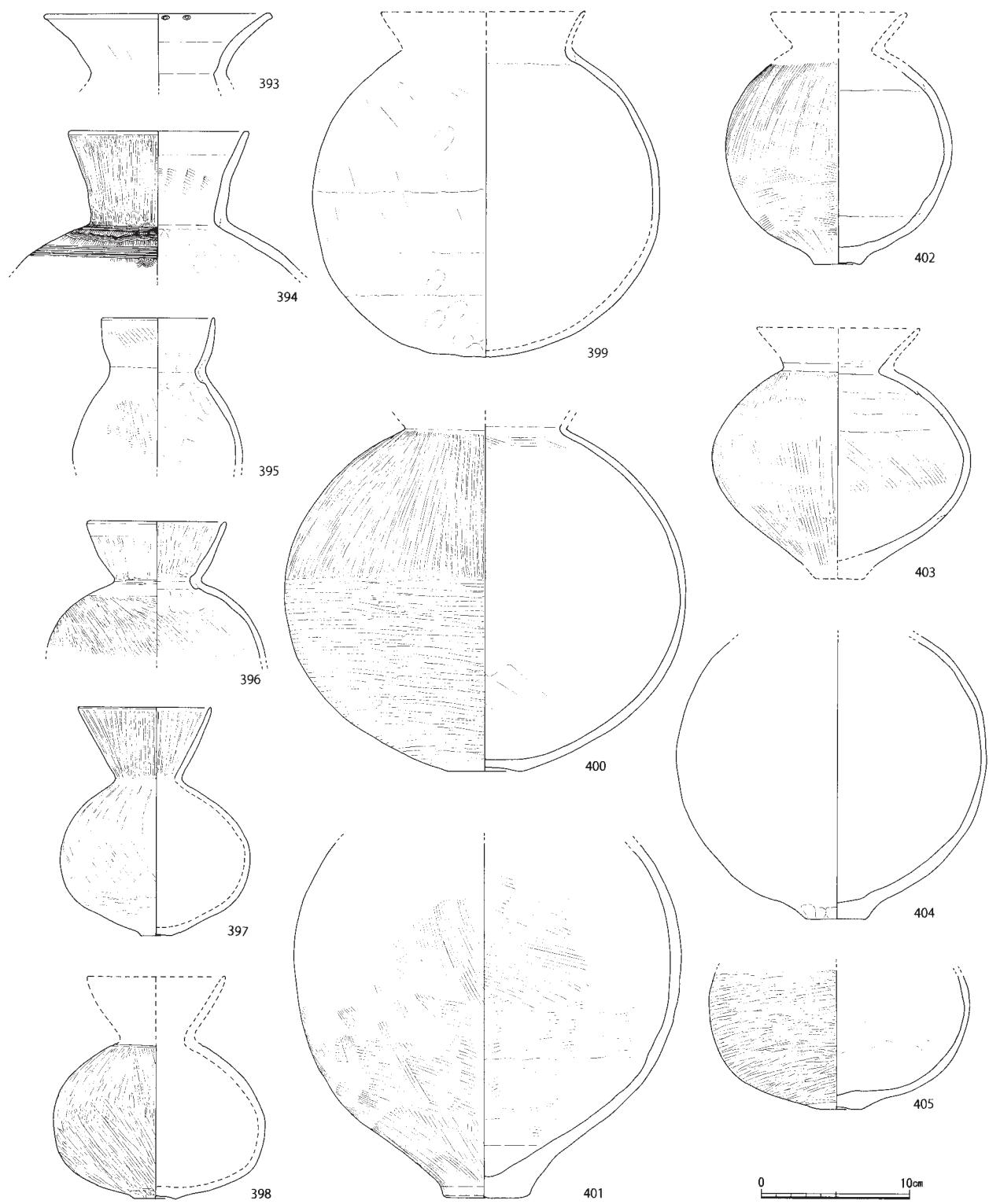
第37図 土器溜出土土器実測図 1/4



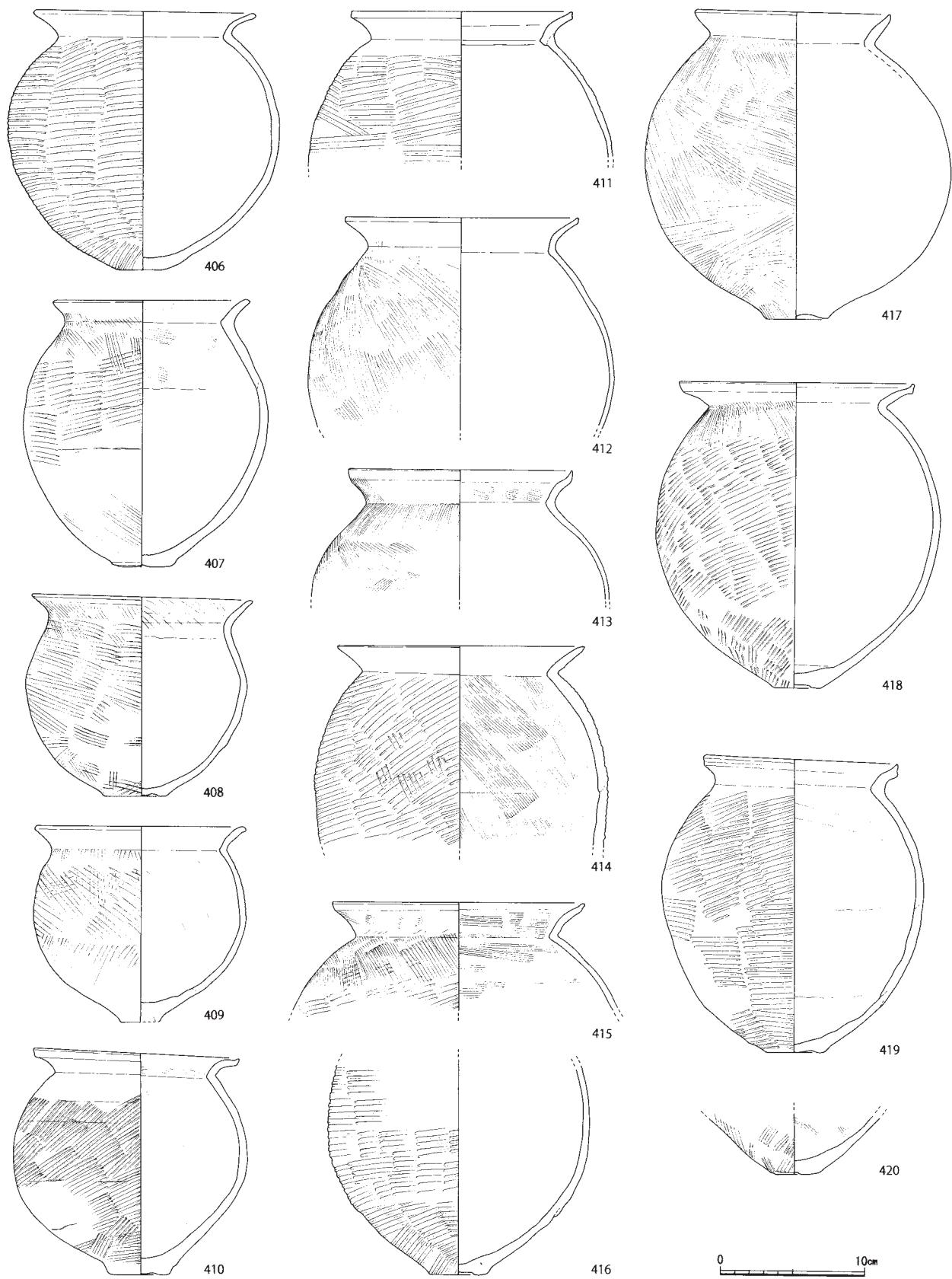
第38図 土器溜出土土器実測図 1/4



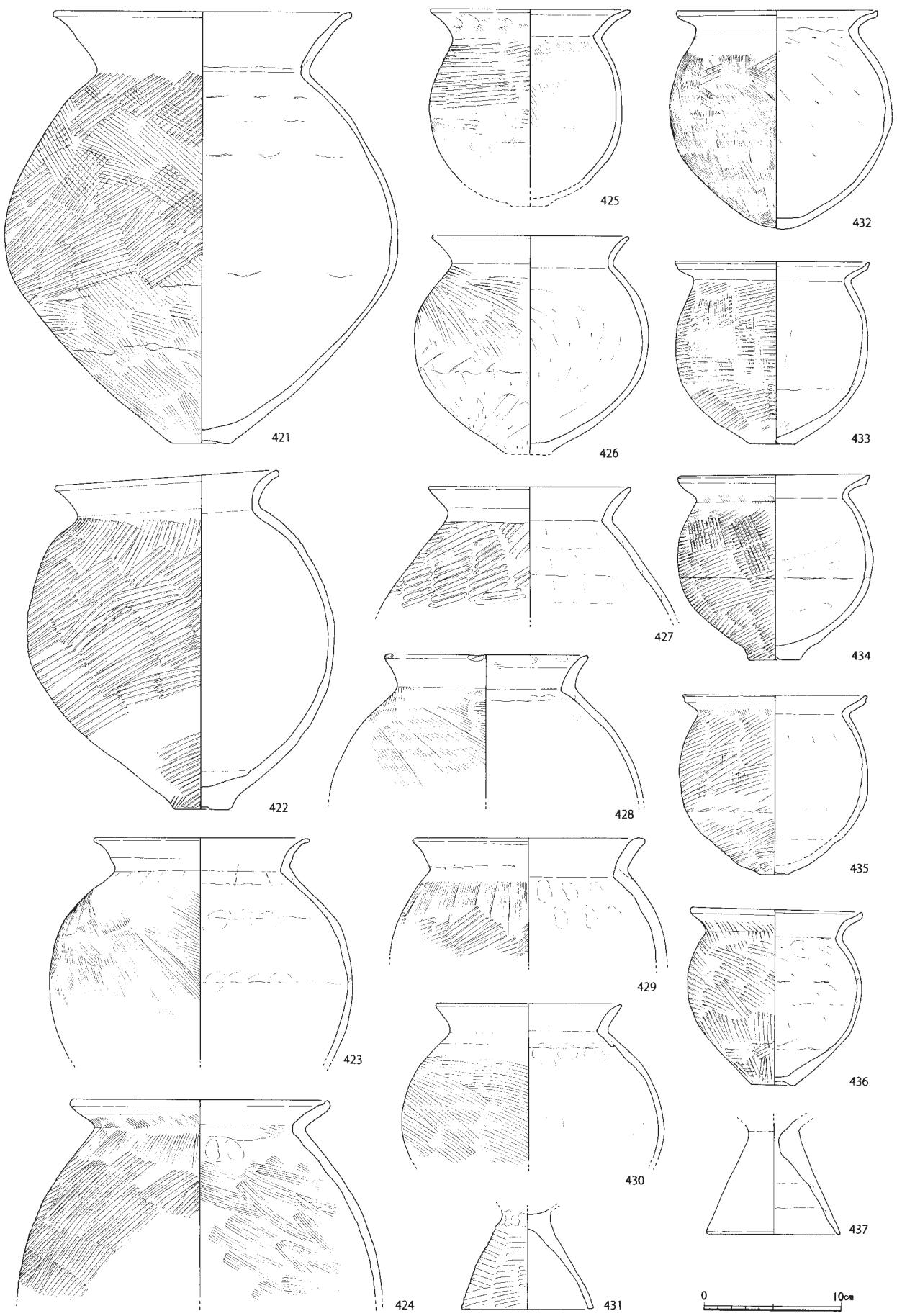
第39図 土器溜出土土器実測図 1/4



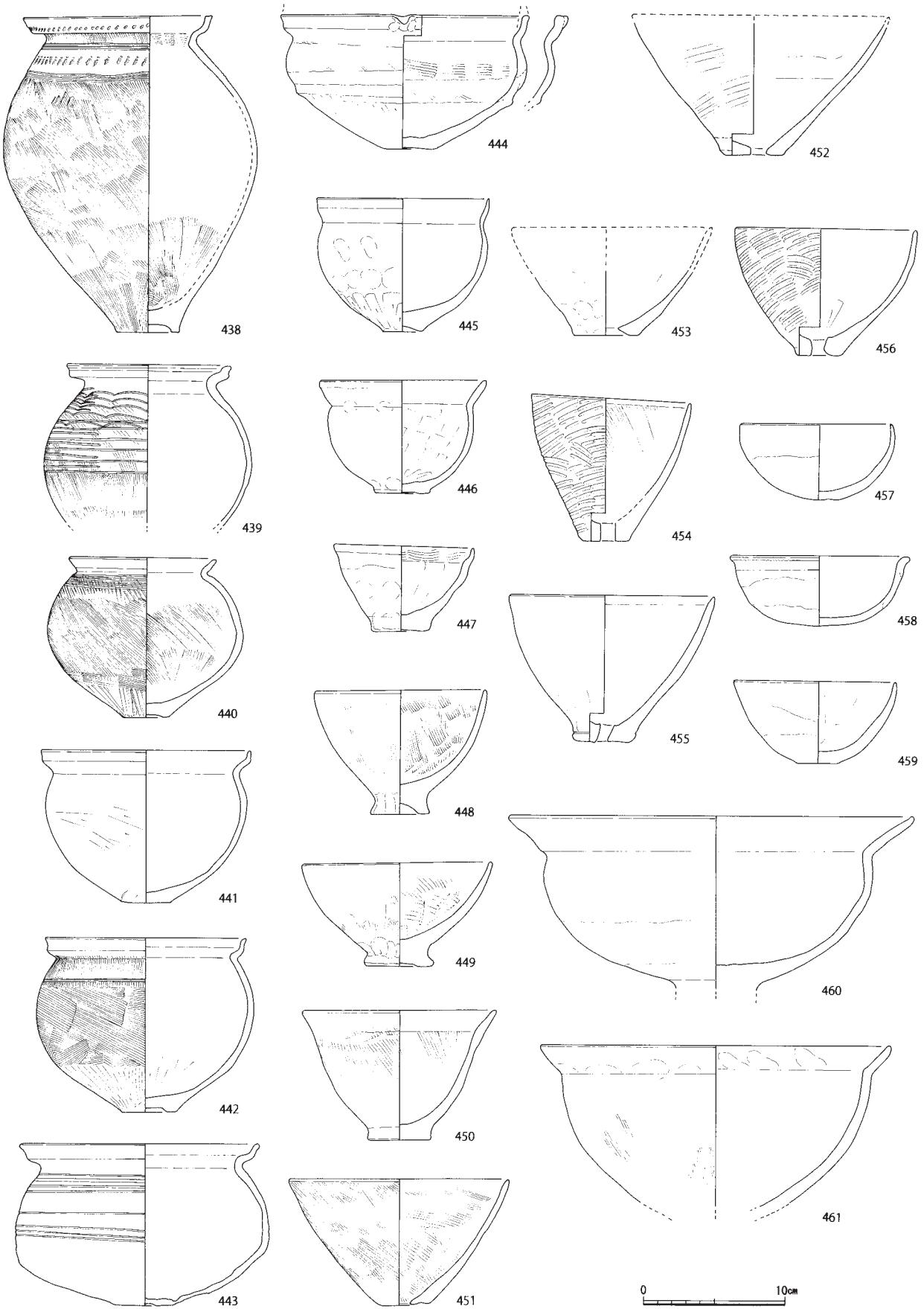
第40図 土器溜出土土器実測図 1/4



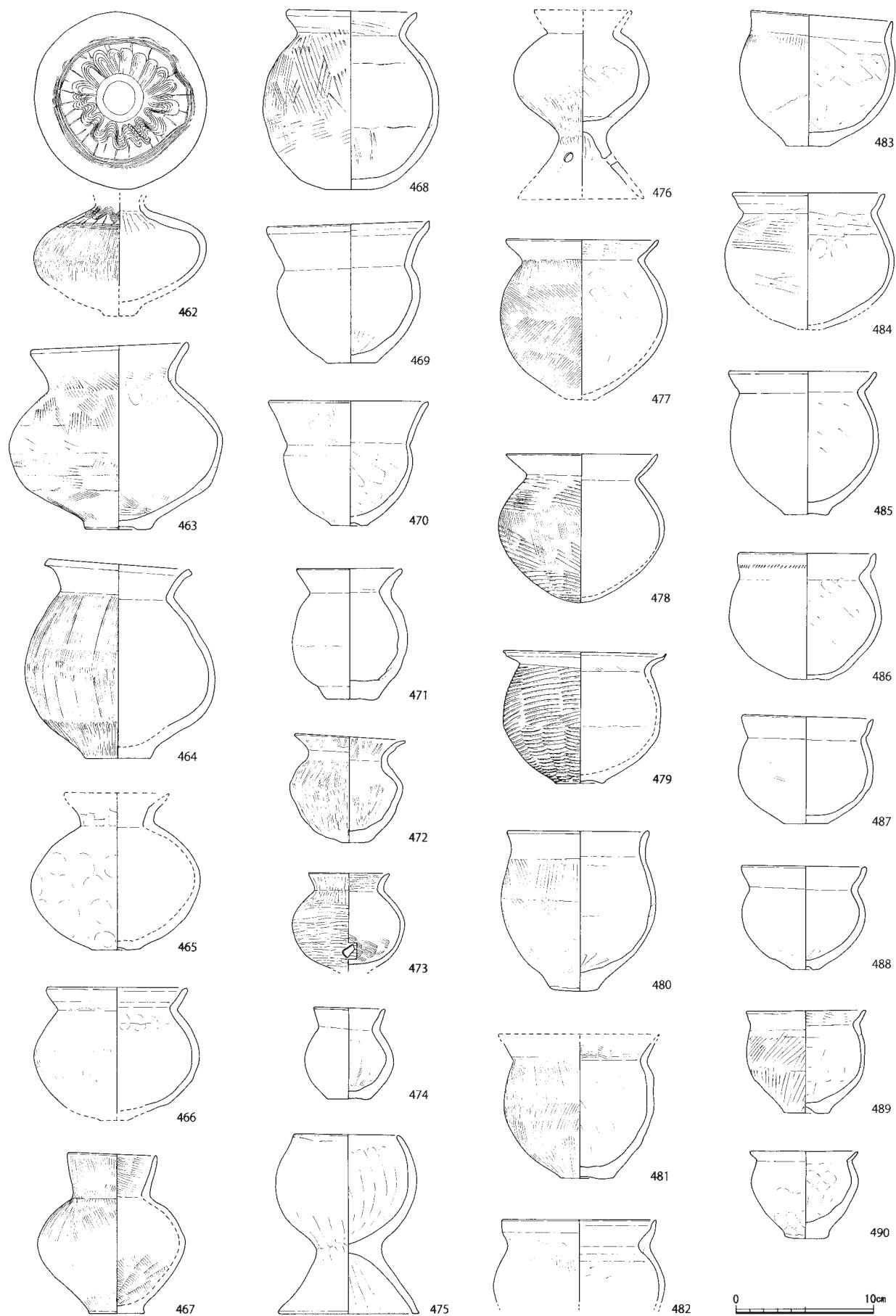
第41図 土器溜出土器実測図 1/4



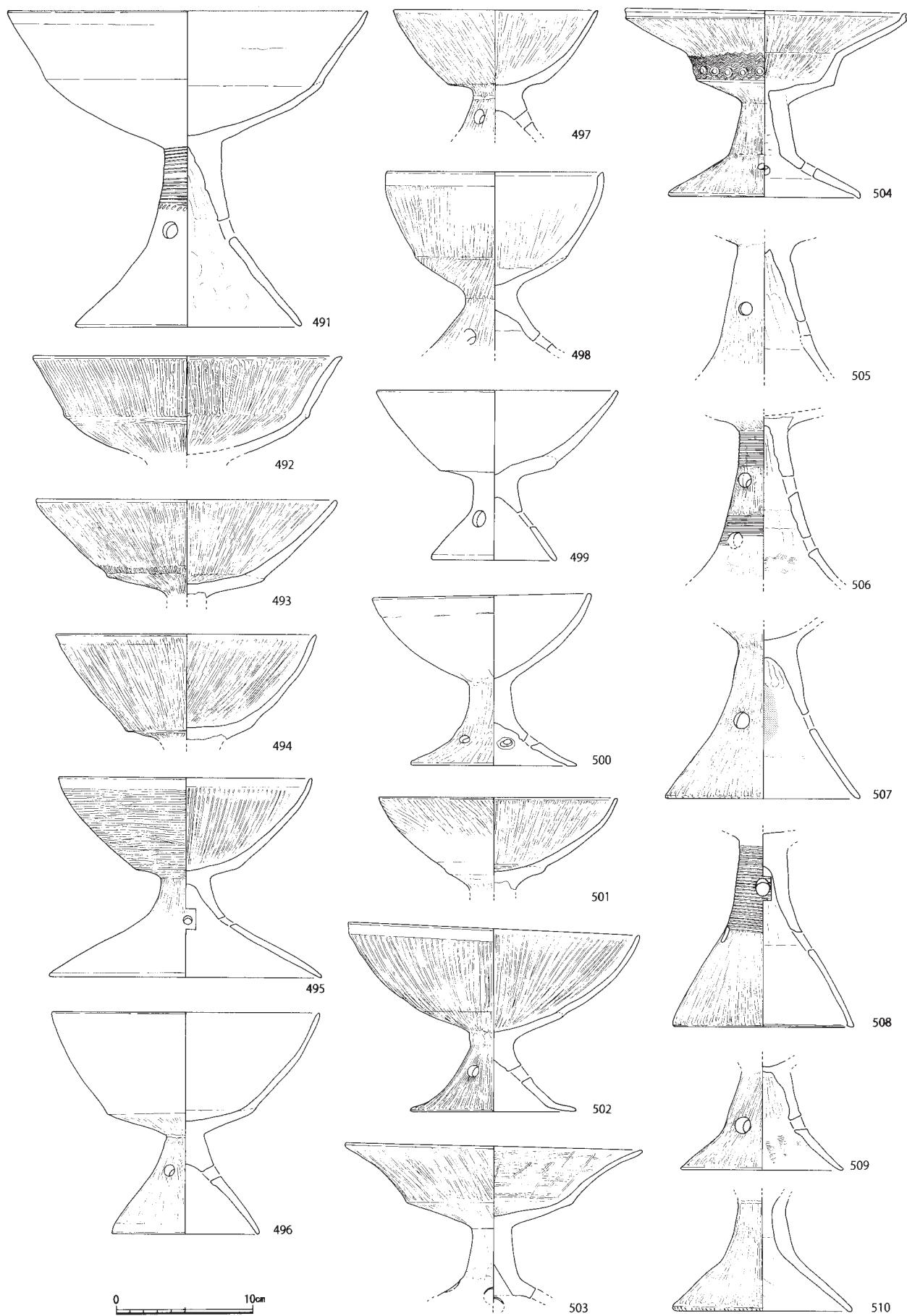
第42図 土器溜出土土器実測図 1/4



第43図 土器溜出土土器実測図 1/4

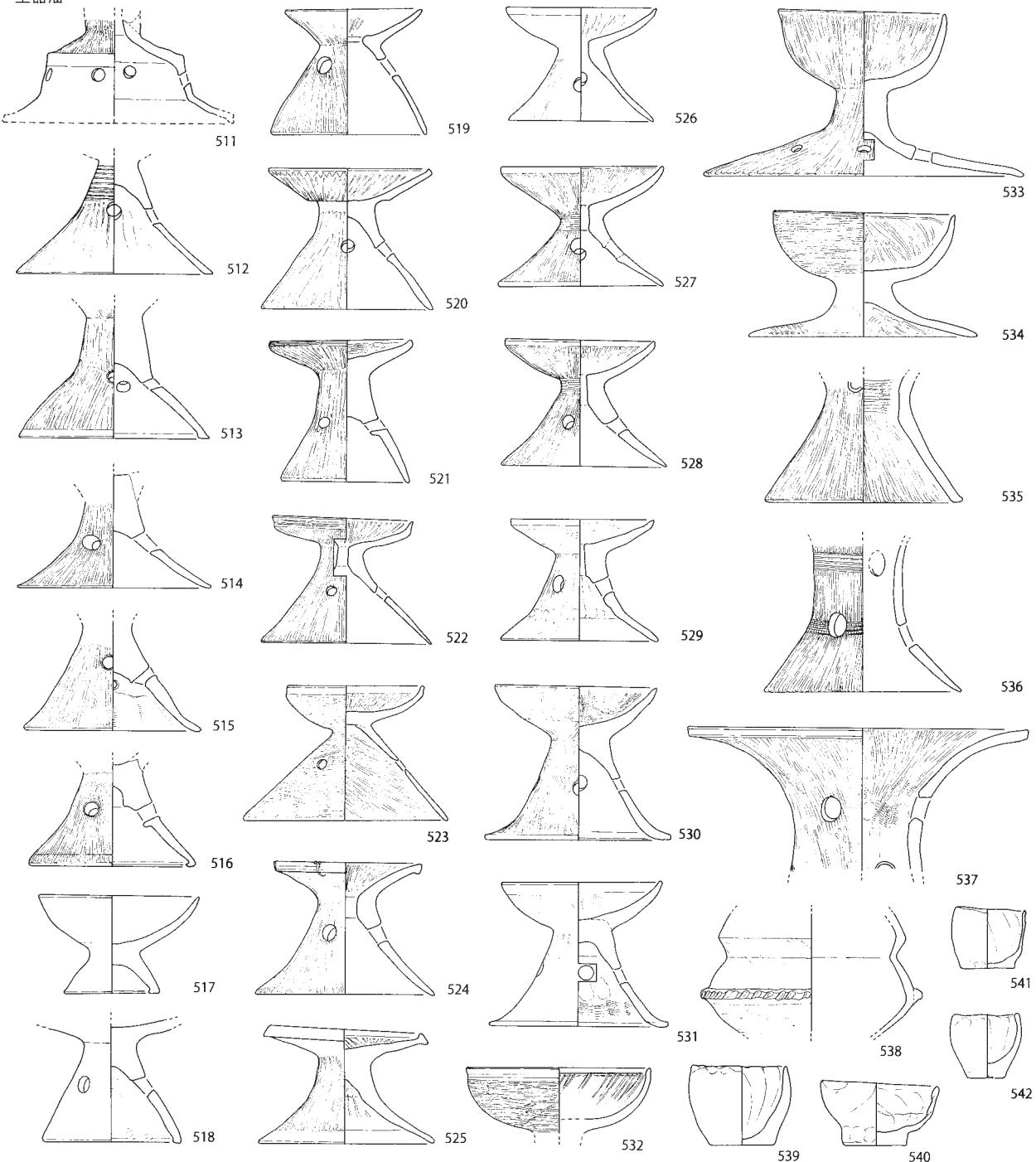


第44図 土器溜出土土器実測図 1/4

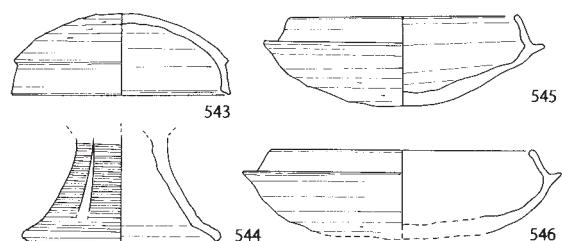


第45図 土器溜出土土器実測図 1/4

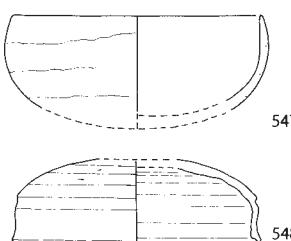
土器溜



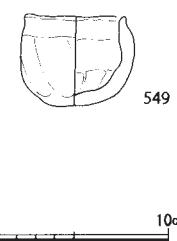
SD3033



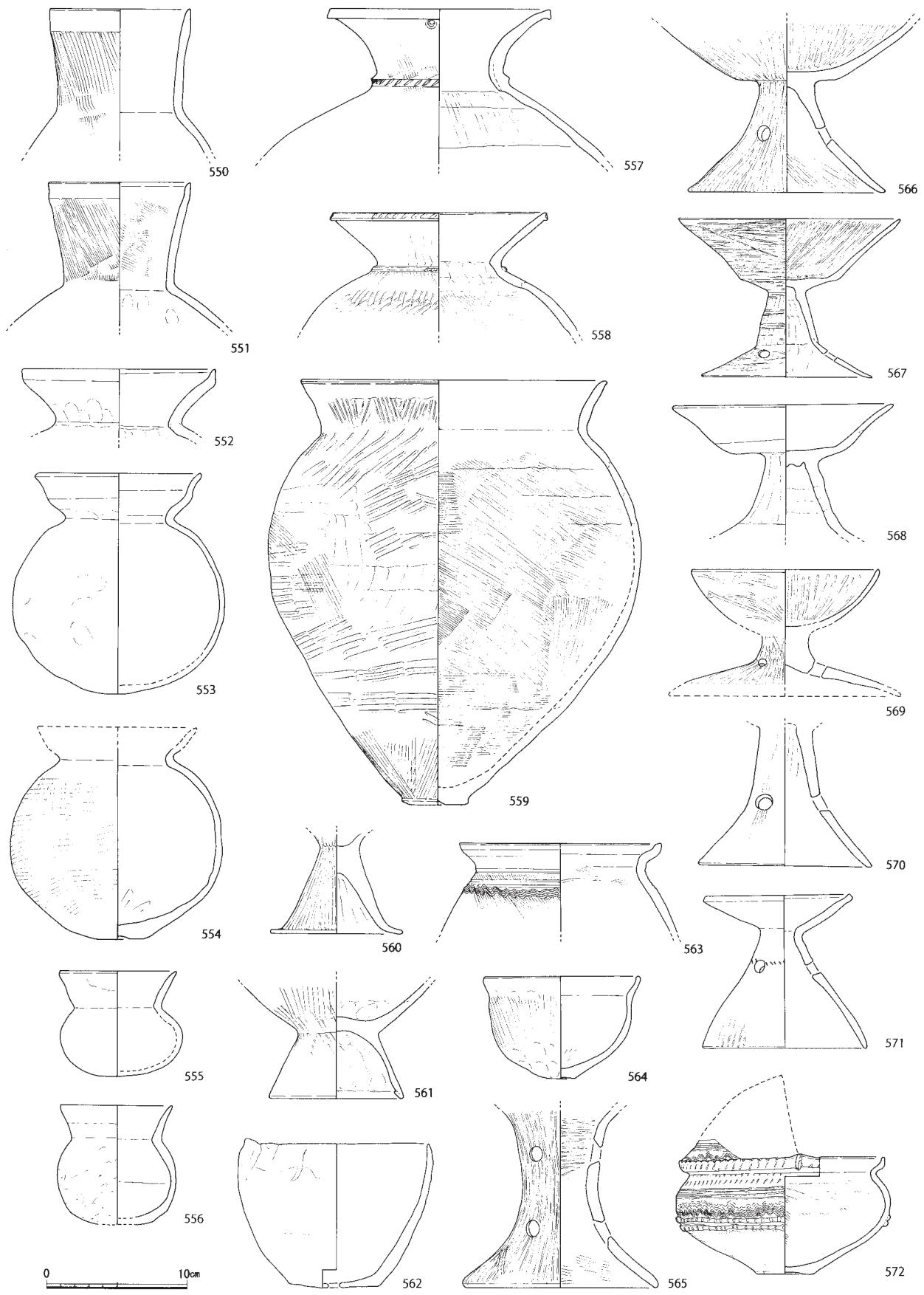
SK404



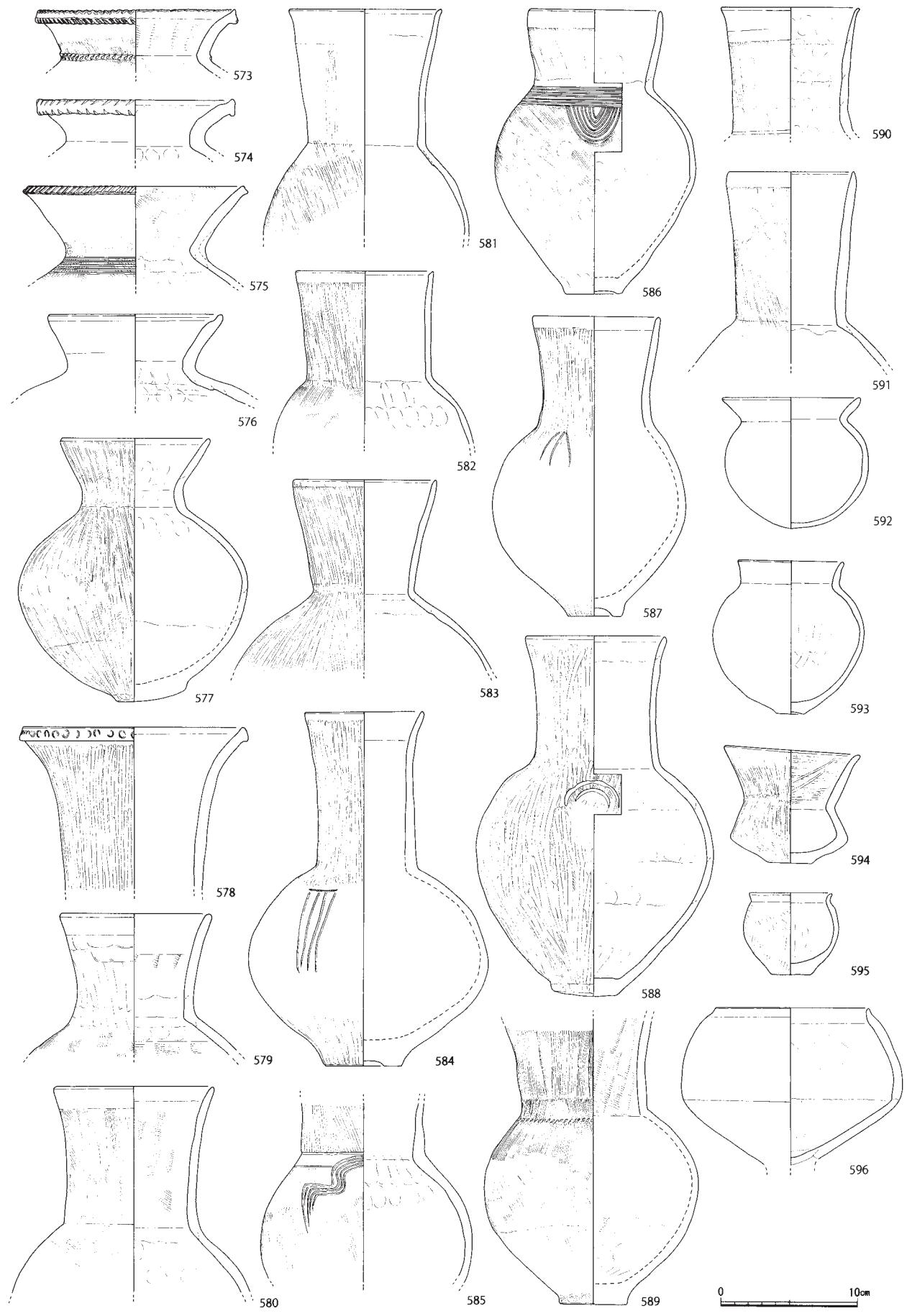
SK201



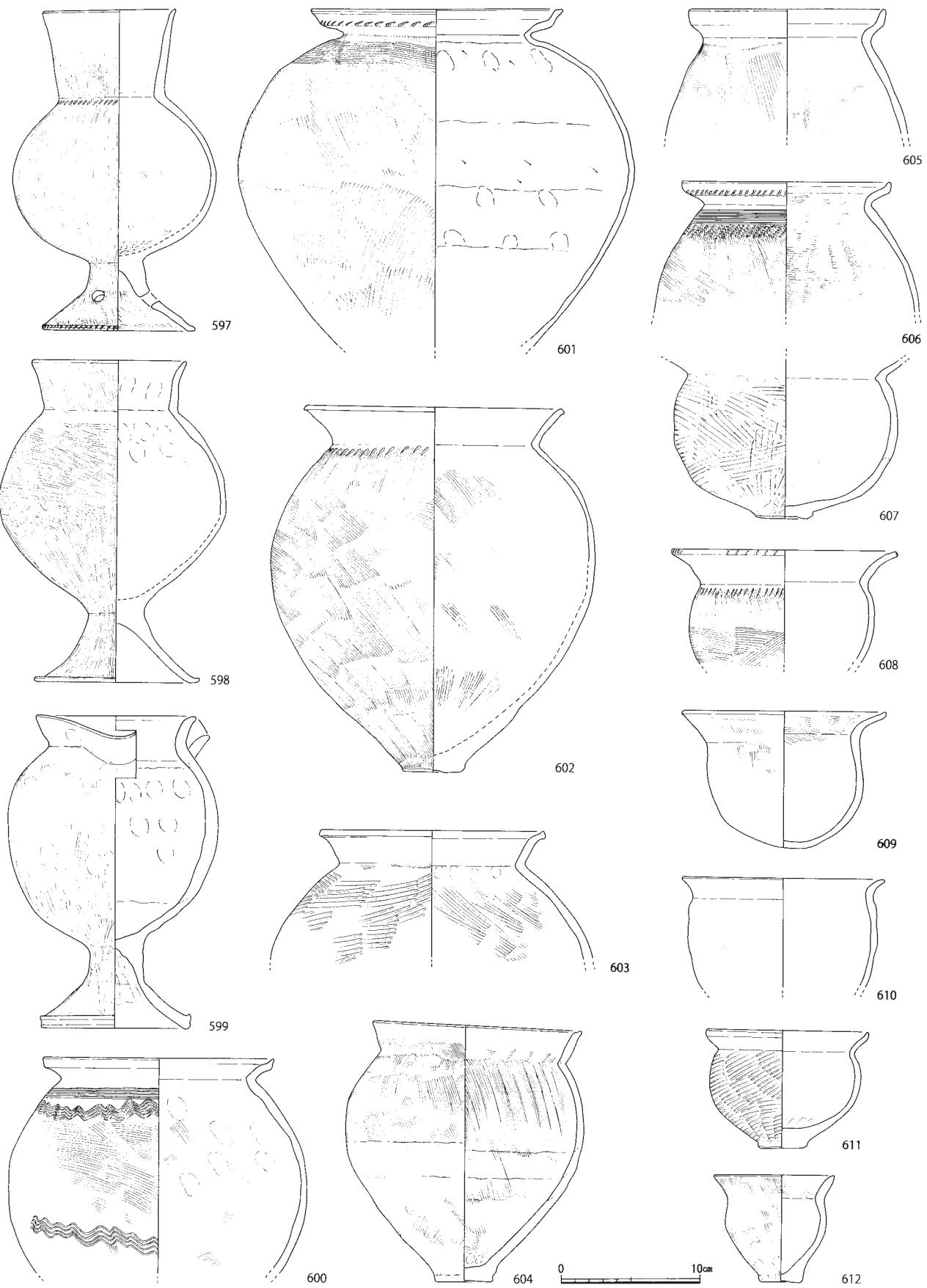
第46図 土器溜、SD3303、SK201・404出土土器実測図 1/4



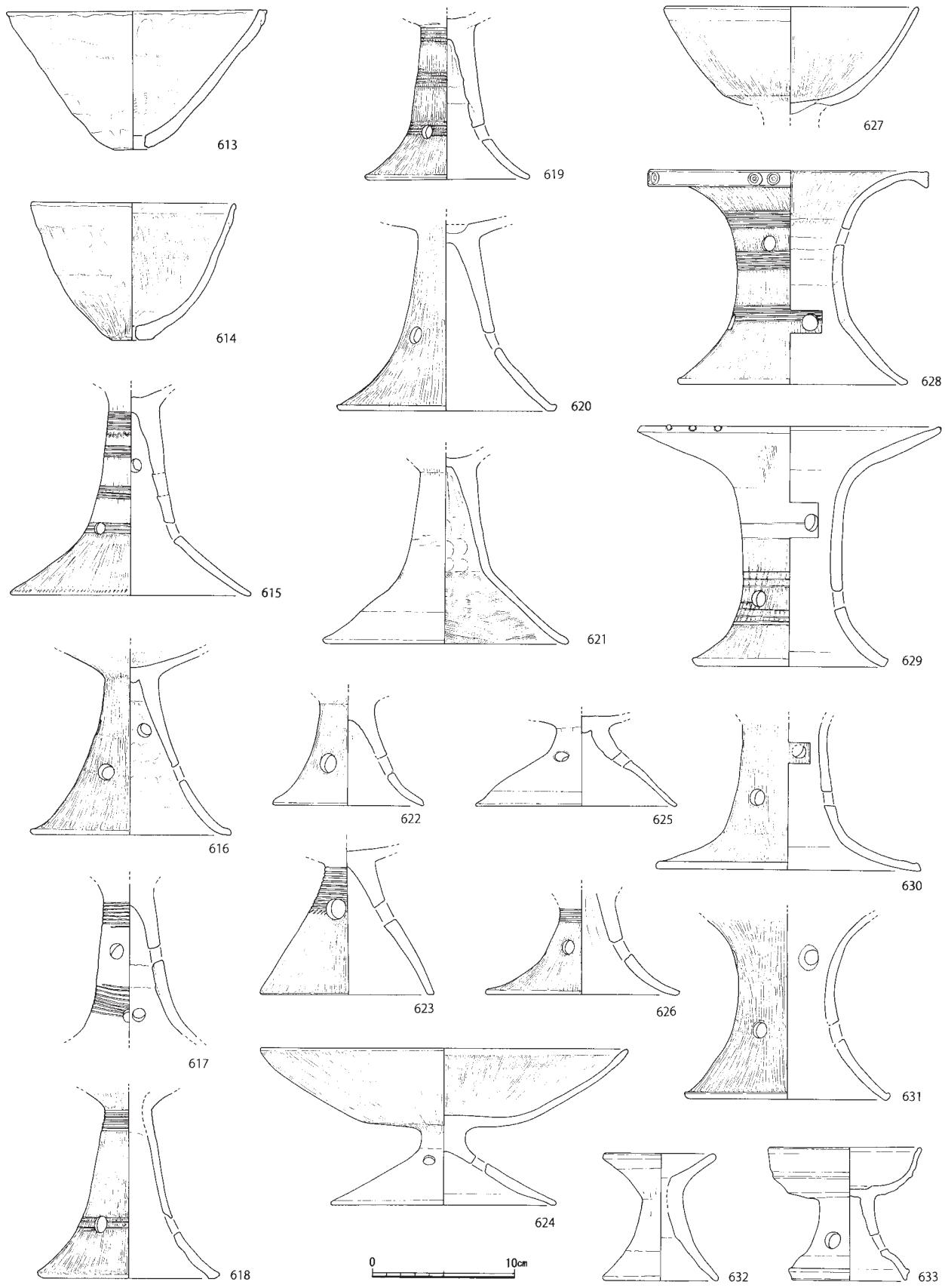
第47図 旧河道I出土土器実測図 1/4



第48図 旧河道Ⅱ出土土器実測図 1/4

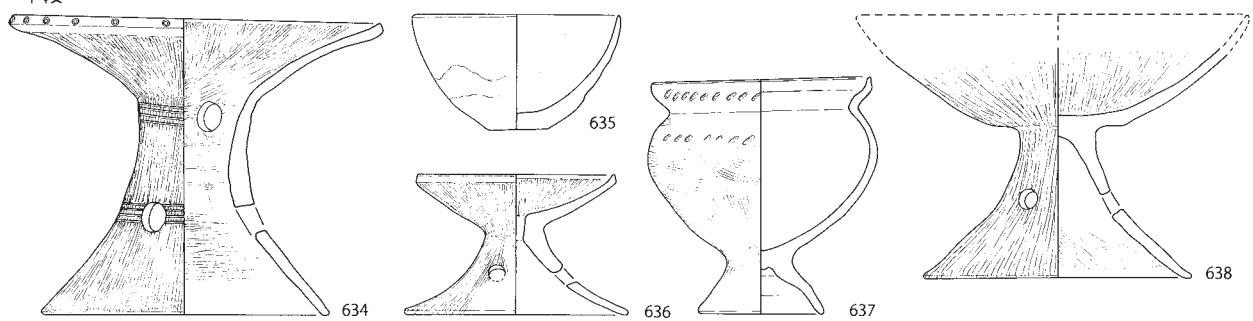


第49図 旧河道Ⅱ出土土器実測図 1/4

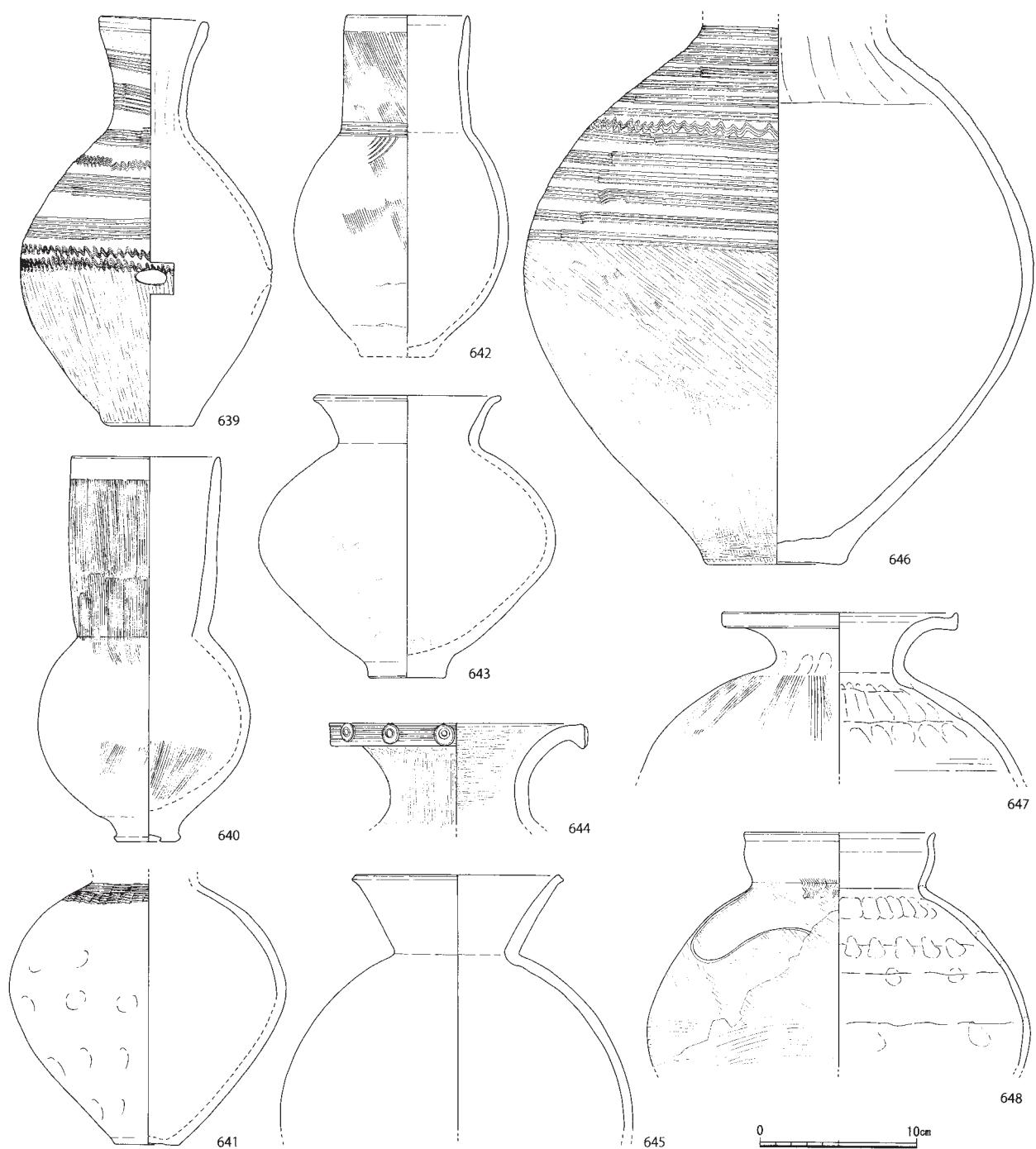


第50図 旧河道Ⅱ出土土器実測図 1/4

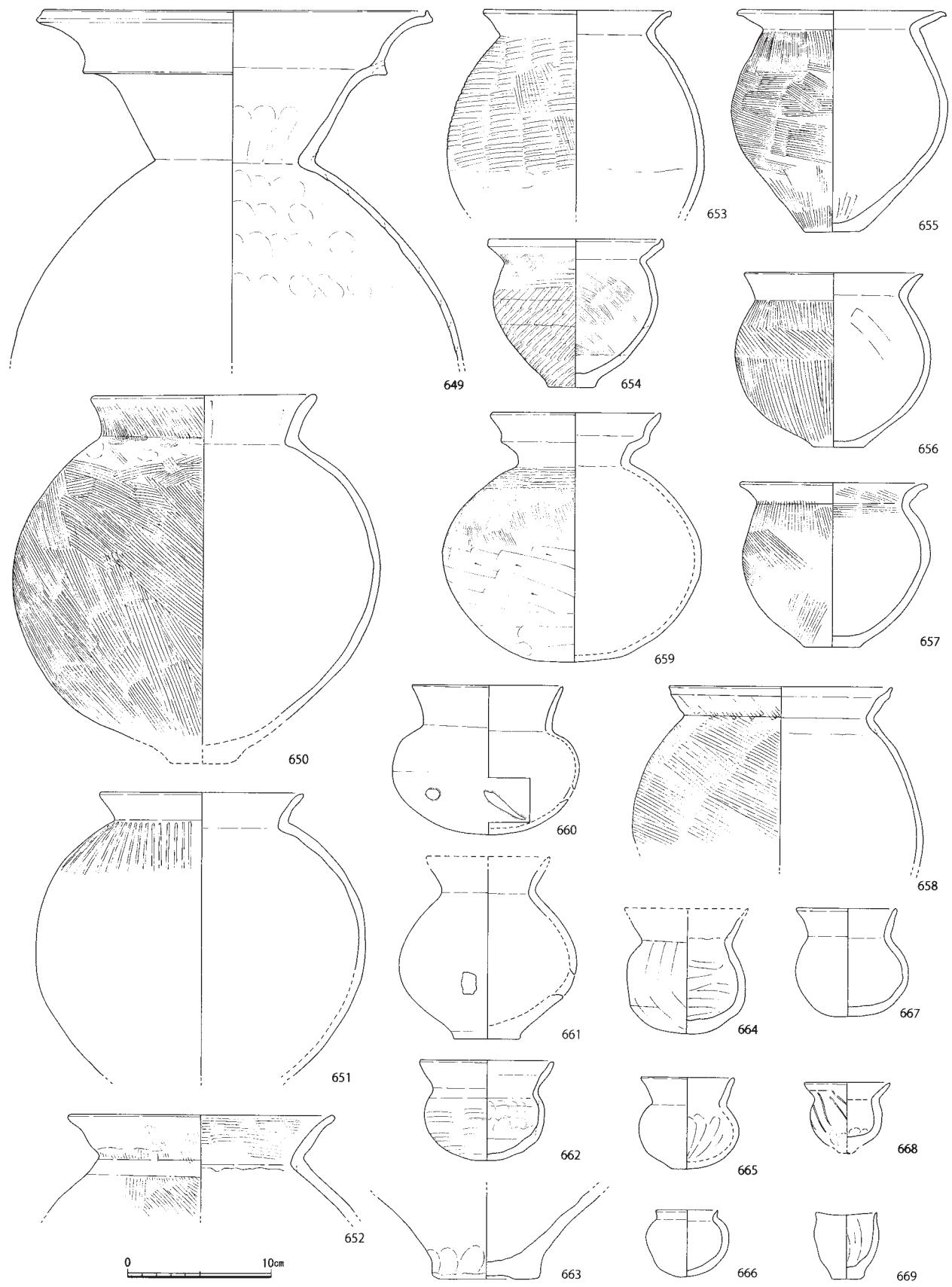
中段



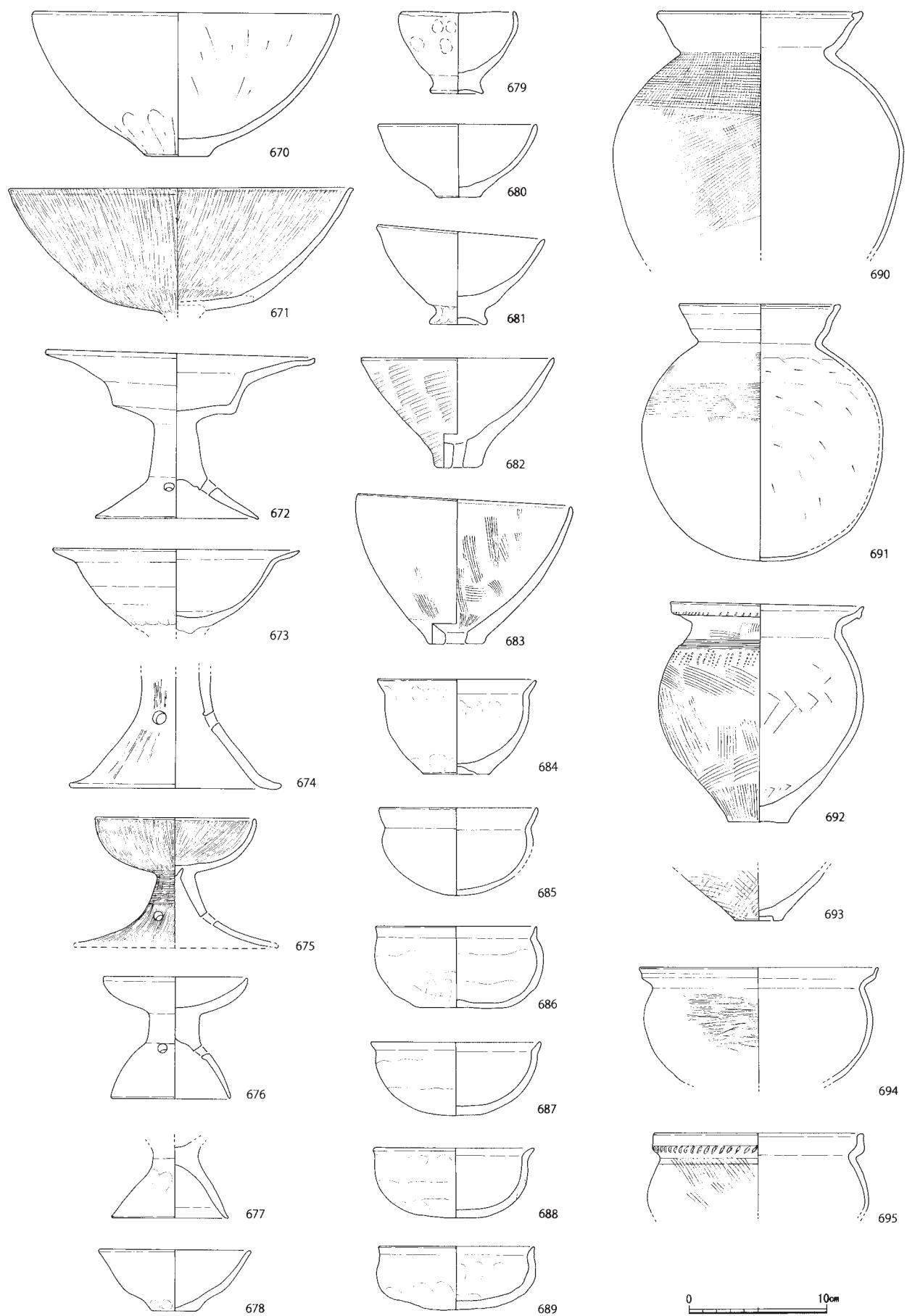
その他



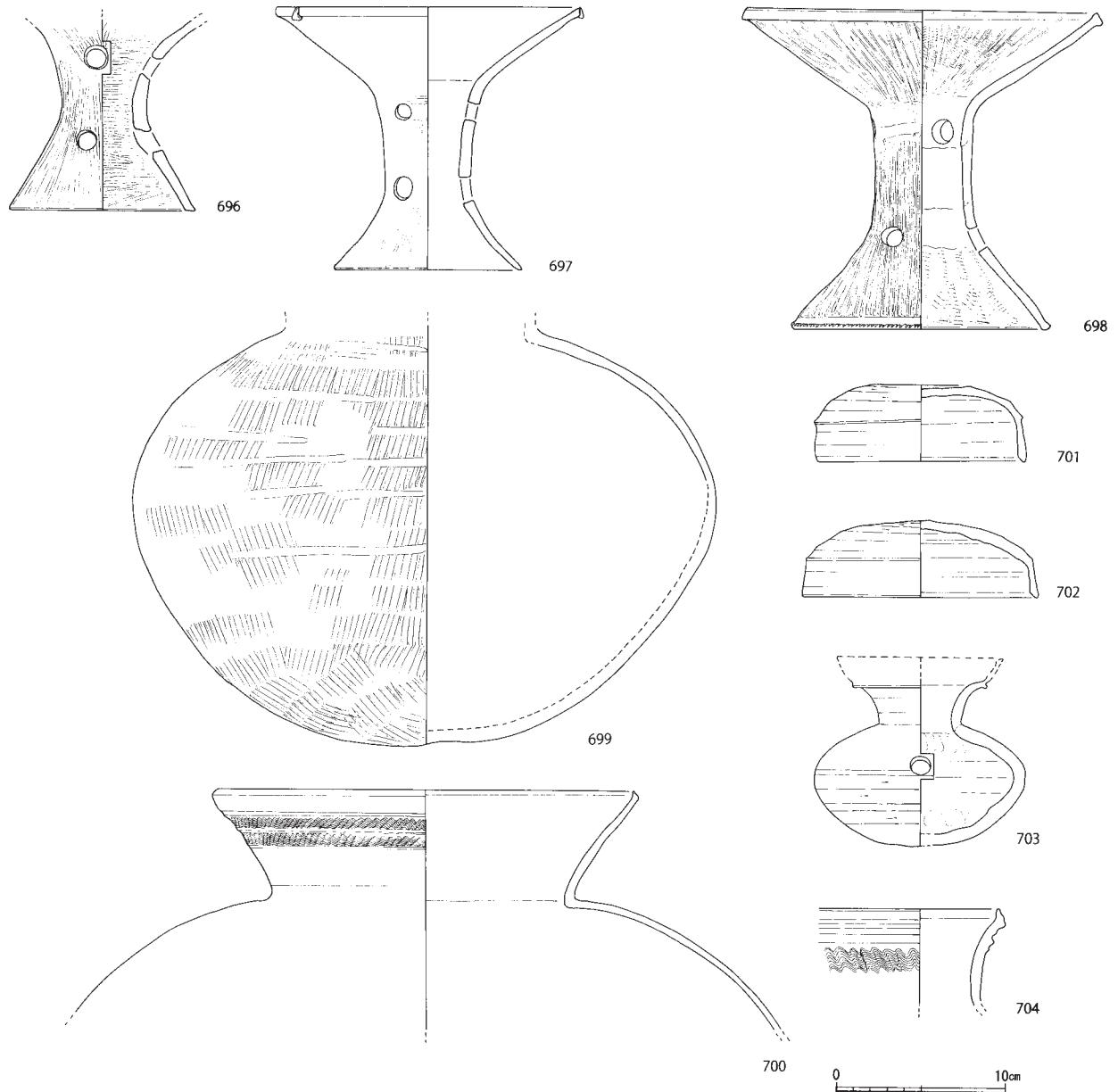
第51図 中段、その他出土土器実測図 1/4



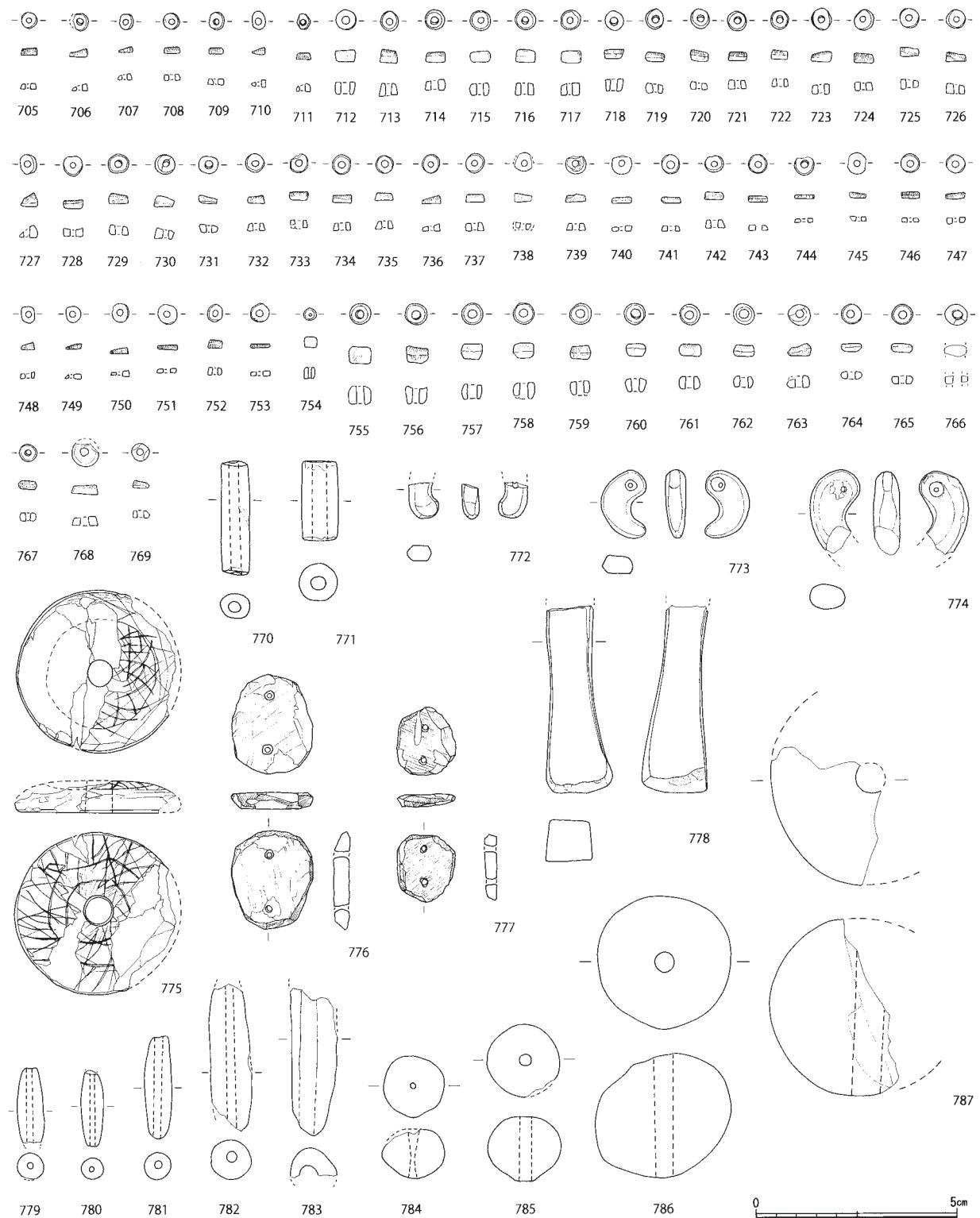
第52図 その他出土土器実測図 1/4



第53図 その他出土土器実測図 1/4



第54図 その他出土土器実測図 1/4



第55図 玉類、その他の石製品・土製品実測図 2/3

写真図版 1 遺構（1）



遺跡遠景（南南西から）



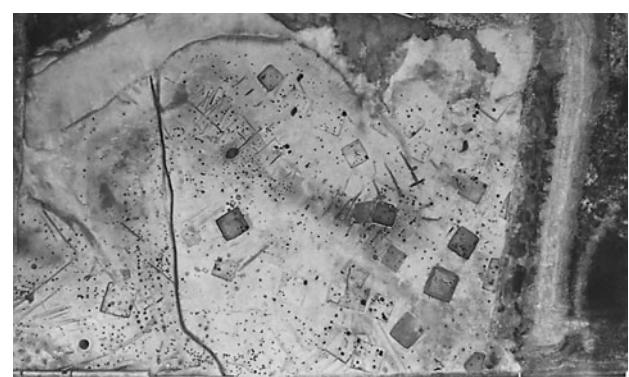
昭和52年度調査区西部



昭和52年度調査区東部

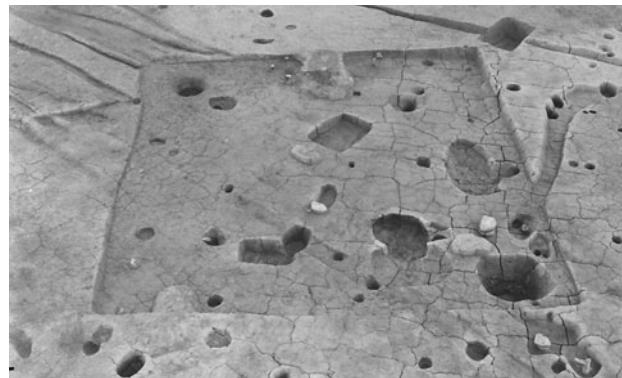


昭和54年度調査区



昭和53年度調査区

写真図版2 遺構（2）



S H3001 (南東から)



S H3001の竈 (北東から)



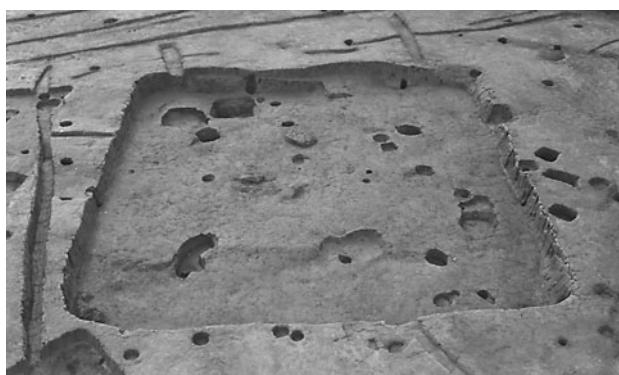
S H3002 (北から)



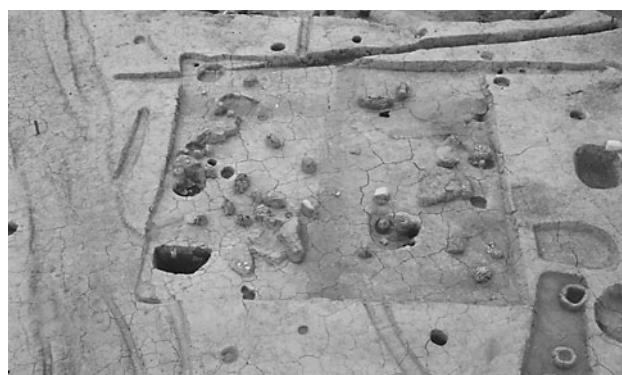
S H3003 (東から)



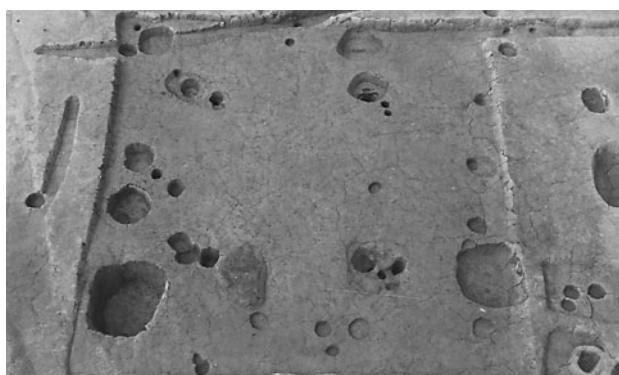
S H3004 (北東から)



S H3004 (北東から)



S H3005 (東から)



S H3005 (東から)

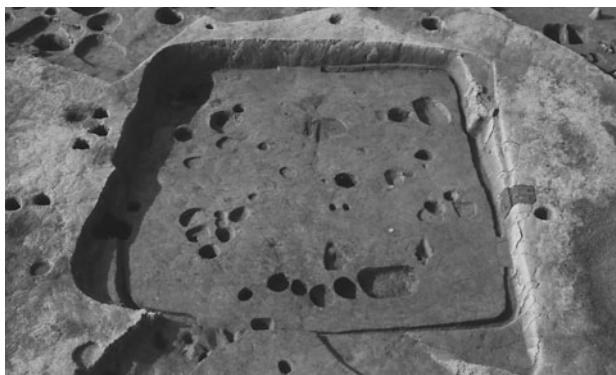
写真図版3 遺構（3）



S H3006 (東から)



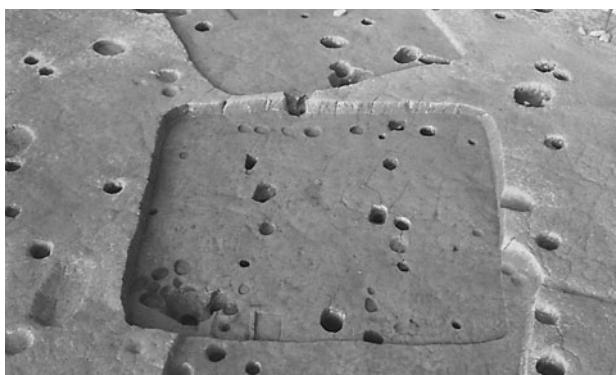
S H3007・3008 (南東から)



S H3007・3008 (南東から)



S H3009 (西から)



S H3009 (南から)



S H3010 (西から)

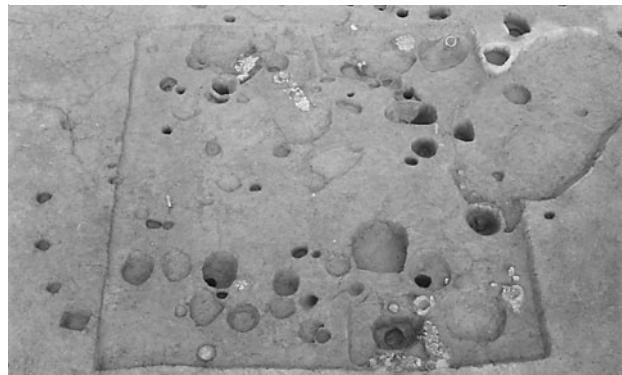


S H3011 (東から)



S H3012 (西から)

写真図版4 遺構（4）



SH3013（南から）



SH3014（南から）



SH3014の竈（南から）



SH3014の竈（北から）



SH3014の滑石製臼玉出土状況



SH3015（東から）



SH3016（北から）

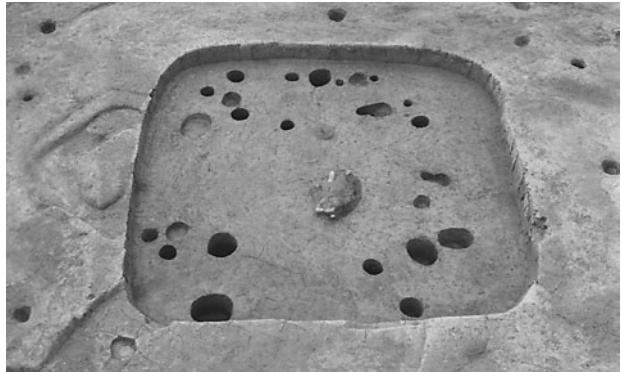


SH3016（北から）

写真図版5 遺構（5）



S H3018 (南西から)



S H3018 (南東から)



S H3019 (南から)



S H3020 (南から)



S H3021 (南から)



S H3021の竈 (南から)



S H3022 (南から)

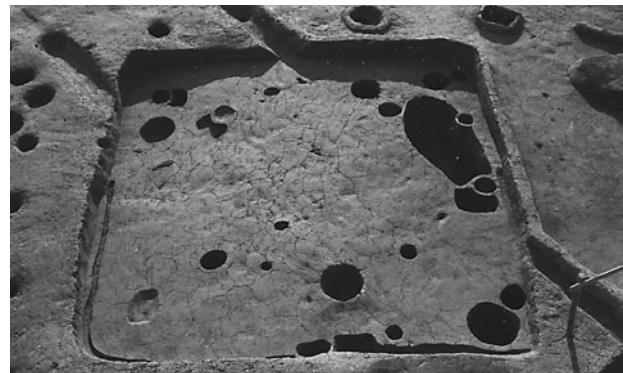


S H3023 (南から)

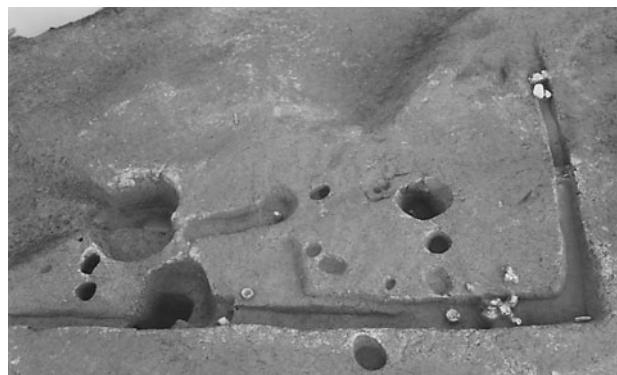
写真図版6 遺構（6）



S H3024（南から）



S H3025（東から）



S H3026（西から）



S H3027（西から）



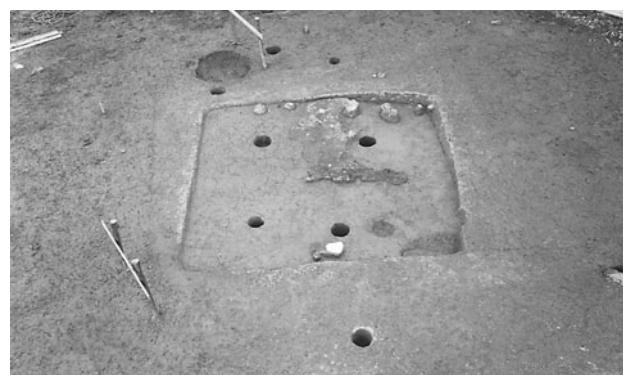
S H3028（南から）



S H3029（東から）

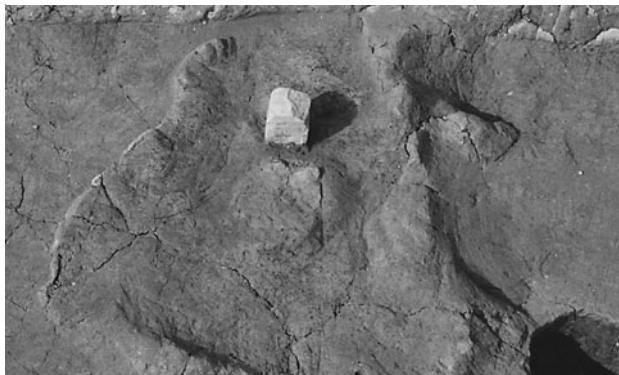


S H3030（南から）



S H3031（南から）

写真図版7 遺構（7）



S H3031の竈（南から）



S H3032（南東から）



S H3033の竈（南から）



S H3033の竈（北から）



S H3034・3043（西から）



S H3035（南から）

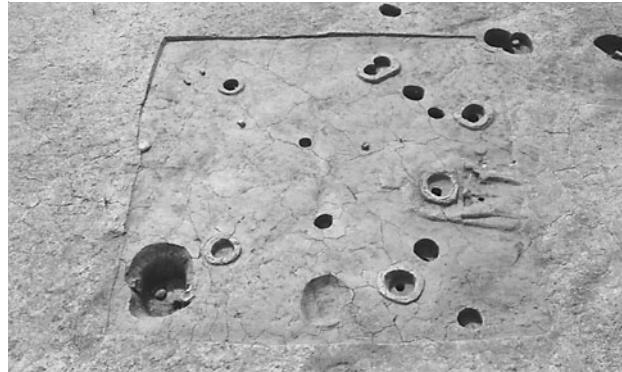


S H3035の竈（南から）



S H3039（東から）

写真図版8 遺構（8）



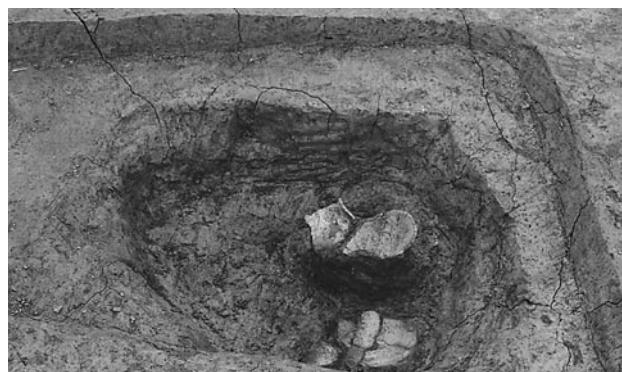
S H3038（南から）



S H3038の竈（西から）



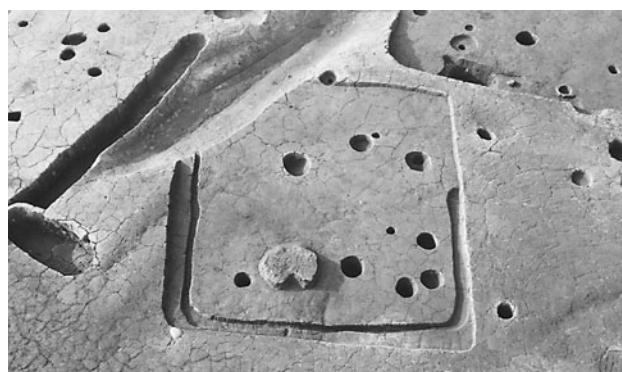
S H3041（東から）



S H3041の貯蔵穴（南から）



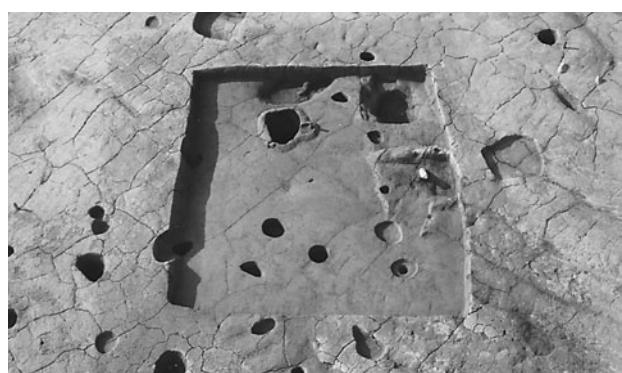
S H3041・3042（南から）



S H3044・3048（南から）



S H3045（東から）



S H3045（南から）

写真図版9 遺構（9）



S H3045の竈（北から）



S H3045の貯蔵穴（北から）



S H3046（北から）



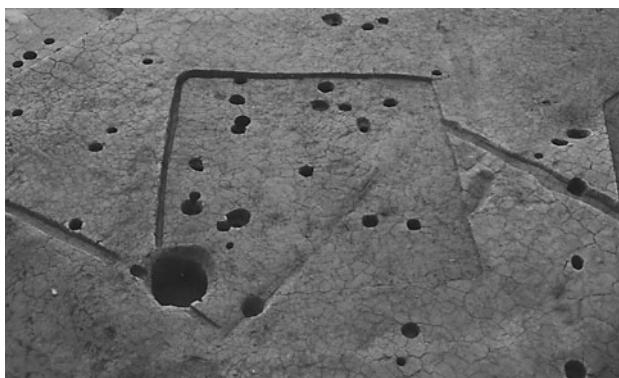
S H3047（北から）



S H3049（東から）



S H3051（南東から）

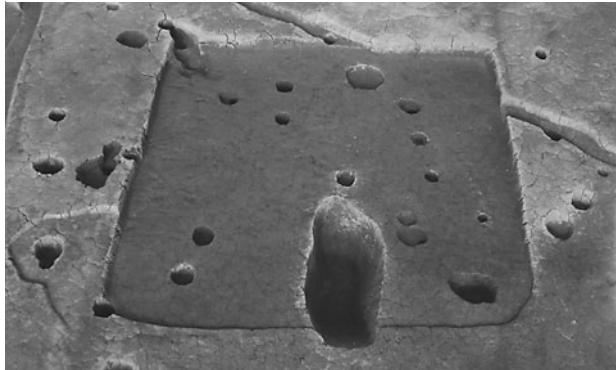


S H3052（東から）



S H3053（南から）

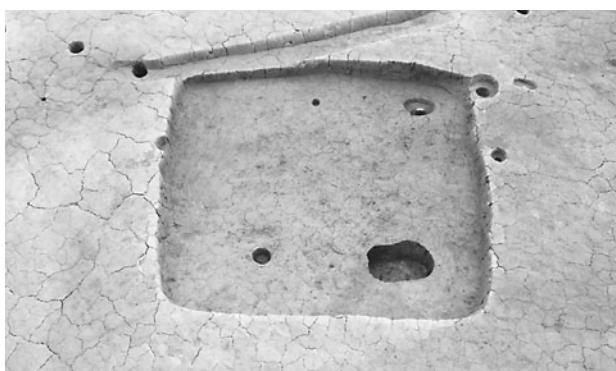
写真図版10 遺構 (10)



S H3053 (西から)



S H3054 (西から)



S H3054 (北から)



S H4055 (南から)



S H4055 (南から)



S H4056 (東から)



土器列 I (南から)



土器列 I (南から)



土器列 II (東から)

写真図版11 遺構 (11)



土器列 II (南から)



土器列 II (南から)



S K 402 (北から)



S E 4502 (南東から)



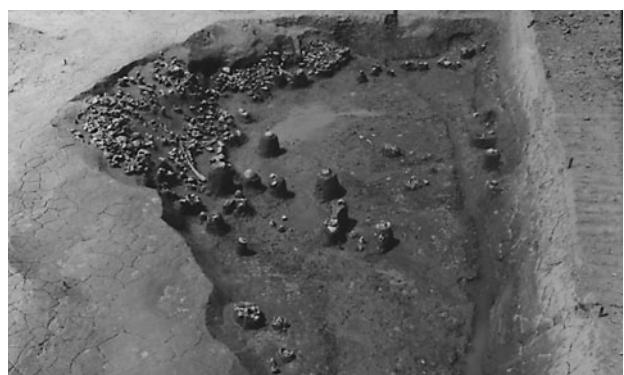
S D 3303 (南西から)



S D 3303重複部分 (南西から)



土器溜 (北東から)



土器溜 (南東から)

写真図版12 遺物（1）



39



40



60



189



260



271



266



270



279

写真図版13 遺物（2）



写真図版14 遺物（3）



写真図版15 遺物（4）



写真図版16 遺物（5）



448



460



467



477



496



502



504



520



521

写真図版17 遺物（6）



522



523



524



525



527



528



529



530



531

写真図版18 遺物（7）



写真図版19 遺物 (8)



写真図版20 遺物（9）



649



654



656



657



659



690



691



692



698

## 報 告 書 抄 錄

---

---

三重県埋蔵文化財調査報告 51-3

北堀池遺跡発掘調査報告  
—第三分冊—

発行年月 2011（平成23）年12月  
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 伊藤印刷株式会社

---